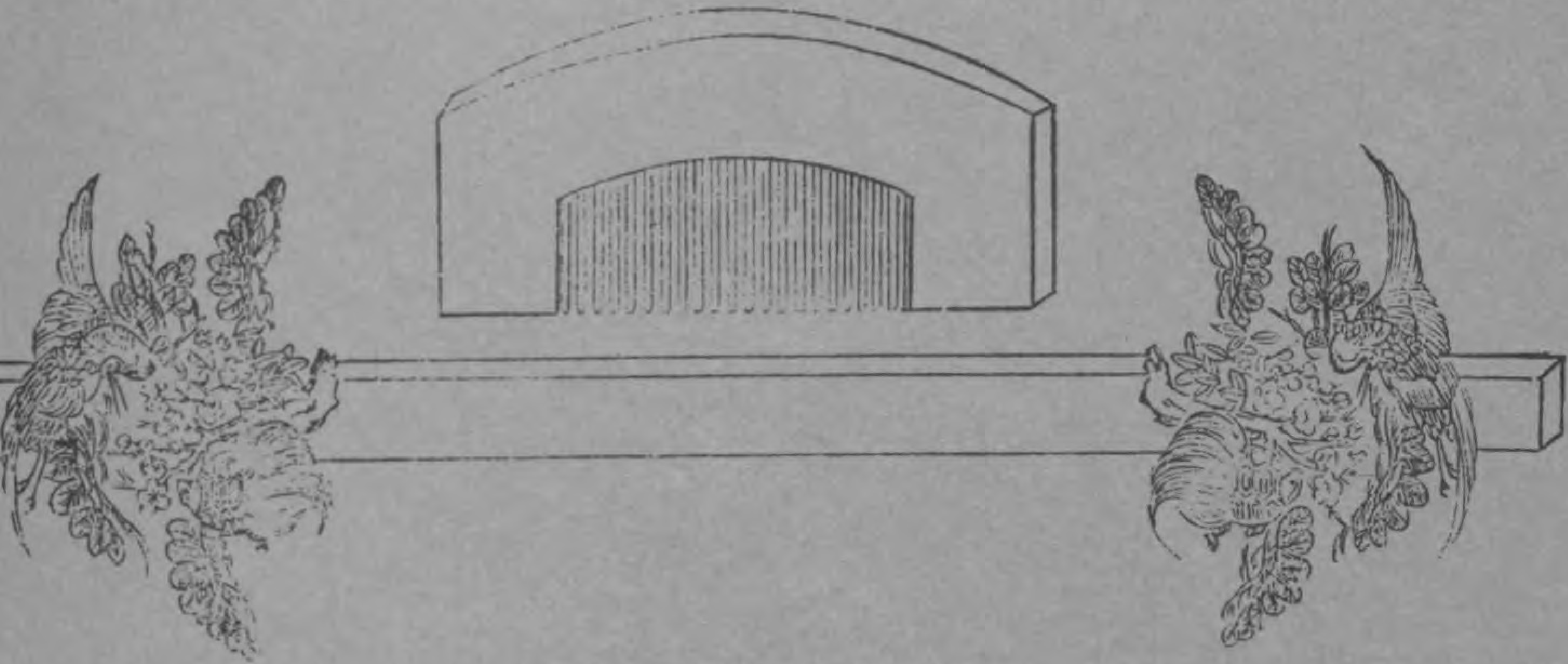
女鑑

明治三十五年三月二十四發兌

第貳百四拾九號



御祝儀用櫛笄

上圖櫛笄の材料は鼈甲を以て随一となせど鼈甲の中にも品質の佳からざる物少からず此品は鼈甲中の最良質を精選して良き工の手に成りたる物なれば透明にして狂を生せず浮を出さず幾久しく御道具となる可き逸品なり

本鼈甲製一組之價〔金三十圓　五十圓　七十五圓　一百圓
　　　　　　　　〔百五十圓　二百圓　二百五十圓以上

四方張製一組之價〔金八圓　十圓　十五圓　十八圓　二十圓
　　　　　　　　〔金二十五圓　三十圓　三十五圓以上

右の外御婦人装飾用品一式時々の流行に魁け新意匠の物品各種取揃へ居候間何卒御來車の上現品御高覽の榮を賜り度候市内は電話又は葉書にて御一報次第各種取揃へ貴覽に供候地方より御注文の節は御用品詳細に御認め代金御送り被下候へば御注文に應じ多數の内より精選仕即日小包郵便にて御送り可申候尤も御都合に依り代金引換へ小包應用致し御便利御取扱可申上候交換日數は市内一週間地方は里程の遠近に不依三週間以内は代金又は他品と御交換可致候

東京市京橋區尾張町

白牡丹本店

店主　松田幸治郎

（特電話新橋五百五拾壹番）

女鑑第貳百四拾九號

目録

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及び通運にて本社出版部へ御直送の事
○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下候事
○郵券代用は(一錢、三錢)一割増の事
○別に領收證を出さず若し強ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事
○未納税の來書は一切受取り申さゞる事

定價
一册 金拾錢
六册三ヶ月分 前金五拾七錢
十二册半年分 前金壹圓拾錢
廿四册一年分 前金貳圓拾錢
全國無郵送料

廣告料
五號活字廿字詰一行 金參拾錢
三分一頁 金八圓
半頁 金拾貳圓
表紙一頁 金拾六圓
色刷は特に御相談に應ず

明治三十五年三月十九日印刷
明治三十五年三月二十日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地 渡邊榮一
印刷人 東京市京橋區[illegible]二丁目二十一番地 [illegible]
發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 國光社
發賣元 合資會社國光社出版部 (電話新橋一六九三番)(電話新橋[illegible]八八、)

謹告

生義國光社創立以來各位の贊同を忝し十數年間拮据罷在候處不得止事情有之同社との關係を斷ち目下教育に從事專心從來の主義を鼓吹致候間不相變御芳情を賜り度此段辱知各位に謹告仕り候也

東京本鄕區駒込蓬萊町六番地
西澤之助

三版

杉谷正隆編

家庭歌訓 **修身百首**

菊版美本全一冊
定價金貳拾錢
郵税金四錢

再版

男爵高崎正風本居豊穎序故富士谷御杖述

土佐日記燈

菊版大和綴美本全三冊
紙數一千百餘頁
金壹圓五拾錢

第五版

西村茂樹翁序三輪田眞佐子著

女子處世論

菊版美裝表紙色刷
定價金貳拾錢
郵税金四錢

再版

標註 **雅文消息集**

菊版美本全一冊
定價金廿五錢
郵税金四錢
郵劵代用一割増

◉御注文は前金にて代價は郵劵代用なれば（壹錢、參錢）切手にて郵便爲替に候へば東京新富町取扱所へ御振込被下度候

發賣所
東京々橋區築地貳丁目二十一番地
株式會社國光社出版部

近日刊行

伯爵東久世通禧君題辭

高等教育會議議員湯本武比古君序

東京感化院長高瀬眞卿君著

家庭修身一夕話

教育

學校教育の眞理を解說し家庭薫陶の要領を談論し和漢洋三千年間の英雄豪傑碩儒偉人の事蹟を引證したるものにして後進教育の任に當れる諸學校の教師職員諸氏は云ふに及ばず苟も子女を教育して國家將來の良臣民を造成せんとする家庭には必ず一本を備へざるべからざるの珍書なり紙數凡四百五十頁製本美麗にして趣味饒多なる挿畫あり而も定價は僅に金六拾錢郵便税金八錢なり

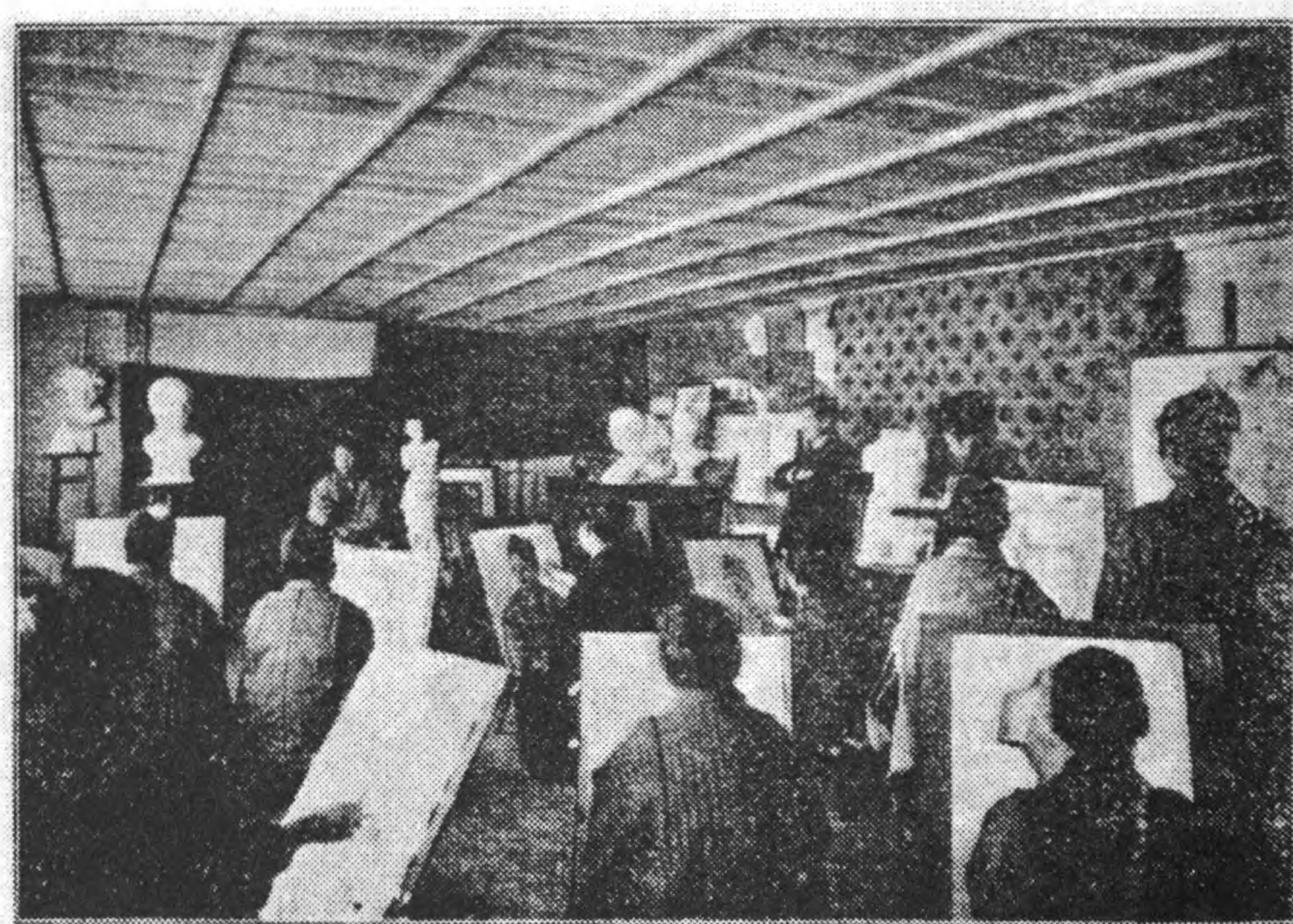
發行兼發賣所
東京市京橋區築地二丁目廿一番地
株式會社 國光社出版部
（電話新橋二六九三）



華族女學校教授兼學監從四位下田歌子刀自

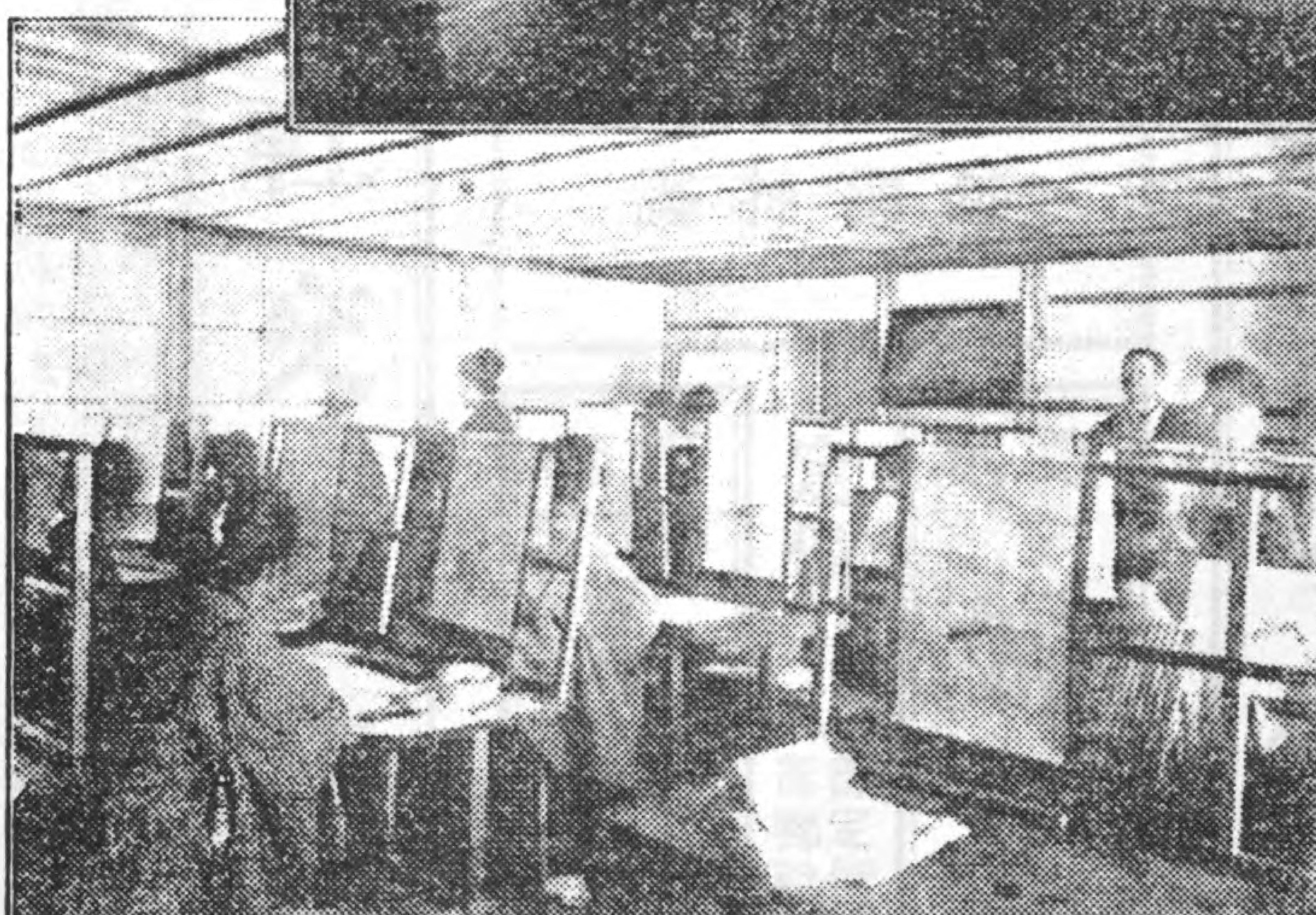


東京女子美術學校刺繡科教室



同校西洋畫科教室


東京女子美術學校裁縫科教室


同校日本畵科教室


同校編物科教室

新婦人觀

文學士寺內至誠君著述

●特色● 『新婦人觀』は、現時婦人の悲しむ可く傷む可き境遇に在るを慨し萬腔の同情を披瀝して、其使命を論じ、其特質を說き、其美點長所を擧げ、以て眞個二十世紀文明の婦人たるを得せしめんとす。

第壹 婦人の使命 既刊 新婦人會編纂

第貳 婦人美觀 既刊

▲定價 一部定價貳拾五錢●郵稅金四錢 四部郵稅共金壹圓に割引すべし▼

第參 女學生 既刊

一條成美君 毎編挿畫

第四 社交の女王 既刊 南風館藏版

●體裁● 本書は婦人の机上の侶たる可きものなれば、大に躰裁に意を用ゐ、挿畫は成美畫伯苦心の傑作を色刷して掲げ、表紙は精巧ある石版にて美麗此上なく、印刷の精紙質の美に至りては亦深く贅せず。

發行所 東京市神田區錦町二丁目 新聲社

文藝界

第一號

三月十五日發行

定價參拾錢 郵税二錢五厘

發兌 東京本町 **金港堂書籍株式會社**

府下特約店

●金昌堂●林平●青野●水野●播磨屋●岡崎屋●中西屋●寶永館●金刺●東京堂●森鐵●磊々堂●二河屋●服部●松邑●東海堂●北隆館●良明館●田沼●目黒●岸田●杉村●森江●榮進館

四版

紅塵庵俗禪譯

清風秀美
高優節雅

國の譽 獄の花

神氣清潔ある一名士が國事上の寃枉に座し惡魔の如き法官殘忍酷薄なる獄吏の下に苦悶するに當り高尙優美ある妙齡の一少女が溢るゝ計の熱情もて之を戀籍救護し其身神の安全を保ち苦心百端少女が神聖無垢ある愛情は遂に名士の熱心せる或る植物に古今無比の玉花を開かしむると共に其幽閉を救ひ大に名聲を字內に發揚し最名譽ある儀表の下に最淸廉ある結婚を爲すに畢る嶄新奇警高尙ある小說にして其寫出す處には彼の獄界の悲慘ある名士少女が淸淨ある相思の情愛等人情の精微讀者をして一讀恍然たらしむ世の紳士淑女一本を備て座右の友とせられん事を

彩色優美口繪挿繪入
總クロース菊版美本
金文字入全一冊
正價金五拾錢
郵税金八錢

再版

伯爵副島種臣題字
堀內文麿編

家庭の鑑

本書は章を親子、兄弟、夫婦、繼母、嫂、養子、師弟、主從、朋友、寡婦の十章に分ち明治の現代に於ける忠孝節義友愛貞操等の事實を詳叙せるものにして句々血を吐き言々人の肺腑を貫き讀むものをして感奮興起感極つて殆泣かしめむとするものあり書中收むる所のもの或は勅定の綠綬褒賞を賜り或は地方の美事として旌表せられたるものあれど皆是人の子弟婦妻の摸範に供すべき事實なり之に加ふるに婉麗哀痛の筆を以て事實を精密に寫したれば其情味の津々たる實に小說を讀むか如く身恰其地にありて其境に臨める感あり世の敎育家父兄及子弟婦妻の座右には一日も此可憐の書冊無かる可らず家庭及學校にも亦た此種の冊子を備へざる可らず、

菊版美本 全一冊
定價金拾八錢
郵税金四錢
郵劵代用一割增

發行所 東京築地二丁目 株式會社 國光社出版部

稟告

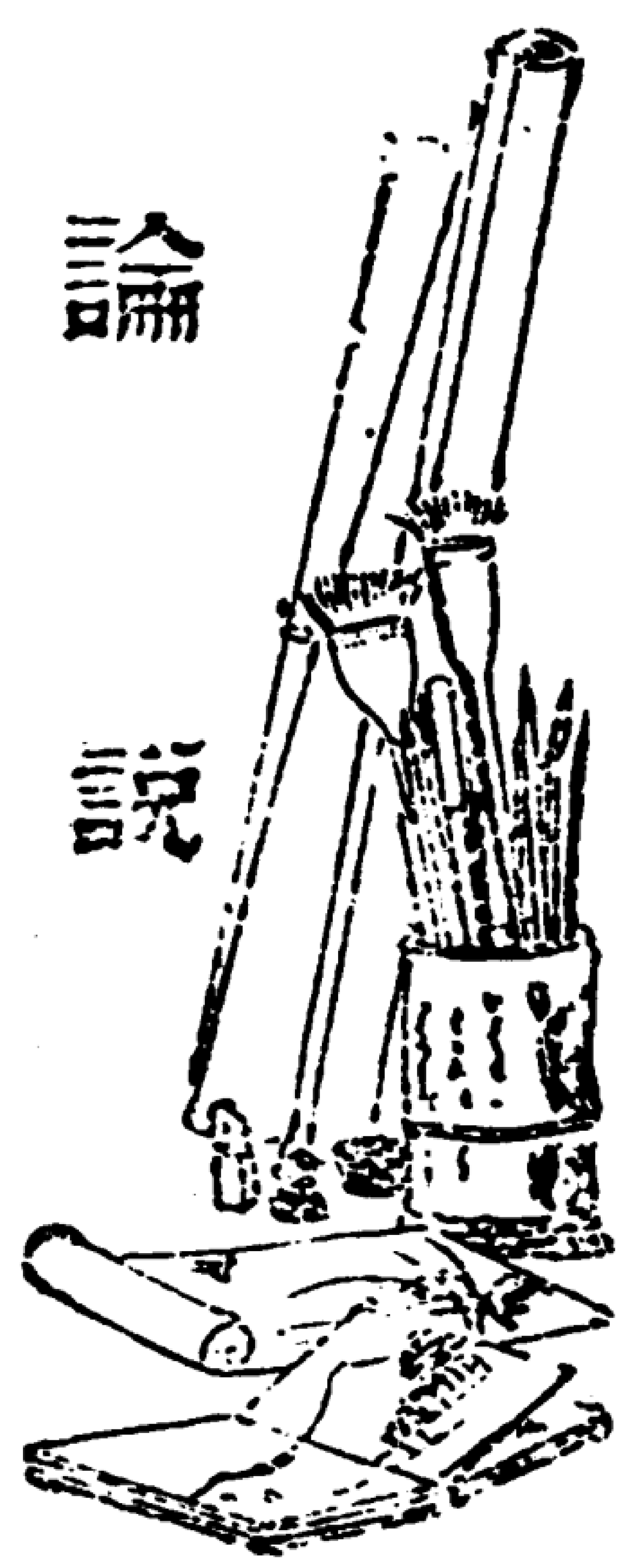
女鑑發賣に關する事務は是迄東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地靜思館書店をして取扱はしめ來り候處爾後國光社出版部に於て發賣する事に相改め候間自今代金御送付、御照會、及廣告に關する事件一切の事務は左記宛にて御申越被下度候也

追伸

爾來各所より新刊新聞雜誌及圖書等御寄贈は甚だ御手數ながら必ず**國光社出版部**へ宛て御寄贈被下度此段謹告候也

明治卅五年三月

東京市京橋區築地二丁目廿一番地
株式會社 **國光社出版部**
（電話特新橋八八番 電話新橋二六九三番）



論説

女子學問の心得

愛敬女學校長　棚橋絢子

學問は其人の才不才の相違はありますが、先妙齢に至りましたら嫁に行人は普通學は或程度迄は修業しなければならぬ、それから肝心の家政學である、是は中々容易な事ではない、世間では容易に思ふて居るけれども、是は他の學科と違ひ別して實地稽古が必用である、學理ではわかつて居ても、實地にはおさんどんにも及ばぬ事が往々ある、故に、學理で承知したらば直ぐに實地稽古を試みなければ役に立ぬ、就中裁縫割烹などは專ら修めないとふだん困難の絶間がない、それから學藝の中自ら長ずる所の學科を一科なり二科なり修む、是は其科により三年或は五年にて卒業になる事もあり、又一生修業しても終らぬ事もあれば、卒業は其科目による、是は全く修身の護り本尊ともなすべき心得にて修むるがよい、右は其人の智不智によりて淺深はありませうが、此心得にて學べば、普通一般の女子としては先々不都合はなからうと思ひます。

併是のみにて滿足は出來ませぬ、今一層も二層も女子の品位を高める學問がなければ、いか程藝能上達しても藝者と大相違はない、いつ迄立つても品位の高まるためしがない、故に其品位を高めやうと思ふたら、道德學を修め德義を以て世に處し、

世の流行を追はず、確乎不抜の氣性を養成し、富貴に處しては富貴に行ひ、貧賤に處しては貧賤に行ひ、自ら其心をとり廻し、世間にとり廻されぬ樣になる迄學問が進んだらば獨り品位は高まります。當時は學校にても修身の重き事は何れも稱へて居りますが、實際は行はれて居らぬといふてもよい程くづれて來て居ります、是は女子のみではないが、先第一に女子がこゝに心付かなければ國家の不爲である、それであるから、肝心の精神修養の學を修め、それを土臺として子女教育の根本となし、學校と並び進ましめたなら必ず一家は圓滿に暮すことが出來る、一家圓滿を押薦め、國家に迄及す位の意氣込になつてこなければ、眞の品位は高まりませぬ。故にこゝが大切の學問であると心得なければならぬと思ひます。

近來新聞や雜誌に女子の品位を高めたいとて、種種の方面から書立てゝありますのは、女子の身にとりては有難いといふてよいか、又恥しいといふてよいか、實に開明の世かく世間からも押わけ、自分も十分進んで行ねばならぬと思ひ、表面上の學問は昔とは違ひ、追々進んで來ましたに相違はないから、有がたいといふてもよいが、又一面からいへば、表面上の進んだゞけ、内心の學問も進まなければならぬのに、そこには一向念が入らないから、追々退いて來ましたに相違ないと思ふ、只口には高尚〳〵とはいふて居るが、肝心の其心術の學問がたらない故、自ら卑劣に陷ることは、恥しいといはなければならない、かういふ譯で、内外の相違が反對の姿となつてはほんとうの位置は得られません、故にこれからは、其内の方にも一層も二層も念をいれて、内外一所に進む樣にしなければならぬ。併學問は總じて其根本が大切で

あるから、先其根本をかためて、それから枝葉に及ばなければ榮えるためしがない。其根本をかためるには、中村惕齋先生の姫鑑などは、日本支那をくみ合せ、道德を主として、女子の爲めに作られたる書であるから、方今西洋流の智育にのみ走る風に傾いて來た時節には、實に適當かと思ふ、其他貝原先生の著書も、高尙なる所を平易にとかれてありますから、熟讀玩味して、其眞面目を少しにても手に入れたらば、其手に入り次第根本がかたまります、根本がかたまつて來れば、方向に迷はない、方向に迷はなければ、自然と卑劣な根性が起らない、卑劣な根性が起らなければ、いはず語らずして高尙にある故に、高尙を願ふなら、此根本をかたくする學問に進むことが肝要であると思ひます。

女子教育の方針

大日本教育會理事　川村理助氏口述

私は一寸女子教育に關して考へたことを話して見やうと思ひます、

全体我國の現在の婦人と云ふものは、何う云ふ人間が一番理想上の婦人とすべきものであるかと云ふことが極まつてゐない、一方には益軒先生の女大學のやうな考を持て居るものがある、一方には福澤先生の新女大學の樣な考を持つて居るものがある、其間極めて調和と云ふものがない、ソコで其の、古い考を懷いて居る人は女子の行と云ふものは、凡べて消極的に依つた方が宜しからうと云ふ考である、又新しい西洋流の考を持つて居る人は積極的に、出しやばつて仕事を爲た方が宜からうと云ふ考を持つて居るらしい、如斯女子教育の

方針が極まつて居ないから、女子教育者も手の附けやうに殆んど當惑して居る、亦婦人自身も如何なる資格を具へた人間に成つたら宜いかと云ふ理想を形容くることが出來ない、これが誠に困つた話であるのです、併しながら私の考では、其一方にばかり偏して、新しい考も取らず、舊來の沿革歴史と云ふものも考へずにやると云ふことは、誠に宜くないことである、一方には諸外國の宜い所を取り、一方には我國の從來の宜き習慣と云ふものは保存して置かねばならぬ、殊に婦人と云ふものは、男子に較べて見れば、一方が剛であれば、一方が柔、一方が活潑であれば一方が温順だと云ふやうな關係があつて、何所までも優しいと云ふことは女子の性質として往かなければならない、けれども消極的の極端は、唯優しいばかりであつて、是柔と云ふ意志の外ない人間になつて仕舞ひ、又積極的の方の主義を除り鼓吹すると、所謂素直とか、優しいと云ふことは無くなつて、遂に彈指さるゝ女が出來て仕舞ひ、所謂婦德と云ふものを害するやうに成つて來る、ソコで外面は、如何にも殊勝らしく、優しく、柔順であつて、物事に角立たぬやうにすると云ふことは、女として尤も大切なことである、けれども其の心の中に剛毅の德があつて、一つの主義、品格と云ふものが、チヤンと具はつて居らねばならん、外貌が唯優美と柔順であつてお雛樣見た樣な人間で、精神に確りしたことがなければ、實に役に立たぬ人間である、況や生存競爭の劇しい今日の世の中にあれば、有爲なる夫を幇助し、有爲なる子女を養育して往かうと云ふには、只優しいばかりで往くものじやない、前言ふ所の毅然として動かす可らざる意志と品格と云ふものが具はつて居らねばならぬ、

で斯かる確りとした意志が固定して居る婦人であつて、始めて賢母となることが出來るのである、所が近來の女子教育者は、果してサウ云ふ所に深く注意されて居るか、又今日の婦人方は斯かる所に充分考を起して居るか、私の見る所に出つては、斯る考は維新前の武士の盛んな時代よりは、女に餘程其の考が衰へて來て居るやうに思ふ、只翩々たる所の、優美なる所の、世の中の飾物見たやうな狀態を以て滿足し、相率ゐて斯る婦人となりたいと云ふやうな考を持つて居る人は多くはないかと思ふ、之れは非常な間違である、只外貌の優美、擧動行爲の柔順と云ふことばかりを主として居つたならば、我國は到底世界の生存競爭に耐ゆることは出來ないのである、今後の我國民は決して世界の主もなる人種となることは出來ないのである、夫故に今日の婦人は尤も堅固なる意志を養成すると云ふことに注意するのが必要であらうと思ふ、

堅固なる意志と云ふものは、積極的に云へば、乃ち主義方針に依つて進む所の婦人である、消極的に言へば貞操を堅く守る所の婦人である、私は嘗て斯う云ふことを聞いたとがある、彼有名なる水戸の藤田東湖の母は非常の賢婦人であつた、東湖が一世の豪傑と人に仰がれたと云ふのは、一ッは父の感化と云ふものが多かつたでもあらうけれども、冥々の間に於ける母の感化が又與つて大に力ありと云ふことは、我々の想像し得る所である、御承知の通り東湖は安政年度の江戸の大地震に家が潰れた爲めに不幸の死を遂げたのである、然るに東湖が不幸の死を遂げたと云ふのは何の爲で有つたかと云ふと、實は己れの母が外に出て居らなかつたので、東湖は一旦逃げ出した身を以て再び

家の中に飛び込んで母を擔げて外へ連れ出したのである、母を外へ連れ出すと、其刹那に梁が仆れて來て、東湖を殺して仕舞つた、デ東湖の母は不思議にも一命を助かつたと云ふ次第である、其時水戸老侯即ち德川齊昭侯は東湖の死を非常に惜しまれて、實に我片腕を失なつたと言はれ東湖の母を召されて、東湖は同じ死したもの〻、母を救はんが爲に一命を捐てたのであるから嘸悲しいであらうと、斯う云ふお言葉が懸つたのである、スルと其母が云ふには、虎之助が斯かる老耄れの母を救はんと致した爲めに命を捐てたのは誠に言ひ甲斐ない次第で君の爲めに捐つべき命を一人の母の爲に捐てたのは如何にも殘念至極でございますと申上げて少しも愁の色を顯はさなかつたと云ふことである、己れの杖とも柱とも賴んで居る所の子供が、己れを救はんが爲めに不幸の死を遂げた事は、却つて喜ばずして君の爲めに命を捧げることの出來なかつことを嘆いた、人情より言へば、其母の胸の内は千石の淚を湛へて居つたであらう、併しながら女々しい人情の爲に、一滴の淚をも溢ばさずして、男子の正さに務むべき所の義の爲に身を捐てることが出來なかつたのを惜しんだと云ふことは、餘程見識の高い婦人でなければ出來ぬことである、又主義方針が堅くして、品格と云ふものが確かに定まつた人間でなければ、斯かることは言得ぬのである、此母は女の事であるからして外面に向つて君臣の大義名分などと云ふやうなことは餘り口に爲たと云ふことはなかつたらうけれども、心の中には、斯の如き立派な品性が確定して居つたのである、で斯る立派な品性を具へた婦人の腹に藤田東湖の如き人傑の生れたのは、不思議でないと思はれる、今の世の所謂翩々たる婦人

に、此東湖の母の如く外に才智藝能のあるやうな風を見せずして、內心に堅く守る所のある婦人と云ふものは誠に少ないことであらう、今日の婦人に斯う云ふ深く守る所のある者が多いかと云ふに、殘念ながら斯かる立派な品格を持つた婦人は少いと云はなければならない、是は世の中の風潮の然らしむる所でもあらうけれども、一は女子敎育と云ふことに付いて斯う云ふ邊に考を注ぐ人の少ないのと、一には婦人自身が理想とする處の婦人の性格と云ふものが斯かる高尙なる品格を目的と爲ない所にあるであらうと思はるゝ、婦人の餘り外に向つて、才智走つたのは如何にも見惡いものである、才智藝能は澤山あらうとも、容易く是を外に見はさずして、已を得ざる必要の場合に當つて始めて之を持ち出すと云ふので如何にも其優美に奧床しく見えるのである、口やかましく才智走つて、知らぬことも知つた風をするなどは、如何にも見惡いことで、我國の從來の習慣沿革に添はないことである、斯う云ふことは矢張元の習慣を成る可く繼續して往つた方が宜いであらう、其かと云ふて又餘り因循姑息であつて主義も見識も持つて居ないと云ふやうなことは、之は又頗る匡正をしなければならぬことで、其兩者の中間にこそ眞理は含まれて居るではないかと考へる、女子敎育の標準の定まらない際に在つては、已むを得ないことではあるけれども、此毅然たる意志を堅く持つて往くと云ふことは、敎育家幷に婦人自身に於いては深く注意をして貰ひたいものである。

（未完）



女（承前）

女子大學講師　戸川殘花演説

それから德川氏になりましては春日局と云ふものがある、是は奥樣ではございませぬから内助とは申しませぬが、德川氏の爲には餘程の力のあつた人でございます、即ち内助と云ふやうな資格のあつた人で女中頭でございます、其春日局の流を汲んだ德川氏の女中衆や、諸侯奥向の女中頭と云ふやうな者には大に見るべき婦人があるのであります、併し此時代に於ける奥樣などゝ云ふものには、所謂人物と申すべきものがございませぬ、殆んど内裏雛と同じことで、お坐り遊ばして入らつしやいと言へば、二時間でも三時間でも座つて居り、御飯を召上れと云へば「ハイ」と言つてお箸を取る、それで常の慰は何であるかと云へば、歌留多、遊藝、お琴などでございまして、先づ朝起きると顏洗ひに一時間斗り掛り、御飯を上るに一時間、それからお召替になつて、次に將軍樣へ御機嫌伺に參られ、その御辭儀を遊ばすのが一時間位掛る、そこで將軍樣は表へお出になり、御臺樣は奥へお這入になり、お菓子を召上がり、お茶を喫れる、それで晝にある、晝になると公方樣の處へ、お召替へお化粧をしてお目に掛かる、こう云ふ風習でしたが、此風習は、大は百萬石の加賀樣より小は一萬石の諸侯に至るまで、其形を倣つて、全然其時分の奥樣は人形雛同樣でありました、でありますが此の御臺樣や奥樣に引替へまして、大奥の女中頭、老女とか申す女中の中には、隨分男も及ばぬ「エラ」物がありました、西郷隆盛の如き大英傑も、鹿兒島の奥女中ばかりは濟度が出來ないと呆れた事があります、一つの例を申上げると、

昔し徳川氏で用ゐた大奥の文箱と云ふ物の中央を縛る絹紐は、非常に長かつた、箱の中へ文章を入れて其紐でグル〳〵幾遍も卷いて先方へ持つて行く、而も其紐は年々に取替へなければ成らぬ如何にも無駄である、夫を時の老中水野越前守が見て(當時は御儉約の最中であるから)此の紐は如何にも無駄であるによりて、以來チヨイと縛れるやうな短かい紐を用ゐよと云ふことを奥女中に申渡した、スルと女中の曰く、御儉約を仰せ出だされましたからは此文箱の紐も短かくするのは御最もではあるが然し此文箱の紐を長くするはそも〳〵御臺樣の御壽命を譬へて長くしてあるのでございます然し御臺樣の御壽命は何うでも宜しいと仰せあるなれば速に短かくいたしませうと云つた、流石の水野越前守もグッと詰つて仕舞つて、夫では仕方が無いと苦笑ひをして夫なり濟んで仕舞つた、さう云ふ風の有樣で西郷も日本の革命をすることは出來たが、鹿兒島奥女中の改革は出來なかつた、其位ゐ女中頭とか老女とかいふ物には、中々利かないのが居りました、是等は先刻申上げた春日局一流の老女で充分天下を寢かすことも起すことも出來ます斯う云ふ事を考へますると奈良朝前後にも立派に婦人は器量を顯はして居つたので厶います、夫から平安朝に成りましても兎も角器量を顯はして居つたが、武士的思想の發達と共に婦人の發達の仕方が變つて來たのであります、否な發達したとは殆んど云へない、先づ武士的思情と優勝劣敗で、勢押付けられて發達することが出來なかつたのである、夫は德川時代に成つてからは頻りに儒敎を奬勵した爲にガラリと婦人の性質が變つて來て、極りの良い温順しい消極的の性質に變化して仕舞つたのである

そこで明治の時代でございます、明治の時代に成つて、貴女方は果して……明治の社會に……婦人は二十世紀の此世界を手を振つて濶歩することが出來るものであるか出來ないものであるかと云ふ御心配がありませう、併し私が見聞したる賢に「エライ」婦人、驚くべき婦人がございます、彼の鹿鳴館裏の舞踏會のある時分滿腔の熱血を絞り門外に涙に暮れた婦人中島俊子、惜しいかな肺患に罹り藤澤へ退隱して近頃遂に死去なられましたが男子に劣つた所は少しもございませぬ、其他奥村いほ子さん、浦鹽斯徳に行き支那四百餘州を横行せられ今は愛國婦人會の爲めに、自分の生命と財産を抛つて働いて居られます、彼の方は十六の時に義經袴を穿き紋付の着物を着、朱鞘の大小を差し、頭は切下にして、何處までも男子を裝ふて、丁度元治前後の事なるが、他國人は一人も入れないと云ふ長州即ち敵國へ一人で乘込んで往つた、所謂探偵に行かれたのです、十六や十七の少女が男裝をして長州の殺氣滿々たる中へ探偵に這入ると云ふのは尋常の婦人の出來ることではありませぬ、又其他には跡見さん、山脇さん、今日此處へ出られる筈であつた下田歌子さんなど、皆學術上なり政治上なり、相互に話することの出來る立派な婦人です、此外申上れば兩方の指を屈して數ふるの暇がない程、豪傑と云ふと惡いがエライ女丈夫が澤山にあります、是から先き日本の社會を、婦人は何う云ふ風に經營し、如何なる風に改革して行くかは、實に望み春の海の如しと云ふ有樣でございます、併しながら貴女方に一言申上げたいことがある、是は日本ばかりではありませぬが、古來人物を評するに道德を標準とする人が多い、先刻申上げた

女帝と申て、平政子其他の人々の內行は修つて居るかと申すとさうは參りませぬ、どうも八方四面金甌無缺と云ふ人間は少い、ソコで公平の歴史家が評しますれば、この婦人には斯云ふ方面には缺點があるが、斯う云ふ働きをするのはエライと見分けなければなりませぬ、兎も角日本の婦人は、デルニチイ、ヒユーマルチイ、アビルチイの三ツに乏しい、就中日本の婦人は、器量と云ふ點に於いて少し考へなければなりませぬ、

世に男子ほど女に對して酷なものはござりませぬ……私は隨分子供を持つて居りますが、若い時は、此子供を譴るのに男の子も女の子も、木へ縛り付けて譴めたことがある、所が末の子供になる程なか／＼縛れない、何故縛れぬかと云ふと、實に可愛い念と自分の老ゆるに連れて子供は厳しい譴方をしても旨く往くものでないと分別が出るのであります……男子の女子に對するは宛ら若い時分に子供を持つて居るやうなもので、婦人の一言一句に向つて彼是と責める、那の女は斯う云ふことを書いたの、斯う云ふことを爲したのと、人間はさう云ふ風に責め立てられては耐る者ではない、所謂龜の子の如く、首を藏め、手を藏め、足を藏め、尾を藏めて仕舞はなければならぬ、今の婦人は即ち龜の子と同様になる、是れも男子の酷の致す處なれば、男は出來るだけ、親切に柔順に、寛大の心を以て婦人に接せねばならぬことであります

ソコで女子の方に於ても、充分にアヒルチイをお養ひになつて、一方には露西亞の第二世にも勝つて、人を欺き人を斃す位の器量がなけりやならない（勿論欺いチヤ宜くありませぬ）人を斃しては宜けませぬが、其位の力を以て居つて、そうして

一方には露重げなる小萩と云つたやうな優しい、或は草葉に啣く虫の音といふやうな温和にして清らかなる心を持たなければならない、換言すれば所謂人を殺す劔も持つて居り、人を活す劔も持つて居ると、夫れで始めて日本の婦人が發達するのでございます、

ソコで貴女方にお願ひしますのは何卒呉々も最前より申上ました、即デルニナイ、ヒユーマルナイ、アビルナイ、此三を養成して、將來婦人の益發達せんことを偏へに祈るのでございます（完）

婦人の交際に就いて

藤原　靜

吾國古來よりの習慣として、婦人は社會の交際をなすべき者にあらず、婦人は家を治むるだけの事にて足れり、と云ふ事になつて居たれど、維新の後に至りて、西洋諸國の風儀をよしとする事になり、婦人も男子と同じく世間へ出て交際すべきものと云事を主張する學者論客年々多く世間一般も漸く其風に傾きて近年は婦人の交際と云ふ事追々行はるゝ事になれり、これに就いて少々お話を致さうと思ふ

婦人の交際追々行はるゝ如くなれども、現今の處にては、學校出身の婦女子若くは洋行歸りの細君など交際と云ふ事の必要を感じて隨分種々の集會、訪問等をなす者あれども是れ、世間婦女子の十分の一にも過ぎず、多くの婦人は日本の習慣を守りて徒に世人と交際する事を爲さず舊に依つて家内に引籠りて家事を理むる者のみなり、たまたま外出する者を見れば墓參、親戚の訪問、緣日の散歩等に過ぎざるものゝ如し、年老いたる婦人

のみ然るにやと思へば然らずして明治の教育を受たる婦人三十前後の細君皆な概ね然る有樣也、試に余が調査せし處によれば、日本弘道會の婦人部の集會、其他諸學校にて家庭と連絡のために開く懇和會、女子教育會等の集會等も最初一二會は婦人の出席も相應にあれど、三會よりは四會目は少く四會目より五會目は猶ほ少なし、終始欠席なく出る者を見れば多くはこれ女教師か左もなくば獨身の婦人なり

何故に斯樣に夫ある婦人は外出せざるかこれ取調ぶべき一問題にあらずや

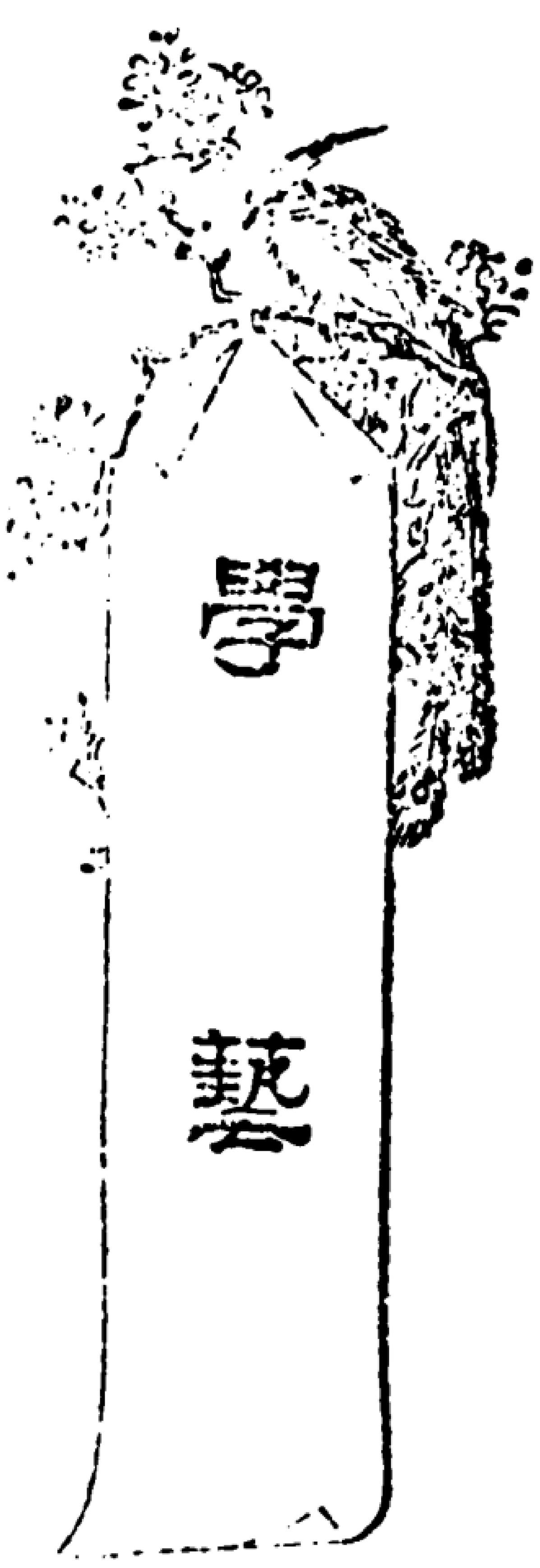
世間の女子に關係を有する雜誌は申合せたる如くに婦人の交際を主張して、人類は社交的の動物なり、社交を離れて獨り生活すべきにあらずと說き或は日本の婦人は勇氣に乏しきを以て廣く交際して知見を博ふする事能はずなぞと只々理論を以て之を奬勵する者のみ多くして其何故に交際せざるか、交際する能はざる事情ありや否やを調査する者なし、此等皆な空論の輩、眞に婦人のために利益を言ふ者にはあらず

余も婦人の交際は成るべく廣きをよしとするの持論あり、出來得可んば婦人も男子の如く世上の事情に通じ、男子の繁忙の塲合には之に代りて相應の代理をも勤め、ひとり內助の力のみならず外部に向つても之を助成せしめたき考を有せり、然るに婦人一たび嫁せしのちは學校に在る時とは全然其行爲を一變して昔時の婦人に異ならざる有樣に陷るは何ぞや、之れは別段の理由にあらず一は夫たる者が婦人の外出を好まざるの致す處、一は家政上の煩累のために外出を妨げらるゝに出る、この二ッの事情の爲に婦人は社交上に交際をなす能はざるものと知るべし

夫ある者が婦人の屢々外出するを好まざるは尤も大いなる故障となれるなり、外國の婦人は社會の習慣として交際をなすべき者と古來より定りたる事なれば世人も之を當然なりと思ひ、夫なる者も之を以て普通となして事故を以て制止する事能はざるべしと雖も吾國の習慣は之に反して婦人の交際は新奇の一流行の如くに之を思ふ者あり、近隣の者、親戚の者みな女の外出をば良き事とはせず、女の屢々外出するを見れば輕燥とも評し、お轉婆とも譏り生意氣なりとも笑ふべし、夫たる者此等の惡評を受くる事を欲せざるは勿論、吾胸中また一種の不快の念なきにもあらざるべし、婦人として外交上に於て收むべき利益は何物ぞと問ば一も實利實益として歡迎すべき結果を見ず、曰く慈善會、曰く音樂會、曰く晩餐會、曰く園遊會、曰く校友會、曰く何曰く何、夫たる者の身にとりて直接に利する者はなしと思ふべく、さて外交の結果交友は益々多くなりて來客も增加し外出も頻繁とならば家事は之を下婢に委して交際に一身を投ぜざるを得ず、華族、紳商、の如き富有にして經濟の如何を問はざる身分ならば兎も角も一家數口の家計それを夫の勞力に由て維持する家にありては迚も行はるべきにあらず、これ夫の外出を好まざる譯合なり、次には夫婦の愛情の上に在りては婦人の他出して交際をなす中には男子も必らず立交るべき筈なり、嫉妬心はあるべき事ならねど夫たる者快く思ふべきにあらず、此の心萬事に應じて交際を喜ばざるの根元となり、其口實を家事の繁劇に假りて制止するに至るは當然の事と思ふのみ、婦人また夫の歡心を失ふ事を恐るゝ事頗る大なり此に於て學校に在りし西洋流交際の主張者は飜つて舊幕時代の細君と變じ去り　外出をな

さゝる而已ならず交際をも自ら辭退するにいたるもの是多きなり
次には已に一家の婦人となりて家政を掌る上には舅姑に對しての義務としても屢々外出するを得ず、來客もあるべし、子供が學校へ通ふ世話もせざる可らず、裁縫のこと洗濯の事、惣菜の世話、小遣帳の記入、内事に於ても一人にて負擔に餘る程の仕事あり、其上に親戚の訪問、葬祭、婚儀等吉凶に就ての應答、奉公人の出入、夫の旅行、家族の病氣其等皆婦人たる者主任とならざるを得ず、かゝる自分の要務をも差措て交際の爲に外出せんとする事叶ふべくもあらねば是亦自然と外出する事能はざるの場合多きに至るならん
斯く考ふれば今日の吾國の現状にては婦人の交際と云ふことと上流は暫く措き中流以下一般には行はるべき筈なし、之を行はんとするには現在の一家の組織を改善して婦人の外出を容易ならしめ、併せて男子の心をも改良して婦人をなるべく外出せしむるやうの方針を執らしむるに如くことなかるべし、婦人の交際もとより可なり、只だ之を實行せしむる手段なきのみ
右は此頃婦人關係の雜誌に交際論の多きを一讀して聊か所見を述るのみ、余輩の言ふ處、或は極端なるやも測られずと雖も事實の上に於て已に然る上は亦如何ともなす事能はざらん、





國文學講義

紫式部日記講義(三十)

井上頼文

御はそのをは、とのゝうへ。　御ちつけは、橘の三位徳子。　御めのと、もとよりさらなひ、むつましう、心よいかたとて、大さゑもんのおもと、つかふまつる。　備中守むねときの朝臣のむすめ、くら人の辨のめのと。

釈義

○御はそのをは　御臍の緒はなり。　小兒の臍につきて、胞衣につゞけるもの。

○とのゝうへ　道長公の御臺所倫子を申す。

榮花物語、初はなの巻に、この條を、

御湯殿のことなど、儀式いみじう事とゝのへさせたまふ。かくて、御はそのをは、殿のうへ、これは、罪うる事と、かねては思しめししかど、たゞいまのうれしさに、なにごとも、みな、おぼしわすれさせたまへり

と、記せり。さて、御臍の緒を切るには、竹のへラを用ゐたり。

産所之記に

一　へらなどは、けづる人體の事。

一段長久子孫多、可レ然雖けづられべく候。

と見え

塵添壒囊抄二の巻、臍緒以二竹刀一切事とある條

ヲサナキチゴノ、ホソノ緒ヲ竹刀ニテキルハ、前蹤ニヨル歟如何、風土記ノ心ニヨラバ、皇祖、哀能忍耆命、日向國、贈於郡、高茅穗槵生峯ニ、アマクダリマシテ、是レヨリ、薩摩國、閼駝郡、竹屋村ニウツリ給フ。土人、竹屋守ガ女ヲメシテ、其腹ニ二人ノ男子ヲマウケ給ケル時、彼所ノ竹ヲ、カタナニ作リテ、臍ノ緒、切リ給ヒリケリ。其竹、今有ト云ヘリ。此跡ヲ尋ネテ、今モ、カクスルニヤ

と、見えたり、たゞし、壒囊抄に引きたる風土記の文は、

日本書記の二、神代卷に

高皇產靈尊、以ニ眞床追衾、覆ニ於皇孫、天津彥、彥火瓊瓊杵尊ニ、使レ降之皇孫乃離ニ天磐座ニ、且、排ニ分天八重雲ニ、稜威之道別道別而、天ニ降於日向襲之高千穗峯ニ矣。(中略)時彼國有ニ美人ニ名曰ニ鹿葦津姫ニ(亦名、神吾田津姫命、亦名、木花開姫耶命、)皇孫問ニ此美人ニ、曰ニ汝誰之女子耶ニ、對曰ニ妾是大山祇神所生兒也ニ、因而幸之即一夜而有娠(下略)一書曰。初火燄明時、生兒火明命、次火炎盛時生兒火進命、亦曰ニ火酸芹命ニ、次避ニ火炎ニ時、生兒火折彥、火火出見尊、凡此三子火不上能害ニ、及母亦無レ所ニ少損ニ、時以ニ竹刀ニ截ニ其兒臍ニ、其所棄竹刀、終成ニ竹林ニ、故號ニ彼地ニ曰ニ竹屋

と、あるを傳へあやまりたるものながら、臍の緒を切るに竹刀を用ゐる事は、神代の吉例による趣を記せるは、古傳の遺れるなり。なほ、竹刀のつくり方、および使用方等は

山槐記(さんくわいき)に

治承二年十一月十二日、辛未、未二點、皇子(安德天皇を申す)降誕(中略)奉ㇾ切㆓御臍緒㆒、先御產成了、即差㆓小屬安倍資忠(右衞門府生也、無ㇾ憚子息云々)遣㆓切生氣方東河竹㆒、即持參(口徑一寸許長五六寸許)亮重衡朝臣取ㇾ之、參㆓御前㆒作㆓竹刀㆒(只一削作、刀方不ㇾ再云々、亮無憚子息也(下略)進ㇾ之、洞院局(大夫室)以㆓練糸㆒奉ㇾ結㆓御臍緒㆒(長六寸二所ㇾ結二云々)內大臣取㆓竹刀㆒奉ㇾ切ㇾ之(洞院局、置㆓帖紙於手上㆒、其上置㆓御臍緒㆒、切㆓糸內方㆒、刀鈍頗奉ㇾ切、內府與㆓女房㆒之間、立㆓三尺御几帳㆒云々)

御產所日記に

普光院殿樣(足利義敎なり)御時之事

若君(義勝なり)御誕生、永享六年(甲寅)二月九日寅刻(中略)

一九日御所樣御成之時、御胞衣緒被㆓次申㆒(中略)御竹刀數二、役二階堂大夫判官之中忠進上之、

官中秘策、十二に、

若君樣御誕生一式之事

一 元文二巳年、五月廿一日(夜明ヶ七ッ時、廿二日之日取あり、辛亥日、於㆓西丸㆒竹千代樣御誕生、梅溪前中納言實隆卿御息女之奉ㇾ生所也(中略)

一 御箆刀之役

酒井雅樂頭名代同姓日向守勤ㇾ之

など見え、また

伊勢家秘書誕生之記の第六に

箆(へラ)(貞丈云、ヘテと云は、俗語(ぞくご)なり、本名(ほんみやう)は、アヲヒエと云)

一箆(へら)の長さ(なが)一尺二寸、幅(はゞ)一寸二分、竹刀半分(ちくたうはんぶん)に

切、刄を作也。竹の皮の方に切刄を付る、切刄の留所は節有。女子も、竹の皮の方に切刄有。女子は節なし。箆を削る人は、長久子孫繁昌、可然仁撚削るべし、臍の緒と一所に納置物也

など、あるにて、その大要を知るべし。

○御ちつけ　小兒に、はじめて、乳を哺ましむることをいふ。

御産部類不知記に、

爰召陰陽師（名略）令勘申哺乳幷雜時等日時、即時、從三位橘朝臣德子奉仕御哺乳（以內裏御乳母奉仕、即賜祿女裝束一襲）

と、見ゆ

榮花物語初はなの卷に

御乳つけには、有國の宰相の妻、御門（一條天皇を申す）の御乳母の、橘三位（德子）參りたまへりと、記せり。

○橘三位德子　播摩の守仲遠の女にて、有國の妻なり。德子、もと、つな子に作る。今、御堂關白記、および、御産部類記引くところの不知記に依りて記す

○御めのと　御乳母なり

○もとよりさふらひ　以前より、召しつかはれたるなり

○むつましう、心よいかたとて　遠慮も氣がねもいらぬものなればとての意

○大さゑもんのおもと　大左衞門は、御乳母のよび名、おもとは、御許の義にて、親しみていふ語なり

○備中守むねとき云々　備中の守宗時朝臣の女なる藏人の辨といふ御乳母なりとの意なり

譯解

さて、中宮の御臍の緒を切りたまひしは、道長公の御臺所、すなはち、中宮の御母の倫子なり。御子の御乳つけは、橘の三位徳子なり。御乳母は、以前より召し仕はれたるものにて、氣ごゝろも知れ氣がねもいらぬ者なれば、大左衛門のおもとといふ女房、御乳母に、つかふまつる。また、いま一人の御乳母は、備中の守、宗時の朝臣の女にて、藏人の辨といふ御乳母なり。

家計簿記法講義（つゞき）

磯部武者五郎

財產一覽表

一番終りに財產一覽表を製します、元帳の財產部より其月の決算高を集めまして一覽表に記入して作り、其月末に於ける財產の總額を知ることを要します、一覽表の作り方は左に示す樣の如くにします、

一覽表には受拂兩方を記す故殆んど複式の形になつて居る、先づ准複式として見ればよろしい、一寸表の說明をしますが、受の部に記入したるは、財產の各項目につき其價格のあることを記入し、即三千圓の價格のある土地を有することを記入してあるので、拂の部に同樣記してあるは、土地の價格に對し現金が三千圓出て居ることを示します、若し土地を賣拂へば現金三千圓が受入ることを證明してあるのです、終に現金の現在高は、あらゆる價格のあるものを拂の部に記入し終りて其の總額を受の部の總額より引き去るとき殘餘があれば即ち現金が現在手許にあることを證明します、若し拂の部の計算が多くして受の部の計算總

額が少く即受の部に不足があれば、其の不足を何方よりか塡補せねばならぬことで即ち負債といふことになります、これらの記入法は多少簿記法を了解したる後でなければ分りますまい、冀くは讀者諸孃の熟考あらんことを望むのです、

一ヶ年度の決算

毎月の決算、即元帳一覽表及財產一覽表を作り置き、更に一ヶ年を經過せば十二ヶ月分の一覽表を纏めて、一ヶ年の決算を爲すことが必要です、これも矢張元帳一覽表(即經常費決算)、及び財產一覽表を作りて一ヶ年間經常費收支の有樣、財產增減の有樣を見るのです、

以上にて家計簿記法の大略は終りました、本編の組立は純然たる簿記法に據らずさりとてありふれたる家計簿記法にも據らず、多少簿記法上の智識即計算學上の仕組を取りまして立案しましたから、其無雜で整頓せず、後に觀ますれば訂正すべき箇所が甚多くあります、依て本編は訂正增補の上、一冊の書籍として發刊致し讀者諸君の需に應ずる樣に致す心組でありますから、本編は何續いて申すべきことがありますけれども、一先これにて完結と致します、永き間貴重の紙面を塞ぎましたのは謝する所であります、

(完結)



受 項目	摘要	金額 圓	錢厘	拂 項目	摘要	金額 圓	錢厘
土地	何區何町何番地 何坪(元帳…)	3,000	000	現金	土地購求ニ對シ (又ハ土地ノ價格ニ對シ)	3,000	000
家屋	何區何町何番地 瓦葺建家何坪 (元帳…)	1,800	000	〃	家屋ノ購求ニ對シ (又ハ家屋ノ價格ニ對シ)	1,800	000
證券類	公債證書(元帳…)	95	000		公債證書購求ニ對シ	95	000
預金	當座預金(元帳…)	20	000	〃	當座預金ニ對シ	20	000
現金	賄費殘(元帳…)	5	030				
	財產一覽表殘金	20	100				
		4,940	130		現金在高	4,915	000
						25	130
	財產總額	4,940	130		財產總額	4,940	130

財産一覽表

明治三十四年十月

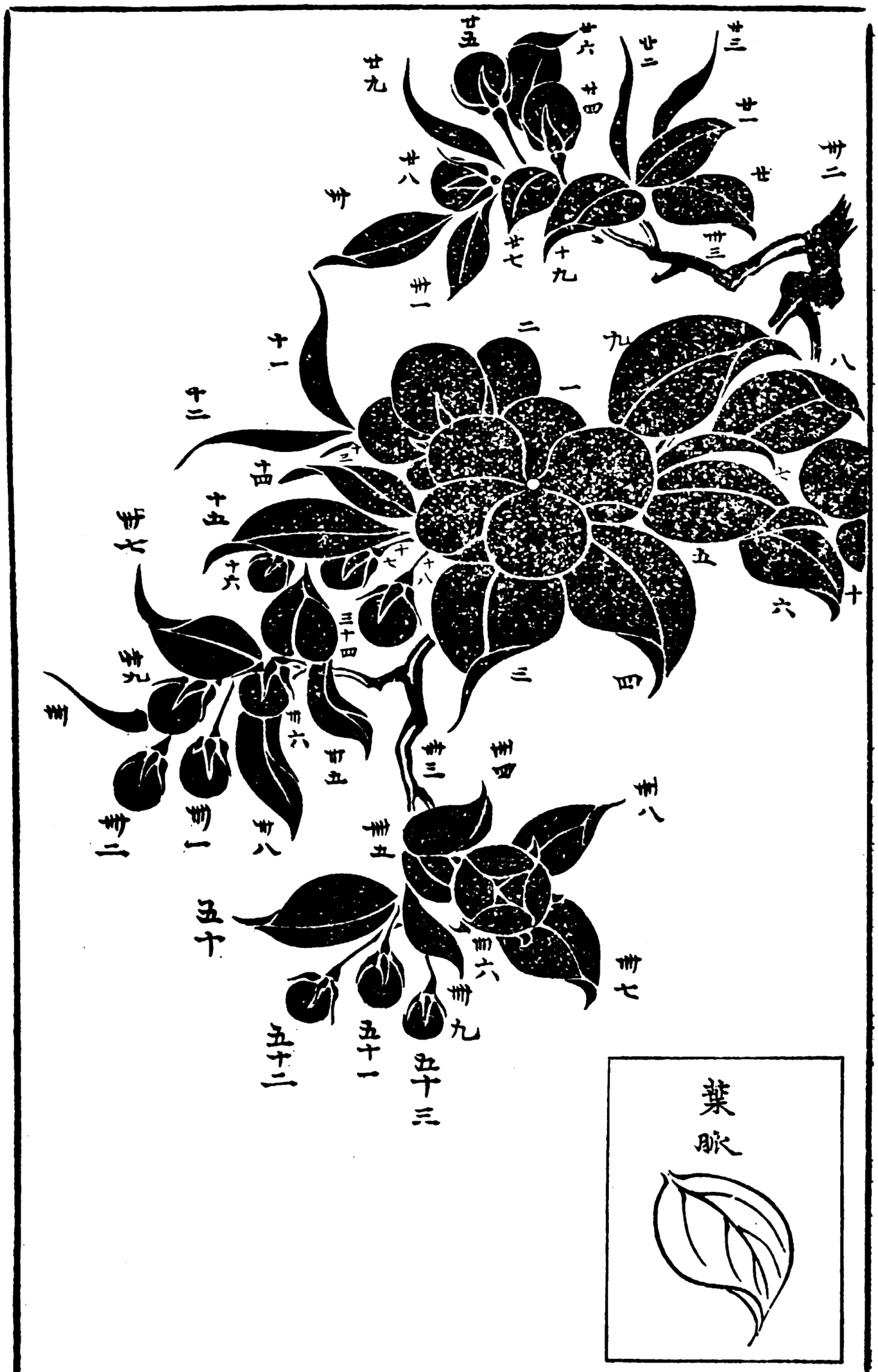


和畫通信講義（第廿四回）

山崎彩峨

墨畫にては、幹枝ともに、淡墨を挾墨となして畫く。花葉は、沒骨なれば、淡墨を含めたる筆先に、濃墨を附して畫く。裏葉は、すべて淡墨なり。夾勒なれば、淡墨にて、花葉の輪廓を畫く。かくて、花心、花粉、花帶は、いづれも、濃墨にて描き入るべし。

彩畫にては、幹枝は赭墨を挾墨となすときにかぎり、黄がちの青色を點ずることもあり。花は、胡粉を含めたる筆先に、胭脂を附して畫く。蕾は、すべて開花に比して、紅色の濃厚なるを通規とす。葉は、通常の青色、裏は、黄がちの青色、幼芽は、赭黄に、藍と胭脂とを和したるものにて畫き、藍か藍墨かにて、葉脉を入るべし。花心は（運筆の條參照）胡粉、花粉は、黄色にて胡粉をときたるもの、花帶は、胭脂と朱とを和したるものか、（花心花粉ともに、朱にて描くもよし）または、藍紅を和したるものかにて附するなり。


葉脈



榊原子爵夫人禮子小傳

東臺野史稿

夫人諱は禮子、贈從二位前田慶寧侯の長女にて安政元年甲寅十一月朔日加州金澤に生れ給ふ、幼き頃より文讀む事を好ませ給ひしかば學問年と共に進み和歌は元より漢詩繪畫をも能くし、又常に師傅の臣を召して史書を講せしめ古今の得失を論らはせて自ら鑑みられ、旁ら稗史野乘迄も通覽せられしかば左右に仕る者何れも其博識を感嘆せしとかや。明治六年二月良緣ありて子爵榊原政敬君に嫁がせ給ひ琴瑟能く諧ひて八年二月女子誕生あり幼名を彝子と申し後政和君に配して家を嗣せ給へるは此方なり、夫人人と爲り貞靜にして慈悲深く內家政を助け外親戚に和し能く其下を惠まれしかば婢僕皆恩に懷かざるはなかりき、又暇ある毎には和歌を詠じ漢詩を賦し文を綴るをもて娛樂とせられ其詩歌を輯めて字兒可延集と名付く平生梅花を愛させ給へるに依るなり今集中に就き二三を左に抄錄す

待鶯

鶯の來鳴ないと〻まちかほに
　さかりな見するのきの梅か枝

餘寒

何となく霞は春のいろなから
　また袖さむきうめのしたかせ

雨中落梅

山風のさそふにちらて音もなく
　ふる春雨にうめそちりける

月前花

月かけも匂ふ計りにさきつゝく

花にかすめるはるの夜のそら

弓

もとすゑのみちをたゞして梓弓
　ひきなゆるへそ大和大丈夫

鎌倉の別莊にありける時姫百合の花を見ておもふ旨ありてつれ子がもとへ詠てつかはす

いかならむ人や手折としらつゆの
　心にかゝるひめゆりのはな

逗子の方を見やりて

心なきものとはしれど春がすみ
　葉山のかたを何かくすらん

うき世の事をさとりて

夢の世の夢むるもしらず難波潟
　なによしあしと身をかこつらん

初春即事

何處關々鶯早驚。彩霞横影紙窓明。下階試向園庭歩。屋角梅花媚曉晴。

鎌倉別墅聞子規

高樓欲曙海天分。満耳濤聲夢裡聞。孤枕思家人未寐。杜鵑啼破川中雲。

賞菊

冷豔東籬畔。菊花萬種名。賞心殊愛汝。馥郁傲霜清。

初冬小集

冬來梅已發。傾蓋夜漫々。小集圍爐坐。窓櫺月色寒。

懐古

山深松老鵑鳩哀。無限愁心夕陽催。欲吊英雄忠義士。古碑半被蝕苔。

鎌倉の別莊にありて　　みち子

おのれちかき頃病になやみて世の中の交りをたへれば新ころ鎌くらなる何郡長谷村のほとり海を見こしの峯の松かげに草の庵をむすひ置て折にふれてはうつり住ぬ。こゝなむかの由井がはま三保の松原なともおもしろく見わたされていと心ゆくところなりける。春は霞に匂ふ濱つたひそこはかとなくあゆみつゝ梅のはな貝さくら貝なそひろひわたつみの海そこなる春をも知り。夏は海士ならぬ身も近き頃世に海水浴とやらむいふめることをなまれひもすそをかゝけてよせくる濱に下りたち夕風に暑さも家路も打忘れ。秋は霧たちわたる海はらの見わたしねもいはれぬにつりする海士の舟とも夕まくれ月にうたひて歸りつゝおのが家々にいそくさまなとおのつからからき世わたりのほと思ひやられて哀なり。冬は松に時雨ろ木からしを琴の音に聞きまがへおろしこめたるすたれの透間より降りつむ雪を花と見つゝ寒さも知られて火桶を友としたるはこよなうのとけしや

色かへぬ松の木かげにすみなれて
千代をこゝろにまかせつるかな

右等にて其才學の程推し測るに餘りありなむ。年頃御身にいたづきありしが三十二年の冬より次第に重り行きしかば赤十字社病院に入りて治療せんとて十一月三十日の朝まだきに家を立出て給ふ是を限りとや思ひ定め給ひけむ、一首の和歌を留めらる。

百千代と誰もねがへどつひにゆく
人の命はかぎりこそあれ

之を讀む人皆涙に袂を濡せしとかや、斯て名醫手を盡して治療怠りなかりしも藥餌効なく十二月二日と云ふに遂に歸らぬ旅に赴かせ給ふ、享年四十六と聞えし、雜司ケ谷本立寺先塋の側に葬り諡して温良院殿徽猷和順貞節大姉と曰ふ。夫人御兄弟多く有栖川宮殿下の御息所近衞公爵夫人の如きは其御妹君なりと。嗚呼蕙蘭萎み易く明月長へに圓なり難し。才學斯の如くなるも天之に年を假さず中壽に及ばずして長逝し給ひしこそ悲しけれ

下田歌子刀自の略傳

刀自は有名なる先哲叢談の著者東條琴臺翁の孫にして、舊美濃岩村藩督學、平尾鍒藏氏の女なり。初名をせきと云ふ。幼にして慧敏家庭の教育を受け、七才にして詩歌を能くす。祖琴臺翁深く之を戒め婦道必須の業を修めしめんとせしに、快々之を樂しまず、遂に病を爲すに至る。父母憂慮の餘之を祖翁に謀りしかば翁も大に驚き左迄に執心ならば、本人の望みに任せ女博士となさんとて、刀自を延いて自ら教授し課程極めて厳しきに刀自も亦其好む道なれば夜を以て日に繼ぎ精勵怠りなし

後八田知紀翁に就き歌道を修む。翁の上京するに方り刀自亦來りて研鑽怠りなく業大に進み、其蘊奥を極む。年十五召されて宮内省出仕とあり、上は皇后陛下御詠の御相手を奉じ、下は女官の教授を命ぜられ、寵遇殊に厚く和歌に堪能なればとて、畏くも皇后陛下より歌子の名を賜はり累進して權命婦とある。明治十二年下田猛雄氏と結婚の爲め出仕を辭し。爾來麴町區番町に桃夭家塾を開き、和歌習字を授くるに、兼ねて其盛名を慕へる者四方より來りて業を受け、才媛彬々として桃李門に滿てり。十七年良人猛雄氏疾に罹つて歿す刀自の哀傷想ふべし。宮中にては兼ねてより刀自が非凡の才學を抱いて草莽に蟄するを最と惜しき事に思召されければ、猛雄氏の歿後再び除服出仕を命じ、宮内省御用係を命ぜられ、華族女學校設立の議に與る。刀自初め宮内省へ出仕するに當り、元田永孚、高崎正風、福羽美靜等の諸老に學び、猶海外に雄飛するの大志ありしゆゑ、更に英佛の語學を研究す。後華族女學校教授兼學監となり、明治十九年二月更に其規摸を擴張し、二十六年女子教育取調として英國に赴き、二十八年歸朝せり。刀自が秀拔なる眼光を以て、海外萬里の遊をなし、百般の制度文物を觀察研究せしことあれば、規摸識見亦前日の比にあらず、久しく學職に在る鬚眉丈夫を背後に瞠若たらしむるものありと云ふ。さきつとし從四位に敍せられ、今猶教授學監の職に在りて、育英の事に熱誠を注がれ又 常宮、周宮兩殿下御用掛にして御教育の事を司り兼ねて實踐女學校々長たり。餘暇著作を事とし、著す所 國文小學讀本、家政學、家庭文庫等あり。何れも世に行はる。其文章の流麗通暢あるは勿論、言ふ所皆能く肯綮に中りて、開發啓誘の効少なからず、

世人之を明治の曹大家と稱するも、亦謂なきにあらずぞかし。

慈善家「サラー、マルチン」女

宮館さだ子

巨萬の富を累ね顯榮の地に立つて貧しきもの苦しみつゝある者を救恤するは、もとより善行美事たるには相違なきも、其地位分限に對する當然の責務なり。唯だ夫れ窮乏の中に處し微賤の家に生れながら、尙且己れの衣を脫し己れの食を割きて之を人に施し、慈善を以て其獻身的事業とするが如きは純粹高潔なる博愛心の發揮にして、人間の至情實に其裡に在りて存す。

「ポーツマス」の一小靴工「ジョン、パオンズ」の如きは、乃ち此種の人にてありけり。彼は其狹く穢なき工場に貧民の子弟を集め、古靴を修繕しながら無謝儀にて彼等に書を讀むことを敎へたりき、此人沒してより旣に幾星霜を閱しぬ。其終生の事業亦た大に見るべきものなかりしに拘はらず、現時の所謂「貧民學校」なるものゝ甬を作り、之を後世に垂れたるの功決して沒すべきにあらず。

囚徒の保護敎誨に從ひたるもの之を前にして「ジョン、ホワード」あり、之を後にしては「フライ」夫人ありき。共に熱誠を傾けて囚徒の感化救濟に盡したるの功績は世人の皆な知悉する所なり。されども彼等は强力なる團體の後援に依り、且つ又共に富有の身分にてありしかば其慈善事業に對する充分の時と財とを有したりき。

「サラー、マルチン」女は微賤なる一仕立職に過ぎず、其日々の生計に追はれながら起つて囚徒改善

の事に從ひたるは十九世紀の初期にして、恰も「フライ」夫人と時代を同うせり。當時の監獄は之を今日より想像するも殆んど信用すべからざる程にして、世人は皆な獸欄同樣のものと見做して怪まず、囚徒の監視は擧げて之を裁判官絞殺人、穴堀り等の無慈悲なる手に放任して顧みるものなかりき。

此の如き時代に於て「サラー、マルチン」は、此不幸なる囚徒救濟の使命を帶び、特に降されたる天使の如きなりき、彼は千百九十一年を以て「ヤルマス」限近の「カイスター」村に生る、父は一小買あり。彼は同村の一女學校に於て不完全なる敎育を與へられつゝある間に不幸にも其兩親を喪ひ、爾後祖母撫育の下に人となりしが、生計の不如意なるよりして十四五才の折、仕立職の見習として「ヤルマス」に於ける一商賈の許に預けられたりき、然るに慧敏にして何事にも勤勉なる此憐むべき孤兒は、僅々二ヶ年内に於て其技熟達し、獨立の仕立屋を開業して顧客の信用を博するに至りぬ。

仕立職は彼の生涯に渉る生計上の常業なりしも、日々僅々數志の賃銀を得るを以て滿足したりき、若し彼にして其業務を擴張せんと欲するの希望ありしならむには優に之を爲し得べかりしに拘はらず、敢て之を爲さゞりし所以のものは彼は其常業に據りて地位を作らんとするの意なかりければなり。

（未完）





實驗家庭の教育（五）

東京感化院長　高瀬眞卿

さて右は惡い風儀のお話、これより、家庭をよく整理するには如何と云ふお話に移りますが、其の第一の心得と云ものは子供を善良に育てる爲には夫婦ともに同心協力して、互に一歩も二歩も讓り合つて可愛い子の爲にはヶ樣にせねば義務が立たぬものと覺悟して掛らねばならぬ、此の覺悟がチヤンと定らねば子供を善く育てる事が出來ないのである何故に斯云覺悟が要かと言ふに、子供の事に就いては朝夕夫婦の意見が衝突する事がある、其のために一歩ヅヽ讓り合ひをせぬと飛んだ結果が生ずるものであります、夫婦の意見が異るとソレが風波の基になつて子供に惡い感情を抱かするそれが家庭に於いて尤も大害を釀す、また夫婦共に子供の前に於いては少しも意見が異ならぬ樣に勉めて心掛けて貰はねばいけない、ソレもチヤント平日覺悟をして居らぬトツイ反對する事になる、また子供を育てる方針に就いては初めより夫婦互に協議がしてあるがよろしい、方針が少しでも違つては宜しくないのである、例へてお話をすれば、

父が子供を叱りませう、子供が惡戲をしたりまた惡い事をすると必らず叱りますが其とき母が子供のために辯護して、そんなに叱らずともよいでは有ませんかト言ふやうな事が有つては甚だ宜しくない、父が叱る時は母も同じやうに父に贊成して、お前が惡いあんな事はこの後ち一

切致しませんト能くお詫をなさいト言ふ様にするが宜い、母が呵る時も其通り父は同様の手段を取り、この呵り方が無理であると思つても子供の目前で反對してはいけない、モシ意見が違つたら互に子供の居らぬ時に話をするがよろしいのである。

母親がよく言ふ事であるが小供に何か請求されるとお父さんに知れるト呵られるから内證でやりますヨ」と言ふがある、これは自分で請求に應ずるは至當であるが父は無理でよく呵るから呵られぬやうにせよト言ふ意味になる甚だ間違つた話、父が止める事は母も止め父が禁ずる事は母も禁ずる樣に平日チャンと極めて置かねばならぬ。

子供の致した惡い事を父に隱す母親がある子供も父は呵るが母は可愛がると思ふ者が多い、これまた宜しからぬ事で父に隱すと云ふ事を子供に敎へて何の益があるか、益の有無はさて置き大きな害のあるものあり、父も母も互に隱し合ふべき筈なく、子供をして常に父の知つた事は母も必らず之を知り、母に言つた事は父も必らず之を知るものと思はせねばならぬ事なり

次には子供を善くしたいと云ふ心のみあつて善くする手段をとらぬ親が多い、敎へざる民をして戰はしむるは棄るなりと言ふ事が兵法にある、これは民を兵士にして軍をさするには必らず訓練して後に用ゐるもの、訓練せずに軍に用ゐるは其民を殺すために戰はすると同じなりト孫子が言つてある、子供を敎へずに善い人間にしやうと思ふも丁度これと同じ事で、學校へ許り托して家庭で少しも敎へる事がなくては何の役にも立たぬ、さて其の敎へるには自ら敎へる時機ト敎へる手段とがあ

る朝から晩まで口やかましく言つたとてソレは少しも効能はない、効能のないよりも子供は却つてうるさく思つて其が習慣になつて感じない様になる、道歌に「こまやかに教へみちびき其のちにはほめも呵りもするが緊要」俗歌ではあるが家庭教育の本意が一通り分るまた「可愛ゆくば七ッ教へて五ッほめ三ッ呵りてよき人にせよ、是は教へトほめるのと呵る割合を言つたもので、朝夕すべての事に就いて懇ろに子供に教へてそれを守つた時はほめ、守らぬ時は呵る、なに事も知らぬ子供を親の喜怒に任せて氣に入らぬとて呵り立つ事は宜しくない、成るべく呵る事は控え目にして、教へた通りに守らせる様に舵を執るが親の役目と心得ねばならぬ。

また親が子供を擲る者がある、小供の頭を打たり背中を打たりするものが隨分ある様であるが、此

○○體罰と云ものは教育上に害のある事は學者の議論のある事で、私などが實驗をして見ても害のみあつて少しの利益もないと云ふ事を確と認めて居る、西洋人はお尻を叩くと云ふ話を聞いて居る西洋人とても馬鹿な人もあり無識な者も多いからお尻を打つと云様な愚かな事をするかも知れぬが甚だ野蠻な話で、總て腕力沙汰は家庭上一切やめにせねばならぬト私は信じて居る、其道理をこゝに述べる必要もない打たれるが習慣になれば後には一向平氣になつて恐れぬ様になるト云ふ一事でも分つて居ます。

次は子供を教へる○○時期と、教へ方即ち手段に付てのお話を致します。



育兒衞生談（六）

久利軍醫

●●●●●小兒營養法（續き）

小兒の精神的の發育に於ては、觀察、判斷、思量、志望、感情、意思、美術等の感覺を一樣に養成するを可とします。若し偏しまするど矢張り不具者を多く發生する次第であります。

●●●●●營養良否の鑑別　小兒の營養の良否並びに看護法の完全なるや否やを知るには、體重、身幹並に胸圍を測定することが必要であります。唯だ我が國に於きましてはまだ斯種の統計が出來て居りませぬ故に其の標準を知り得ませんが、歐洲の學者が調べた統計によりまするど、小兒の出産直後の體量は、男兒は三千五百瓦（約一貫目）、女兒は三千瓦、平均三千二百五十瓦であつて、月を經又年を積むに從つて次第に増加し、下表に示すが如き成長を爲しますものは先づ健全な小兒であります。

初生兒	身幹平均五十サンチメートル　胸圍平均三十四乃至三十五仙迷にして身の半よりも九乃至十cm長きを佳兆とす												
年次	一周乃至二周	三周乃至七周	八周乃至十周	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
體重	三、二五〇	三、一一〇	三、二五〇	四、〇〇〇	四、七〇〇	五、三五〇	五、九五〇	六、五〇〇	七、〇〇〇	七、四五〇	七、八五〇	八、二〇〇	八、五〇〇	八、七五〇

●●●●●小兒公護法

社會が漸次進化するに從ひ、人類生活の狀態が追追困難となりまして、その結果貧兒の數を増加するは勢ひ免かれ難き事情であります。之が即ち小兒に關する公衆衞生上の起る所以であつて、此くの如き貧兒に對する救護法をば小兒公護法とは申します。さて小兒は公衆衞生上なぜ之を保護する必要あるかと推究すると、孤兒棄兒又は兩親貧困にして小兒を養育し能はざるものは仁惠的に之

を保護し、又一方に於ては國民の健康保護上社會自らが擔任せねばならぬ事業である。何となれば、斯樣なるものが不完全に生長するときは、常に薄弱にして勞働に堪へず、往々不良の徒と化し去り、一方には健康人の負擔を重くし、他方には之が禍害を良民社會に及ぼす源となるからであります。然るに此の如き不幸兒を保護し正業に就かしむる方法手段は種々ありまして、近來漸く世人の注意を惹くやうになつて來たのは悅ぶべき次第であります。想ふに裸體跣足纏ふべき衣なくして路傍に倒るゝもの、或は飢餓に叫ぶもの、或は尫弱喘々として僅かに餘命を保つもの、此等は實に憫然の極でありまして、市町村の面目にも關係するし、また小兒公護法の備はらざるためかゝる無賴浮浪の徒が多く出來て騷擾常に絕えざるが如きは、社會の安寧幸福にも影響する譯であります。

蓋し不良貧困の徒と雖も、生れながらにして成つたものではありませぬ。社會の境遇によつて來れる災難であります。故に德義上之を保護して彼等をして良民たらしむるは、又實に一般良民社會の義務かと考へられます。今參考のため歐洲に行はれて居る所の小兒公護法を一二簡單に述べて見ませう。先づ大體彼地に於ては世の慈善家の義捐に依りて成立するものと政府の保護監督に依りて成立するものとの二種ありますが、其の事業に因て區別すると左の如き種類があります。

一 **看孩院及び看兒院**　看孩院は滿一歲までの小兒を收容し、看兒院は二歲より五歲までの兒童を取扱ふ丈けの差異はあるが、公護の目的に至りては同一であります。即ち貧困にして其兒女を保育し得ざるものは、晝間其兒女を此院に托して養育して貰ふ法でありまして、さうして此院には必要の

職員を置き、服務規律を設け、渾べて小兒の生活に要する準備が行屆いて結搆な仕組にして居りますから、其父母たる者は晝間毫も兒女を顧慮することなく其業務に就くことが出來る樣になつて居ります

●●●二孤兒院　此には六歳乃至十五歳までの扶助者なき孤兒を收容して、之に相當の學藝を授ける仕組になりて居ります。

●●●三棄兒院　棄兒院は歐洲でも國に因りて之を設置せざる所もあります。何故かと申しますに、人倫上棄兒といふことは出來ないといふ譯からして不必要の議論が起るのであります。去りながら世間には隨分鬼の樣な無慈悲な心を持つてる者も多くありまして、棄兒のある事は新聞紙上でも屢々見受けます。故に我が國に於て今日之を設置する必要があります。歐洲の或國の棄兒院に於ては、晝間一定時間、外方に口開をして棄兒を受くるやうな裝置がしてあり、若し棄兒あるときは、兒の重量の爲めに器械が回轉して之を運ぶやうな工合になつて居つて、兩親の顏は一切知り得ぬといふ方法を執つて居る所もあります。併し此方法は良法でありませんからして、近來は小兒は出產すると其兩親は其兒を棄兒院に連れて行つて之を托し、之と同時に其父母たるの權利を放棄するといふ組織になつてあります。

其の他或國には奇兒養法と申すやうな救護法も設けられてありますが、其仕組は略ぼ棄兒院に類して居ります。又托兒養法即ち我が國の所謂里兒といふ方法もありますけれども之は略します。此外幼稚園に關する制度組織等は種々ありますが、現今我が國に行はれてあるのと大差はないから之も略します。之を要するに、小兒の公護法は人類社

會の存ずる限り最も必要の方法でありまして、我が國の如きも平素十分準備して置きませんと意外の結果を見るも計られないから、聊か御參考までにかく申述べた次第であります。

（完）

女禮心得草（二）

日本女學校禮節助教授　大谷喜代子

たちゐの仕樣（つゞき）

たちゐのけいこ、まへに申しましたのは、古い仕方より、新らしい仕方にわたりまして、何と致しましても、其仕方でないとならない考證があります、其わけと申したら、普通の作法敎師方にお聽きになれば分明る事で、左の膝からつきますのはふところの物がおちぬため、右の膝からたちますのも其わけであります、これは古い例もある事です。さやうで有りますが、右膝から居ります時もあり左膝からたゝなければならぬ場合もあります、それは、向においでなさる方の御左が上座で、上座の膝から居らねばならぬ折には、右膝からつき、又御右の方が上座でありまする時には、左膝からつくといふ事もあります、是は一寸定めがついた仕方で、日用の時には、一人にてたちゐする故に、大方左からつき、右からたちますのがあたりまへで有ります。

たちゐの仕樣のことを着座のことゝもいひます。

あゆみやうの事

あゆみやうの事は、なか／＼むづかしい事で、私しなどまだ、はし／＼もまねることができませんので、この仕方は手をふりて行くことは見ぐるしい、両手を帯の下通りにをさめて、両手は手の內

をくばくして、手の甲にまるみの有るやうに、ひぢをはらず、なにとなくすなほにあゆむべしと、昔よりいつてあります。

このとほりにすればよいのですが、これがやさしいやうで、なか〳〵むづかしい事であります。まへの方三四尺のほどに目をつけて、頸をますぐにして、左右を顧みませんで、身體のそらぬやうかゞまぬやう、兩手を帶のほとりにおくともきめられて有ります

これがむづかしい、けいこであります、先これまでのところを、御こゝろみを願ひたいので、またこれまでの仕方について、致し方のわるい所がありますなら、なほおをしへを願ひます。

裁縫

もみぢ

裁縫は現時と舊時にては、其方法手順等に多少の差無きに非ざれども、大同小異にて、各其著書世間に乏しからず。而して、今茲に記述せんとするも、また、新規軸の方法を示さんとにはあらず、去りながら、余は、筆のゆるすかぎり解り易く書つゞり、主として、讀者が應用にのぞみて、疑を生ぜざる樣つとめんとす、而して、記述の順序は裁縫道具の注意より始めて、各種の、裁方、縫方等に及び、圖を掲げて解明すべし。若し事期するところにたがはずして、應用の資に供せらるるを得ば、まことに幸の極みにこそ。

第一　裁縫道具の注意

第一に裁板、これに用ゐる木は、柳、朴、銀杏、

櫻の類をよしとすれども、外の木にても、やにの出ざる板目のなき柔かなる木を用ゐれば宜し。寸法は、長さ二尺五寸以上四尺五寸位迄、巾は一尺以上一尺二三寸迄、厚さは二寸以上三寸位のもの、なるべく厚き方宜し。又尺度には、鯨尺、曲尺、インチ尺、雛形尺杯種々あれ共、和服の裁縫には、鯨尺を用ゐ洋服にはインチ尺を用う。雛形を製るには、夫々雛形尺を用う、形付は、象牙又は角にて作りたるものあれば、これを持ゐるべし。針は印針をよしとす。絹物を縫には、四ノ二、四ノ三、四ノ四を用ゐ、木綿物を縫には、三ノ二、三ノ三、三ノ四、三ノ五を用う、これ等の針は、縫にも、くけるにも用ゐられて便利なり。指輪は、洋銀、眞鍮、皮杯にて作りたるを用ゐれども、又厚紙を三分位に二つに折、指に合せ、少しゆるめに輪になし置き、眞綿を堅く卷付け、糸にてかゝりたるものも、やわらかにて、指にさわらずしてよきものなり。烙鏝は、二寸位の先のとがりたるもの調法なり。火熨斗は、五寸位にて丸き目かたのある方よろし。袖形、褄形、糸卷かけ針、くけ臺等、何れも定まりて出來居るものなれば、これを用ゐて可なり。

割烹

石井湧太郎

豆腐料理(つゞき)

豆腐の田樂の拵へやう

田樂のこしらへ方には、古來おほくの仕方がある、其種類をわけたる料理書のいふ所に、一厨實見の仕方をそへて申しますれば

○海膽でんぐわく

海膽を味噌にすりませて、田樂みそにつかふ、
海膽を、玉子の黄味でといて、たゞちにぬりてつかふ、是は豆腐にかぎらず、しんじよを豆腐の大きさに切形して、其上にぬるのである、味噌に合するには、味噌をすりて、馬尾篩にて裏ごしする時に、海膽を合せて共にこしてつかふのがよろしいのです。
豆腐、其他のものにても、串にさして燒て、のちに、はけにてぬるのです。

○あげでんぐわく

田樂ほどの形に切りたる豆腐を、胡桃油にても、又他の油にてもあげて、味淋醬油にて味をつけて、のちに串にさして、上にみそをぬりてつかふのもあります。

○鹽ふりでんぐわく

豆腐の串にさしたるに、鹽をふりかけて、燒きて、蓼酢かあんかで食しますものもある。

○煮染でんぐわく

豆腐を切形してやいて、のちに味淋醬油にて煮まして、又やいてつかふのもある。

○豆腐料理のうち名稱のいやしきもの

○ばくち汁

豆腐を双六のさえの形に切りて、汁の實に入れたるをいふ。
これは、豆腐ならでもある事と見えて
あつまるは同じばくちの類にして
瓜やなすびやゆふがほの汁
何にても、小さくさえ形に切りているゝなり
といひ傳へてあります。

○馬鹿煮豆腐

これは豆腐を酒煮にするので、豆腐一丁に、酒二升のわりで、一夜ひたしおいて、翌日煮

つむる、葛あんをかけて、おろし生姜をおくといつてあります。

○戀女房十段目

これは、坪ふかき器にいれて出す、とうふのさえ形と自然薯のこく醬であります。

右の三種のみならず、いやしい名稱のもありますでせう、しろ物、かべ、おらとうふ、などのみやびたる名稱もつかひかたによつてかくもちがふものであります。

漫録

女子服飾の沿革（承前）

椎園信成

第二期　奈良朝

今回より奈良朝にうつることゝいたします。夫れに就いて一寸申して置きますが、余は奈良朝と申しましても、單に元明天皇が奈良に都を遷されし以來を云ふのではなく、ずつと古く、隋や唐の國と交通が開け、彼國の文學や技藝が傳はつて、我邦の風俗に一の大變化を來した、これ等の事は既に歷史の上で御存じでせう。余は則ち此時代から桓武天皇の平安に都を移される樣になるまで、殆ど

四百年餘りの間を奈良朝と假定し、夫れを便利上、孝德天皇の大化以前、大化以後の二期に別つて、お話しいたしますから、其お積りで御覽を願ひたい。

既に皆さんも御承知でせうが、此時代は非常に支那の制度や、文學技藝などを始めとしまして、百般の事物を輸入するに力をつくした時代でありましたから、朝廷に居る人は大半支那きちがいと云つてもよろしい程でありました。丁度明治の初年、福澤先生や中村先生などが出て、西洋風を吹かせたものだから、其下のハイカラ連中が雷同して、一も西洋二も西洋と、大騒ぎしたのと同じことで在つたかと思はれる。併し此時代は凡て成功したから、立派である。詐りと思へば奈良に行つて御覽なさい、建築、彫刻、繪畫、機織などの事が、今日より數等進で居たと云ふことがわかります。何驚くのは、日常御使用になる石鹼や硝子の類が、既に此時代あつたのです。正倉院の御倉にはいまだに保存してあります。驚くではありませんか。西洋贔負の人は、西洋人はえらい、何んでも西洋でなくばならぬと、二口目には石鹼や硝子類の需用を說き立てるが、これ等は燈臺もと暗しの連中で、誠に氣の毒な者だ。日本には、西洋で石鹼や硝子を發明したよりも數百年以前の、奈良時代既にあつたのである。又織物も隨分開けたもので、錦の類には、今日見ることの出來ない者がある。其模樣なども實に巧妙な者で、今日の意匠家などが天平模樣など云ふ名を附けて、唯一の參考品として居るのは既に御存じでせう。其他繪畫と云ひ、陶器と云ひ、漆器と云ひ、實に今日見ることの出來ない樣なものが多い。これ等は何れも奈良の正倉院の御藏に納めてあるから、容易に觀ることは

出來ないが、其模造品や陶器、漆器、織物の模樣などは印刷に成てもあるし、博物館などにも陳列してあるから、御覽になれば其一斑は窺ふことが出來ます。又文學の方に至ても非常なもので、片假名の出來たも此時代、萬葉集の編纂が在つたのも此時代、古事記、日本紀、祝詞、宣命などの出來たも此時代であります。實に此期は百般の事物燦爛たる時代で在ります。古人が「青丹よし奈良の都は咲く花の匂ふが如く今盛りなり」と謠て居るのも「いにしへの奈良の都の八重櫻けふ九重に匂ひぬる哉」と謠て居るのは、偏に奈良朝當年の全盛を謠たものであります。まことに當朝は我邦の黄金時代と申しても敢て差支へありません。

扨て前申した通り、朝廷に支那贔負の人が澤山出來ました結果、彼國との往來も頻繁になりまして、遂に我邦よりも、公然西海使とか、遣唐使とか云ふ者を遣はす樣になりました。此始めは推古天皇の時で、大禮(官名)小野妹子を大使として隋國へお遣はしに成つたが、夫れ以來と云ふものは、頻りに隋及び唐の國、或は高麗、百濟の國々へ使を出し、彼國の制度、文物等を輸入せしめ、引き續いて孝德天皇の白雉四年には小山上(官名)吉士長丹と云ふ人を遣唐大使とし、小乙上(官名)吉士駒を副使として唐土に遣はされてから以來は、暫暫遣唐使を派遣して、彼國と交誼を結び、一も二もなく彼國の事物を輸入したので、古代よりの質朴な神代風は漸々に消滅して、孝德天皇以後と云ふものは純粹なる支那風が宮廷に跋扈して、制度文物は申す迄もなく、宗敎、人情、風俗、工藝、等全く支那風に化したのである。其中にも尤も變化したのは服飾であります。

旣に御承知の通り、神功皇后が三韓を征伐されて

からと云ふものは、彼國民は大に我邦の國風を慕ひ、應神天皇の七年には三韓の民が歸化し、同十四年には、秦の始皇の末で融通王と云ふ人、百二十七縣の民を率ゐて歸化し、金銀とか、玉帛とか、種々の寶物を獻上した、此時百濟からも、裁縫や機織の業に上手なる工女を貢し、同二十年には後漢の靈帝の後で、阿知使主、都伽使主と云ふ人十七縣の民を率ゐて、帶方と云ふ處から歸化し、次で歸化する者が澤山ありましたから、朝廷よりも、大倭の内に土地を賜ひ、融通王の一族は、養蠶及び機織の業に達して居たものですから、姓を秦氏又は太秦と賜ひ、阿知使主の一族は、綾を織るに妙を得て居たものですから、漢直と云ふ姓を賜ひて、一族非常に蕃衍した由、歷史に見えて居る。次いで三十七年には特に朝廷より、阿知使主、都加使主の二人を吳の國へ遣はして、裁縫に長じた人を求めしめられた。吳の國王は直に其命を奉じて、兄媛、弟媛、吳織、穴織、の四人を奉つたこともある。又三十九年には、百濟の直支王の妹新齊津媛、七人の婦女を率ゐて婦化し、雄略天皇の十四年には、身狹の村主靑と云ふ者、吳國より織工吳、織、漢織、二人、縫工、兄媛、弟媛二人を率ゐて歸國し、其他百濟、新羅、高麗、任那、あどの國々から、どし／＼歸化して來た、處で其中には學者もあり、美術家もあり、工業家もあつたのですから、凡ての事業が大に進歩して來たのである。

斯く多數の支那人が入りこむで來たものですから、好奇心に富で居る人達は、早速支那風は優美だとか、高尚だとか唱へて、ぼつ／＼と眞似る樣に成たのが始まりで、それが後には大に流行する樣に成たものですから、何日しか上古の筒袖は太

く長く成て、昔の面かげは全くすたれてしまつたのである。併しまだ〳〵質朴な所は少々在つた。然るに雄畧天皇と云ふ御英明の御方が位に即かるるや、何んでも國を富ますには、殖産興業を盛にせなければならぬと思ぼし召され、倭、河内などに居る歸化人を使役して、各國に桑を植ゑしめ、養蠶事業を大に奬勵されました。皇后さんも非常に御熱心で、自ら桑を切つて與へられたと云ふことである。同時に綾部、飛鳥部、二つの衣縫部を設け、漢織、呉織を部長として機織を監督せしめられたことも歴史に見えて居る。特に秦氏の子孫も勵精して、養蠶、機織の業に從事した樣子である。上に座します方でさへ此通りですから、下々の者迄熱心に蠶を養ふ樣になり、衣縫部の氏族もこれが製作を勵み、絹布類も隨分精巧なものが澤山出來だしましたから、高貴の人々はこれを衣服に使用する樣になりまして、少し華美に流れ樣とした際に佛敎と云ふもの迄這入つて參りました。所が案外日本人に待遇されましたので、續々種々の坊さんがやつて來た。而して其度毎に綾とか錦とか云ふ樣な、美くしい品を持つて來て自慢した。そこで負けず嫌ひの日本人は、早速織方を習つて、夫れ以上の品物を織出す樣に成りました。始めの内は、高貴の人達の室内裝飾に用ゐて居りましたが、遂には裝飾のみで滿足せず、衣服に造つて着るに樣になりまして此以來衣服は段々華美になりまして、從來の布類は、全く高貴の身を離れてしまひました。

（以下續出）

訪問録

吾水生

栁橋刀自が最も高尚なる理想を抱いて、之を實行

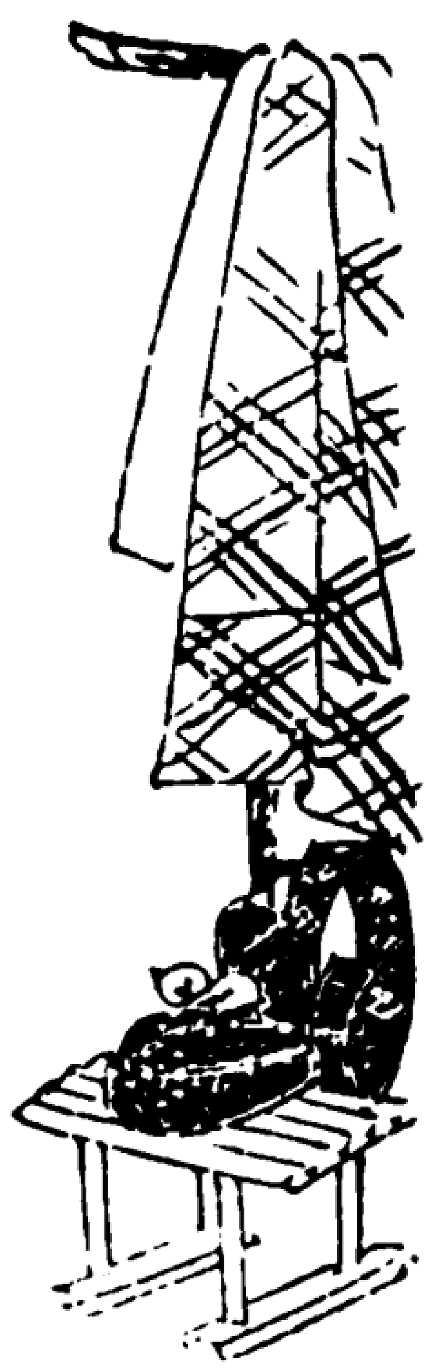
しまた實行しつゝある事は、既に本誌に掲載した略傳でも明かであらうが、其後私が駒込蓬萊町の御宅へ訪づれて、新に見聞した事實の概要だけを記して、倘一層其人と成りを知ると同時に、いかなる特點を持つて居らるゝかを紹介する積りで、つまり略傳の餘波の如きものである。これは決して無益の事ではないと信ずる。

第一に注意すべきは家庭の有様である。刀自は初め、郁文館中學校長たる令息棚橋文學士と同居せられたが、他の二三の人から、家庭教育を施して貰ひたいとて令嬢をあずけられ、且は近頃身體の少しく衰へたるため、其靜養かたがた令孫を連れて、今の所に移られたのである。駒込の大通りから殆ど二三町離れて、草津温泉のあたり、實に閑靜なところで、いかにも適當な場所である。而しあらゆる婦人會、多くの學校等に日夜盡瘁せられて居るから、或は御留守かとも懸念したが、幸ひに御在宅で、書齋に招ぜられお目にかゝる事を得たから、種々の御意見も伺つたり、且經歷中の面白き節などを漏らさず承はらうと勉めたが、固く謙遜せられて、十が一の御意見しか聞かなかつたのは聊遺憾であつた。其談話の中に、私は無學なれども、割合に一技藝だけは漸く人後に立つ位であるといはれた。是は全く謙遜せられた言葉で、刀自は學問が深く、而も心的學問に最も重きを置くといふは今更贅言する迄もないが、之と同時に實用的學問を疎かに仕ないことを證明して居る。それは論説を見ても知られるであらう。現今の女學生などは、これに對する知識が最も缺亡して居る。堅固なる意志もなくして、唯喋喋と辯論する者が多い。家政を脩むるよりも其學問を自負する。美的思想を發揮するよりか其技術

で甲乙を爭ふ。畢竟根本的に學問せずして、浮いた學問をするといふ狀態である。刀自は即ち此弊を觀破せられたのであらうか。元來女子は家を齊ふのが主なる任務だから、精神はもとより、卑近なる學問も必要なことで、即此の二つの備つた人が完全なる婦人である。刀自が多くの艱難苦楚を嘗めて、婦人の天職を全ふし、德操學藝共に人の標幟となり、老いて益々壯に女子教育に性命を顧みる暇がないほど盡さるゝのは、教育家の眞髓を得たもので、既に世人の要求信賴の重い事を知るに足る事實だと信ずる。かく完全になれと諸媛に強ひはしないが、此方針に據られる事を望むのである。たとへ女子教育に熱心せられ、滔々と家說を述べる人があつても、一身の素行が卑劣で汚穢で、衆人に批難される樣では、それ丈の効能がない。子女の摸範的人物として稱すべからざる僞教育家だが、刀自の經歷は誠に立派で、一も汚點のない玲瓏たる寶玉の如きものである。蓋しどんな高尙の思想があつても之を實行じなければ善とは云へない。凡て道義上の眞價は行爲に依りて定まる事を自覺しなければならぬ。嫁にいつても家を修むることを知らず、夫を慰むる事も出來ず、奴婢を使用する能力がない樣では、海程學問があつても決して役には立たない死んだ學問といはねばならぬ。刀自の言葉はたしかに此邊の消息を洩らしたので、まことに時弊に適中したものだ。能くみなさんに玩味して貰ひたい。現に刀自の家庭は、百事萬物能く整理してあつて、華奢ならず、否寧ろ質朴で、何となく高潔、端麗、清新の感がある。凡ての器具まで皆所え顏に居る樣の氣がする。其上に、溫順なるが中に犯すべからざる嚴肅の處あり、また端然たる中にいふにいはれぬ溫和の點が

ある刀自がこの裡に居らるゝから、其家内の平和で樂しいことは、恰も春風駘蕩たる如く、眞に一箇の桃源である。後進及家族などの、ひたすら敬慕の念を禁じ得ないといふたのも成程と首肯された。だから女中などは、全く心服し感化せられて、禮儀も正しく却つて此身に汗が出る樣であつた。刀自は可成自分の仕事は自分でする樣になされるが、若し女中などを使ふ時には、必ず何さんと呼んで、而も丁寧の言葉で命ずるので、彼等は喜んでその用事を行ふといふやうな譯で、他の主人顏をして空威張をするものと雲泥の差がある。

（未完）



樂園



家庭小說 ひめもゝ

堀内新泉

今靜に圓窓を開けて、梅の蕾もまだ堅い庭の景色を見渡すのは、年の比十四五の、色の白い、目元の優しい娘であるが、今日は常になく髮も綺麗に桃割に結つて、服裝も不斷よりは幾何か綺麗に仕ては居るが、面に浮んだ憂ひの色は、冷い霙の降つた昨日よりも今日は一トしほ目立つて居る。

日は最う彼此午後の二時頃で、天は蒼々と晴れては居るが、殆んど絕間無く吹き來る北風に庭木の枝がブル〳〵を震へて居る。

娘は風の冷さに堪へかねて、そッと障子を閉め

ると倶に、

「姉さん只今」

突然背後から呼びかけたのは、十一二の小娘で優しい目元と怜悧さうに引締つた口元丈は、姉に瓜二ッと云つても宜い。

「お丶！美代ちやんお歸りかい」

さも嬉しげに姉は後に振返つた。

針の磁石に吸はる丶やうに、ズッと姉の傍に寄つて其の撫肩に靠れつ丶妹は、さも氣遣はしげに顔を覗いて、

「姉さん、今日も亦おッ母さんに叱られて？」

「い丶え」

「左樣？」

いぶかしさうに妹は、綺麗に結つた姉の髮、さては不斷と樣子のかはる服裝をヂロ／＼眺めて居る。

「美代ちやん、先ア此處にお座りなさいな」

「はい」

姉妹は殆んど膝と膝を突合せて座つた。

「美代ちやん、今日は大さう早かつたのね。まだ學校から下る時刻ぢやないでせう」

妹は點頭いて、姉の耳に口を當て、

「今日は學校に上つて居ても、何んでか姉さんのことが氣に爲るので、先生に病氣と云つて、一時間早く歸つて來たの……おッ母さんには内證よ。姉さん善くつて」

若しや虫でも、知らせたのではあるまいか。それを思へば、姉は最う顔をあげては居られない。朝日を受けた朝顔の萎れるやうに俯向いて、

「善く歸つて來て下さつた。さも無いことには私は最う——」

涙の迫つた低い聲で。

それとは夢にも氣の着かぬ妹は、綺麗に結つた姉の髮を我も早くと眺めつゝ、

「姉さん、今日は何處へか行らッしやるの？」

「はい、行くのよ――美代ちやん……姉さんは――……」

「さう、ぢや姉さん、私も一緒に伴れて行つて頂戴な！」

妹は莞爾して。

「美代ちやん今日は一緒には――行きたくも行かれないのよ」

「何故、姉さん――……」

尚摺寄つて、怨むがやうに。

姉は雪の兩手を顏に當てつゝ

「美代ちやん、何うか病はないやうにして、御父さんや御母の仰有ることを善く聞いて下さいな！、姉さんは急にね、今日の四時三十分の滊車で、俄に遠い所に行くやうに成つたのよ」

指の間から涙がハラ〳〵漏れて來た。

「姉さん何處に？」

妹はその手に緊乎取着いた。

「東京の叔父さん所に――……」

「何故？何うして？」

「何うして、と云ふことも無いが――唯――」

妹も頓に涙含んで來た。小さい胸は涙に一杯滿されて、最う口は利け無く成つた。

「最う三時には家を出るのですから、美代ちやんが今日は一時間早く歸つて下さらないと、最う斯うして會はれずに、私は行つて仕舞つたのよ」

「私いやだわ――姉さんが居なく成つちや――」

妹は姉の膝に突伏して、ワッとばかりに泣出した。

おもひは變らぬ姉のお園も、哀別の涙に紅の

袖を濕して、まだ幅の無い妹の脊に額を押着けつゝ、

「だが美代ちやんお前は、善くこそ今日まで、私を色々親切に仕て下さつたのね——私は眞個に嬉しいわ」

「姉さん私のおッ母さんは、眞個に酷い人だはねエ」

「何んの！皆この姉さんが惡いのよ」

「左樣ぢや無いわ——皆私のおッ母さんが無理なんだわ——私は善うく知つて居るのよ」

「美代ちやん、そんなことを云ふものぢやありません」

「だつて、だつて、餘り酷いわ——私の大切な姉さんを他所の家になんか——遠い所に」

妹の悲みは極に達して怒に變じた。

「そんなこと云ふものぢや無くてよ美代ちやん——皆な私が惡いんだから——」

「姉さんは皆なが褒めるわ、おッかさんが邪見なのよ」

「アレまたそんな事を——勿體ない。だが美代ちやん——今度生れて來る時は、おなじおッ母さんのお腹に宿つて來ませうね」

妹は又わッと泣出して、

「私は眞個に姉さんが、お愍然さうでなら無いわ」

姉は感謝の涙に咽せび、

「お前さんがこれまで何時も、左樣親切に云つて下さつたので、美代ちやん私は今日まで生きて居られたのよ——彼方に行つても時々は、何うか便りを聞せて下さいな。姉さんはそればかりを便りにして、世に存へて居りますからね——」

姉は泣々妹の顏を視て。

「姉さんも毎日お手紙を下さいな!」
「進げますとも――」
云ひつゝ、姉は、また涙を新にして、
「だが美代ちやん――」
その手を取つて、
「最う今夜から――一所には寢られないのね」
妹はキロ〳〵と涙を流し、最う我が望みは盡き果てた、と云ふやうに何人にも云はず稍暫時姉の顏を見詰めて居つたが、
「姉さん、私は最う死んで仕舞うわ――」
折しも丁度庭の枯木で、二聲三聲烏が啼いた。

* * * * *

心の優しい姉のお園が、我が身に心を殘しつゝ長の旅路に着いた夜から、繼母の喜びに引換へて、妹のお美代は目を泣膨して、御飯も食べず口も利かず、時々帶の間から姉の寫眞を取出して見ては、ホロ〳〵と涙を流し、昨日よりは今日と沈み勝の小女に成つた。
姉に別れて七日の後に、お美代は相變らず愁ひに沈んで學校から歸つて來ると、母が一封の手紙を投げて不平らしく、
「いくら云つて聞せても解らない娘だね。何故最と生々と仕て居ないのだ」
「おや!姉さんから――」
爾來初めて、愛らしい乳齒を見せて莞爾し、お美代は戀しくその手紙を拾ひ取つて、その節姉と別れた圓窓の傍に行つた。
嬉しやと封を切つて、何んなことが書いてあるか、と樂んで卷紙を解けば、懷しい手跡で、髮のやうに細く書いてある。
ア、戀しい〳〵美代ちやんに東京から手紙を進げますわ、善く讀んで頂戴な美代ちやん――姉

さんは昨日無事で東京に着きました。叔父さんも叔母さんも大層可愛がつて下さるから安心して頂戴な。東京は實に綺麗な所ですよ。けれども、美代ちやんが居ないから、何を見ても私には唯最う悲しいばッかりですわ。明日は叔母さんが、上野や淺草の公園に伴れて行つて下さるとおッしやるの――美代ちやんも御いッしよなら、私はまア何んなに嬉しからうと思ふのよ美代ちやんは、その後何うして居らッしやるの――矢張毎日御機嫌よく、學校に上つて居らッるでせうね、エヽ、美代ちやん。何うか病は無いやうに勉强なさいよ――お願ひですからね。姉さんは最う美代ちやんのことが氣にかヽつて仕樣が無いのよ――特に美代ちやん位の娘を見る時は、アヽ今頃は美代ちやんは何うして居るかと思つてねこの身體に羽根が欲しく成りますわ。此地に來る時は汽車の中で、始終モウ美代ちやんのことばかし思ひ出して、眼にハンケチを當てヽ居たのよ。私が居なく成つてから、美代ちやんは誰と一所に寢なさるの――お父さん?おか母さん?それとも一人で、エヽ美代ちやんは何うか風を引かないやうに成さいよ――まだ寒いからね。姉さんは一人で寢ますの――美代ちやんの寫眞を抱いてさ、姉さんは何うしても、停車場で別れた時の美代ちやんの姿が眼前を離れないのよ。また會はれる日もあらうから、御父さんや御母さんの仰有ることを善く聞いて、病らはないやうにして御出下さいよ。今度は先ア此丈ね。美代ちやんや左樣なら――御機嫌宜う。

一月二十日　　園子より

みいちやんへ

戀しい水莖の跡を幾度も〳〵淚ながらに、美代子は讀んだが今日も亦帶の間から姉の寫眞を取出して眺め、

「姉さん！何故默止つて居らッしやるの？」

兩眼からハラ〳〵と淚が走つた。

・　・　・　・　・

お園は上京後三日目に緞茶の袴を穿く身に成つたが、これに就けても妹のことは少時も忘れる間が無い。ある日學校から下つて見ると、我が机の上に一封の郵便があつたが、それは慥に妹の美代ちやんから來たのであつた。

「あゝ！」

取手もどかしく封を切つて、別に異つたことも無いか、無事なれかしと讀み行けば、

姉さんお手紙ありがたうよ。わたしも姉さんのことは、ちよつとでもわすれるまがないのよ。姉さんのおせんだの、まくらだの見るたんびに、わたしは姉さんのことを思ひ出して、モウかなしくつて、かなしくつて、あひたくつて、あひたくつてたまらないのよ。わたしをかあいさうだとおもふなら、早く姉さん、かいつてきてちやうだいな。えゝ姉さん、かいつてはくださらないの。早くかいつてくださらなきや、わたしはしんでしまひますよ。ばんは、ひとりでねますの、いつものおへやに――姉さんのしやしんをわたしもだいて――

ばつ〳〵と讀んで行くお園が目から淚が泉の沸くやうに溢れて居る。

「彼んな可怖おッ母さんの子に、何うしてこんなに先ア心のやさしい妹が――眞個に憫然さうでならないわ」

淚を拭いて、またばつ〳〵と讀んで見れば、お

園はいよ〳〵胸が痛い。
わたしは、どうしても、姉さんに長くわかれては居られないのよ。こひしい――姉さんのお顔を見なくちや、ごはんもおいしくなく、あそんで見てもおもしろくないわ――たゞモウ姉さんにあひたいばかりで、早くかいつてきてちやうだいよ、えゝ姉さん――あひたいわ見たいわ、姉さんはさうはおもつてくださらないの……
お園はまたバラ〳〵と手紙の上に涙を落した。尙細々と我が戀しさを書いた末に、姉さんがお正月にこさへてくださつたお手玉は、ゆふべねずみがくひやぶつてしまつてよ、をしくつて、をしくつてたまらないわ。わたしどうかして、こんどあのねずみをぶつてやりたいと思ふのよ、ほんとうに、にくらしいねずみだわ――
こゝに讀み至つて、涙の中にもお園は慘として微笑んだ。最後に至つて、
姉さん一日も早くかいつてちやうだいよ。いつかいつてくださるの、一日もおはやくね、ほんとうにごしやうですから、姉さんよくつて。さようなら、姉さんごきげんよう――
　一月二十六日　　美代子より
姉上さまへ

漁夫物語

露國文豪　プーシキン著
佐　泊　氏譯

ある海邊に老人夫婦が住んで居ました、この夫婦は三十三年間も同じ少さな古ぼけつた、不潔な土小屋を住居として、日毎にお爺さんは海に行つて漁魚をし、お婆さんは、内に居て終日糸を紡い

で、やつと其日〳〵を送つて生活して居ました、
或る日のことにお爺さんは例の通り網を肩にして海に參りまして、一網打ちましたところ、つまらない塵芥が掛つて來ました、また一網打ちますと今度は海の草が掛つて來ました、三度目に打ちますと、ナント不思議なことには金魚が、而も普通見たことのない金魚が網に入つて來ました、ところが此金魚は人間の樣な聲を出しましてお爺に云いますには、「お爺さん〳〵私を元の海に放して下さい、さうしたら、貴方の御入用のものは何でも上げますから」と云ひましたからお爺さんは驚たの愕かないのじやありません、このお爺さんは三十三年間も漁師ばかりして居ましたが魚が人間の言葉を使ふなど云ふ事は、聞たこともありません、あまりの不思議さにお爺さんは「オ、金魚よ、御機嫌能う御歸り、私はお前から何も貰ふ事は思ませんと云つて海に放して遣りました。
早々お爺さんが家へ歸りまして、お婆さんに此不思議を語りますには『お婆さん私は今日投網に行つて網を打つたところが一匹の魚が掛つて、そして其魚は金魚であつたが、驚いたには、それがなんと、人間の樣に口をきいて、お爺さん〳〵私を元の海へ放して下さい、さうしたなら何でも入用のものは上げますからと云つたが、私はあまり不思儀なことだから、何もいらぬと云つて海へ放して遣りました』、と噺ますとお婆さんは『お前さんは眞實に馬鹿だよ、いくじのない人だ、何んだつて、その金魚に何も貰はずに來たんだらう。麥粉でも貰つて來てお呉んなさいよ、もう內に粉がありやしませんよ』と大層お爺さんに怒りました。怒られましたから、お爺さんは又其足で元の海の處へ參りまして見ますと、海面は穩で、而して漣

が打つていました、そこでお爺さんは金魚を呼びますと、金魚は水面に浮びましてお爺さんの方へ近寄りまして『お爺さん、何御用です』と金魚が問ましたお爺さんは叮嚀にお辭儀を致しまして、「お免なさい、金魚さん、實は先刻内へ歸つた處お婆さんが大層怒りまして此年寄を休まして吳れません、麥粉がないから、夫が欲しいと云ひまして、それに内で尤も麥粉もなくなつているし」と返辭しましたら、金魚は、歎きなさるな、機嫌よう内へ御歸りなさい、粉袋の新しいのが出來ましやう』と云つて波間に隱れて仕舞ました、お爺さんが内へ歸つ見ますと、果してお婆さんの傍に新しい粉袋がありました。ところが、このお婆さんは、まだきゝません、直ぐお爺さんに怒鳴りまするは、『お前さんは、眞實に馬鹿な人だよ、いくじのない、粉袋が出來たからで、それでお前さんは澤山だとお思ひか、今一遍行つて金魚に願つて家でも貰つて來てお吳れ』と云つて怒鳴付けました。

お爺さん又々海に取つて歸りましたら、今度は海の水は濁つて居ます。前の樣にお爺さんが金魚を呼びますと、金魚は波間に見はれましてお爺さんの方へ參りました『お爺さん〳〵何、御用です』と金魚は問ひましたお爺さんは叮嚀にお辭儀をしまして『金魚さんよ、内の婆さんは、まだ下らないことをグツ〳〵云つて、この年寄を休ませません、こんどは怒りぽい婆さんが、家が欲しいと云ひますので』と云ひましたら、金魚は『お爺さんお歎きなさるな、安心してお歸りなさい、家はちやんと出來て居ましやう』と云つて波間に隱れて仕舞ました。

お爺さんが、自分の内へ歸つて來て見ますと、是

まで住んで居ました古つぼけた土小屋がありません、跡形もなくなつてゐます、そして新しい建てたばかりの樣な立派な家が出來て居ました、しかも立派な門構への家が。その家の窓から例のお婆さんが外を眺めて居ましたが、お爺さんの歸つて來ましたのを見て、また〳〵怒鳴りました『馬鹿なお爺さんだね、ほんとにお前樣には呆れて仕舞ふよ、家が出來たからとて、モ一回行つてお出なさいよ、私は斯樣眞黒げな百姓女でをるのは嫌でたまらんから、立派な華族樣の奥樣の樣になりたいたら、左樣金魚に云つて、願つて來てお呉れ』と云ひました。

お爺さんは止むを得ませんから、又々海邊に參りました、海は餘り穩かでなかつた、いつもの通りお爺さんは金魚を呼びますと金魚は波間に見はれまして、お爺さんに向ひ『お爺さん何に、御用』と問ひましたから、お爺さんは叮寧に辭儀を致しまして『御免なさい金魚さん、内の婆さんはまだ、ぶつ〳〵小言を云ひまして、此老人に休ましては呉れず、斯樣なつまらない百姓女で暮らすのは馬鹿らしい、何うか華族さんと成りたいと申して』と話しましたら、金魚は『お歎きなさるな、機嫌よう御歸りなさい』と答へました、

そこでお爺さんはお婆さんの處へ歸へつてみますと、何うでしやう、立派な家が出來て居て、玄關の入口の處に、實に高價な貂の皮の胴衣、綿繻の女袴、金光燦爛たる金製の腕輪を兩腕に、美麗なる靴を穿き、眞珠の頸飾を掛けて、傲然とかまへて居ますのは例のお婆さんですから、お爺さんは『御親造……奥樣……今日こそは、お前も滿足であらう』と云ひました、ところがお婆さんはお爺さんに廐掛りを云付けまして、馬小屋へ追やりまし

た。一週間たち、二週間たちまするうちに、お婆さんは又々お爺さんに命令ますには『モ一片金魚の處へお出で、私は是那華族位では嫌なんだから、モットえらい王樣になり度いのだから』と云ひますから、お爺さんは呆れまして『何に、王樣だ、其樣にすきな眞似が出來ても、不足なのか、エー最う行くまい、話しも仕舞』と云ひましたので、お婆さんは之を聞いて、怒り出し、お爺さんの頰を打ちまして、云ふには『何故お前は、私に口返答をするだ、この華族の奧さんに向つて、早くお出、嫌でも應でも遣らずにや、置かないのだから、土百姓奴』詮方なしに、お爺さんは海邊に參りまして、見ると、海の色は、眞黑に成つて居ました。例の通り金魚を呼びますと金魚は波間に見はれまして『お爺さん、何御用』と問ひました。お爺さんは丁寧に辭儀を致しまして『御免なさい、金魚さん、內の婆は又謀反を起しまして、今では最う華族などでは足りないで、今度は王樣になり度と申して』と話しました。すると金魚は『お爺さん、お歎きなさるな、機嫌能く御歸り、お婆さんは王樣になれるでしやう』と云つて波間に隱れて仕舞ました。お爺さんは吾家へ歸つて來て見ますと、何うでしやう、立派な宮殿が眼の前に出來て居て其宮殿の大廣間には、お婆さんが女王の服裝をして、サモ威嚴敷有樣で食卓に就いて、多勢の近侍の役人達が女王の爲めに舶來の葡萄酒をコップに注いで居る、女王の兩側に立つて居る護衛の役人は、肩に軍斧を負ひ、威儀を繕つて居ます。この有樣を見ましてお爺さんは愕いたの驚かなかつたのではな

かつた、直樣女王の足許に、平れ伏して『王樣よ、今日は、是れこそ、お前も滿足であらう』と云ひましたが、女王は見向も遣らずに、この老爺を門外へ追放と目付で近侍の人に命じましたから、役人達は、直ぐにお爺さんを門外へ追出しました、其時ちやうど門衛の番兵の斧で、危くも切られる處でした。之を見ました多勢の群衆は一度にドット笑ひ出して『ヤイ老爺ざまア見ろ、柄にもない事をしやーがるから』と嘲りました。

夫れから、一週間たち、二週間とたつうちに、お婆さんの女王は又もや、不足を感じたものと見え、大勢の侍臣を諸方に走らして、お爺さんを搜索させまして、自分の處へ連れて來させました、而してお婆さんの云ひますには『お前はモー一片海に行て金魚に願つて來てお呉れ、私は最う女王も、つまらぬ樣思ふから、今度は、海の王となり、大洋の中に住ひ、而して彼の金魚が臣僚と爲つて、私に奉仕る樣なりたいのだ』と云ひますから、お爺さんは今度は逆らはず、口返答をせずに、海邊に行きました。海は荒れに荒れて、怒りたる濤が岩に破砕け、黒雲天を蔽ふて、誠に凄い有樣でした。何時もの通り金魚を呼びましたら、相不變波間に見はれまして『お爺さん、何御用』と問ひますから、お爺さんは、叮寧に御辭儀をしまして、『御免なさい、金魚さん、私しや何うしたものでしやう。あの婆さんは最う女王は嫌で、今度は海の王となり、大洋に住み、お前さんを臣として使役たいと云ひます』と話しました、すると、金魚は何にも云はずに尾で水を撥ねて海の底深く沈んで仕舞ました、お爺さんは金魚の返事を待つて居ました、永らく待つて居ましたが、返事がないから、詮術なしに歸つて見ますと、何うでしよう

再び眼の前には、以前の古つぼけた土小屋ト、床の上には元のお婆さんが座つて居ました、而してお婆さんの前には以前の破れた粉袋が依然として殘つて居ました　（完）

文林

春雨　東久世通禧

みるからうちに緑のまさることゝちして
庭のしは生にはるさめのふる

朝春雨　鍋島直大

風たえて雨おとのみそ聞えける
とふ人もなきはるのゆふくれ

春山家　長谷信成

まつとなき都ひとにも問はれけり
花うくひすのはるのやまさと

落梅風　西三條實義

此わたり梅のはやしはみえねとも
かせにちりくる花かをるなり

短艇競爭　宮地巖夫

進み行世のありさまを目にみせて
きそふ小舟のおもしろきかな

牡丹　三輪義方

ふかみくさ花のすかたをよそひなす
かさしのたまやはるのあさつゆ

雨中歸厂　北郷久政

春雨にかすみてそらはわかねとも
たちかへる厂の聲のさやけさ

岡雉　阪正臣

岡のへの小笹か上にちるはなを
はふきあけても鳴く雉子かな

杉　小出粲

なる神のおちしあとさへ苔むして
幾世へぬらむみねのおほすき

葉山にものしける折　本居直臣

いひ知らぬあかめなりけり浦波も
ことの葉山に花をそへつゝ

曲水宴　千葉胤明

わかかたにめくりくるまの桃の花
散こそうかへさかつきの上に

酒　遠山英一

塵の世ものかれ出たるこゝちして
うきをさけこそ嬉しかりけれ

池邊殘雪　鍋島榮子

春ふかきやまの大たき來てみれは
また岩間にはゆきそのこれる

垣若草　西四辻茂子

我かとのかきねにもゆるわか草の
みとり日ことに色まさりけり

徳川光圀卿　南鄕柳子

君か名のひかりは國にのこりけり
あらはしましゝふみの上にも

兼好法師　小池道子

はるさめのつれ〳〵草をかことにて
敎のたねをまきしきみかあ

艦隊操練　北島以登子

波かせのをさまれる世にいくさ舟
あらはすつゝの音のさやけさ

江上春風　松平健子

入江こくふねはかすみの包めとも
きしのやなきにゆふ風そふく

加茂眞淵　大谷章子

加茂川のあかれをとめて敷しまの

みちをはるかにひらきつる哉

雨後春月　中村禮子

あめはれていよ〱かすむ中空に
匂ひそめたるはるの夜のつき

雲雀　小川直子

長閑なる春の日のをかこえゆけは
まへにうしろに雲雀なくなり

夕霞　服部磯子

あかねさす夕日の影ものとかにて
西やまとほくかすみたなひく

詠三原山歌一首　下田春興

うまこりあやにともしき、鳴神の音のみき丶し、つきさかき伊豆の國なる、大島の三原の山は、あしたには烟吹きまき、ゆふべには烟なきかし、神の代よ今の現に、玉かづら絶ゆる事なく、奇しくもたてる山かも、まくはしく成る峯かも、其の烟吹まく見れは、たつ神のあたかまれる如、其けむりなきらふ見れは、たつ神のよこほれる如、うまこりあやにともしき、玉くしげ三原の山は、奇みたま今のをつ丶に、たふときろかも

風船

つはさなき身をなかこちそ君か代は
みそらをわたるふねもありけり

早春の月といふことをよめる歌
並短歌　渡邊龍子

くらおかみ雪をもふらせ、立田彦嵐ふかしし、冬はしもいつしかすきて、梓弓春し來ぬれば、吹風もや丶ぬるみつ丶、降雪も積りもあへす、はしり出の堤の柳、はひりの垣内の梅、梅も咲き柳も萌

えて、のどかあるこの夕くれか、萌出てし柳にもはえ、咲出し梅にもはえ、おもしろく見えてこそ渡れ、三日月のかけ、

咲梅の木の間に見えて打かすむ
　ゆふべの月に春をしるかな

吾やとの柳のまゆに三日月の
　こもれるかけも春めきにけり

旅人よ　　清水橋村

朝は東の海にあり
光は朝の雲にあり
西日淋しく顧みつ
旅路の暮をたゆとふな

脚絆露ちる秋の風
草鞋破るもためらはず
薪樵る翁山の人
見てこそ歩め旅人よ

春の糸遊野のかすみ
ゆるめな笠の紅のひも
旅の息杖手に振りつ
まひるの道を急げかし

橋立小女郎月に鳴く
夜の野みちは心せよ
百里かの山雲かゝる
故郷人は君おもふ

望める寶天にあり
黄金かゞやく國にあり
逆捲く浪にたぢろぎて

浦の船出をたゆとふあ
重き頸木の荷を負へる
牛さへ高き坂を越せ
魚釣る男海の人
見てこそ歩め旅人よ

渡し乙女に戀するな
草刈る娘見かへるあ
都に長く宿とらず
旅の掟を守れかし

草に蛇の夢ふまば
かばねむなしく雨かゝれ
心せよかし今見えむ
東國原白き虹



三月廿日兼題

夜春雨

天

大阪市東區平野町三丁目　桝田益子

みやひをかはるの雨よのしなさため
おもひしのぶの軒のたまみつ

評、趣向おもしろく、詞のあやもなべてにはたちまされり

地

内藤新宿番衆町　武谷長榮子

いつしかも雨とありけんよひの間は
はなのこすゑにつきもみえしを

評、のどかに、ほひふかし。

人　神田區美土代町三丁目一番地田中方　近澤和子

春の夜はしつかにふけてふみまなふ
まとにおとするあめそのとけき

評、めづらしからねど詞つゞきよくとゝのひたり。

甲之部

淡路　石田貞子

見し花のしなさためしておもふとち
うたけする夜にはるさめのふる

東京　林環子

あす見むとちきりし花をおもひねの
ゆめおどろかすよはのはるさめ

上田　岩間千枝子

ふけゆくもしらて文よむ窓のうちに
うめもにほひてはるさめのふる

羽後　古瀬りく子

はるさめのふるよはことに静かにて

ふしよかりけりたけのしたいは

豊橋　服部正子

夜もすからきくものとけし待わふる
はなのひもとくはるさめのおと

乙之部

わか門のやなきみたれてかけくらき
おほろつきよそあめになりゆく　淡路　泉久良子

床しくもこよひかきなすたまことに
れなあはしたるのきのはるさめ　和歌山　瀬戸ゑい子

はる雨のよはにふりしかけさみれは
たまをつらぬくあをやきのいと　筑後　鏡山増代子

あくかるゝこゝろもしらてさく花に
しく／＼ふれるよはのはるさめ　筑後　武田龜子

つれ／＼なとふ人もなしはるの夜の
のきのたまみつおとはかりして　熊本　田代治子

うめのはな月にみる夜のこゝろをも
しらてつれなくそゝくあめかな　東京　松村あさ子

ふく風になひくやなきのいとみねて
おほろつきよにはるさめのふる　東京　三好珍子

おほろにも月かけ見ねてはるの夜に
小さめふりしくおとのしつけさ　東京　柴村文子

しめ／＼とくらきのきはに花の香の
にほふもあはれよはのはるさめ　伊豫　竹村竹里子

さひしくもまた長閑にもきこゆるは　肥後　千知波橋子

はる雨はかやかのきはにたまみつの
　ふりしく夜はのはるさめのおと　茨城　飛野たに子

佐保姫のかせたにいとふはるの夜の
　おとしつかにもふれる夜はかな　茨城　内田さた子

夕日かけかすみてくれしのとけさの
　はなにつれなくあめすさふなり　廣島　衣笠澄子

こぬ人をまつよはふけてつれ〳〵と
　なこりや夜半のあめとなりけん　大隅　山田よれ子

しく〳〵とふるはる雨のおときゝて
　ふみゝてなれははるさめそふる　和泉　稲原菫子

月かけのわきてかすむと見しそらの
　ぬる夜はゆめものとけかりけり　東京　平尾あさ子

夜もすからしつけき軒のたまみつに
　かきくらしふるはるのあめかな　東京　宇山あや子

花の色もほのかに見ねしおほろ夜に
　ふるとしらるゝはるのあめかな　東京　宇山ふみ子

はるさめののき端にそゝく音はして
　しぬひてそゝくあめのおとかな　東京　鍋田よし子

おほろなる月も見ねしなさ夜ふけて
　いとしつかにもふくる夜はかな　肥後　溝口貞子

あかすみし月かけきねておほゝしく
　のきのしつくにあめそしらるゝ　山形　西塚まき子

玉さゝのたま〳〵つゆをはらにすは
　そらかきくもりはるさめのふる　大阪　中舘やう子

しめやかにかたりあふ夜のしな定め
　ふるともわかし夜半のはるさめ　越後　神戸春野子

　更けゆくのきにはるさめそふる

雨にさきあめにうつりてさくらはな
　こよひはあめにちらんとすらん　越後　神戸辰子

たね〳〵に音のきこねてはるの夜の
　あめこそいとゝさひしかりけれ　栃木　青木たま子

夕くれのかすみやあめとなりぬらん
　のきのうめかかうちしめりつゝ　武蔵　武谷雌子

うくひすのねくらの花もしめるらむ
　しつくたねせぬ夜はのはるさめ　三河　服部蔦子

雨ふらはわらひもねむとおもひれの
　さめてうれしきのきのたまみつ　三河　本多きさ子

さくらかりあすと契りてとくいねし
　よはにつれなくはるさめそふる　東京　横山初子

うちかすむむかひの山もくれはてゝ
　あめしつかなるはるの夜半かな　栃木　川中子てつ子

おほろ夜の花見むものとたとり來て
　おもはぬあめにぬれにけるかな　東京　小川たき子

文つくゑに寄そふわれもおのつから
　ねふりもよほすよはのはるさめ　肥後　田代艷子

まとにさすおほろ月よのかけきねて
　おとしつかにもはるさめのふる　埼玉　前野蒜賀子

つく〳〵と淋しきものははるさめの
　のきはにそゝくおとにそありける　東京　泥堂菊代子

くさまくら旅ねのやとのはるさめに
　みやこのはなもしのふ夜半かな　和歌山　池田松枝子

まとの戸もあけてねなまし春さめに
　にほひまさりしはなの香そする　愛知　角田とも爲子

たまみつにかよひし琴のねもたねて　東京　山本梓子

はるのよふかきあめそさひしき

丙之部

ともしびをけちたるのちに音すなり　いともしつけきよはのはるさめ　東京　山本靜子

小夜ふけて軒のたまみつおとすなり　はなのひもとくあめやふるらん　横濱　細谷まつ子

そよ〱とふく夕東風のおとたえて　よはしつかにもふれるはるさめ　東京　高森かし子

春のよのゆめ路にふりしあめのおと　さめてのちこそきゝさためけれ　京都　坪内りき子

みなひとはしつまりはてし小夜中に　きくもさひしきはるさめのおと　長野　臼井さひへ子

夜もすから音なくふりしはるさめは　わかはもよほすよすかなるらん　相模　鍋島春子

咲きにほふ花のあしたをまつよひは　こゝろにかゝるはるさめのそら　高崎　山田婦美子

やみふしてくるしむ母をなため居れは　またもふりくる夜はのはるさめ　伊勢　植木久子

月かけのかすむとみしをさよふけて　ふるやのゝきにそゝくはるさめ　越後　高澤れき子

おほろよの月もにほひてさきそめし　はなにつれなくはるさめそふる　越後　高澤やす子

春の夜のなかめさひしくふけゆきて　しのふにつたふのきのたまみつ　秋田　西木しけ子

小夜ふけてのきの玉みつおとせすは　ふるとはしらし木の芽はるさめ　備中　三井良子

おほろ夜の月やかすむとたちいてゝ　なかむるそてにはるさめそふる　備中　三井松子

春さめはおとなくふれとうめちりて　よすからかなるのきのたまみつ　肥後　德永萬壽子

さ夜ふけてしつかにそゝくはる雨に　野へのわかくさもはやいつらん　肥後　德永廣子

かすみたつ野への若菜ももえいてん　ふるものとけきよはのはるさめ　肥後　德永織子

ぬは玉の夜半のはるさめしつかにて　のきのいとみつおとのみそする　肥後　服部倫子

明日さかん花をさそひてよもすから　しめやかにふるはるのあめかな　肥後　佐々木學子

夜もすからふる春雨のねやのうちは　ゆめ路のはなにうかれぬるかな　肥後　佐々有鄰子

佐保ひめもかすみの袖やおもるらん　ふけゆくよはにはるさめのふる　河内　岡田みき子

長閑にもふくる夜半までをやみなく　ふれとおとなきはるのあめかな　岐阜　佐藤そう子

ふる雨のよはのねさめにおとすなり　うめかゝにほふのきのたまみつ　東京　河田いし子

つれ〱と眠りもやらすふくるよに　おとしつかにもはるさめそふる　肥後　服部充卄

心ちよくむすへるゆめのうきはしを　しつかにわたるはるのあめかな　肥後　佐々富枝子

宵やきのけふるとみえしゆふへより　ふりこそいつれ夜半のはるさめ　大隅　稻垣まさ子

旅まくらかたらふともゝなき夜半に

さひしくもふるはるのあめかな
つれ〳〵と伏家のやなきうちたれて　埼玉　横田音羽子
れふりもよほすよはのはるさめ
小夜更てきゝさたむれはあつまやの　埼玉　横田秋子
あまりしつかにはるさめのふる
あまりにも霞むと見てしおほろ夜の　甲府　名取正代子
ふけゆくまゝにあめとなりぬる
なかき日にみはてぬ花をおもひねの　肥後　野口静子
ゆめをやふりてはるさめそふる
春さめはおとなくふるかふくる夜の　肥後　佐藤圭子
ねさめさひしきのきのいとみつ
うくひすのねくらの宿やいかならん　三河　永井さい子
おもひやらるるあめの夜はかな
うめかをる軒をめくりてよもすから　信濃　岩間種子
おとものとかにはるさめのふる
小夜ふけて越路にいそくかりかねの　東京　皆戸袖子
つはさにかゝるはるの雨かな
つきはなの中をへたてゝつれなくも　伊勢　河原芳子
ふりまさりけりおほろ夜のあめ
あすは花見んとむすひしはるの夜の　大阪　伊勢村春子
ゆめさへあめにちりにけるかな
花ちらすあめとおもへはいとゝしく　大阪　塩谷久子
さひしさまさるはるの夜半かな
春さめのふる夜はわきてさひしさに　大阪　大阪谷信子
ちきりしともをまちわふるかな
つはきちる音きこゆすはいかにして　秋田　古瀬とよめ子
ふると知らましよはのはるさめ

そほぬれてかへるてかひの猶みてそ　羽後　早川のぶ子
ふるとしらるゝよ半のはるさめ
のとかにも木のめはる雨ふるよひは　越後　田中はま子
はなみころもゝいそきてそぬふ
ともし火のかけふけゆきていとゝ我　東京　竹村貞子
ねられぬまとにはるさめのふる
花の下にともとかたらふゆめさめて　東京　宇野政子
そと雨しつかにはるさめそふる
こよひしもはなまち遠におもひねの　東京　篠田圓子
ゆめちのとかにはるさめそふる
よもすからふるやの軒のはるさめに　伊豫　岩田春子
むすひもあへすゆめそやふるゝ
おほろ〳〵かすむとみれはつき影は　東京　野口三子
いつしか消ねてあめとなりぬる
花みんとたとるゆめちもうちしめり　安房　鈴木秀子
あたりしつけくはるさめのふる
かそへつゝこのよあかさん打しめり　長崎　八尾いへ子
あめのふる屋のゝきのたまみつ
さらぬたにとふ人もなきわかやとは　青森　吹田たけ子
いとゝさひしきはるの夜のあめ
つれなくもふる春さめにこのゆふへ　東京　馬場ふく子
あたらさかりのはなやちるらむ
野あそひをあすと契りてねたる子の　下総　大木光子
こゝろやいかに夜半のはるさめ
老にける身はまたさむく小夜ふけて　東京　林鄰子
ねられぬのきにはるさめそふる
明日さかん花とおもへはふりいてし　肥後　仁保しま子

こよひのあめそまつはうれしき

明日見んとおもひし花のこすゑさへ
こゝろにかゝる夜半のはるさめ　長崎　日高かす子

ふくる夜のねさめ淋しきまとのとに
ひとりおとなふはるのあめかな　長崎　矢野濱子

あをやきのあしたの色やいかならん
木の芽はるさめ夜半にふるなり　長崎　内藤みよ子

ひるよりもさひしきはるの雨の夜の
あたゝかなるそうれしかりける　伊豫　上原のぶ子

あすは花みむとおもふ夜のはる雨は
のとけきものゝのとけくもなし　山口　村上操子

花見をはあすとちきりてねしものを
さめてくやしきはるさめのおと　三河　河合ぬひ子

かくてこそふゝめる花もめくむらめ
をやみなくふるよはのはるさめ　三河　竹尾みね子

たえ〳〵のしつくの音に知られけり
ふるやのゝきのよはのはるさめ　三河　早川たれ子

琴の音もしめりかちなりのきくらき
はるのあまよはひともとひこて　三河　三宅中枝子

よもすからふる春さめはひとしれす
はなをはくゝむこゝろなるらん　富山　長谷川初枝子

おほろ夜の月かけくらくなりはてゝ
かすみの間よりはるさめそふる　肥後　田代綾子

濱花江のきしのあしむらかせなきて
夜半しつかにもふれるはるさめ　横濱　竹内久子

春のよのまとうつあめのおときゝて
こゝろのとかにゆめむすはまし　東京　高橋常子

よもすからねられぬ身には閨の戸に
そゝくもさひしはるさめのおと　東京　牛山業子

音もなくふるはるさめはうくひすの
ぬるよのゆめもさまさゝるらん　陸前　吉澤たき子

あつさゆみおして春さめふるよはの
ねさめのとこはさひしかりけり　名古屋　佐野ふじ子

かたらはむ友なきよはにはるさめの
おときくはかりさみしきはなし　名古屋　木下鶴子

あまりにもかすむ月よとおもひつゝ
おり立つそてにはるさめそふる　尾張　角田あや子

あまたれの音もしつかにふけ行きて
はるをつたふるよはのあめかな　東京　岡田春子

はる雨のそほふるよはゝさひしくも
しめりかちなるともし火のかけ　東京　秋山鏡子

ぬは玉のよはにはるさめふりいてぬ
のへのわかくさいろまさるらん　北海道　川上ふさ子

おほろよの月かけきえてまきの戸に
おとせぬあめのふりかはりぬる　東京　椎野秀子

花のもとにかよふたのしきゆめさめて
さひしきよはのはるさめのおと　東京　椎野薫子

よをこめてふりいてぬらんはる雨の
おともさひしきのきのたまみつ　東京　椎野清子

しめやかにふるよのあめに春の野は
けふよりあすはいろやそむらん　東京　椎野鋭子

音をさへなにしのふらんまきのとに
ふるともわかぬよはのはるさめ　東京　椎野ぬき子

あす見むとちきりし花もちりやせむ　信濃　岩岡千代子

こゝろなやますよはのはるさめ
ひとしれず花のひたひもとかんとや　東京　北島功子
おとなくそゝく夜半のはるさめ
春の夜のあめのとかなりしきたへの　東京　北島操子
まくらにちかくうめもかとりて
さよ更てひとりかゝれる文つくゑに　名古屋　瀨木せき子
うたゝねさそふはるのあめかな
さよふけて軒のたまみつおとすなり　東京　川村松子
ふるともわかぬ木のめはるさめ
しつけしや文よむまとにおともなく　東京　鍋田ふち子
しのひてふれる夜半のはるさめ
しめ〳〵とふるもさひしきはる雨は　東京　戸塚てつ子
ねられぬまゝにゆめもむすはす
風ぬるみふりくる夜半のはるさめは　東京　吾妻ちか子
いとゝしつけきものにそありける

三月廿日兼題

學校の樣子を問ひ合されしに答ふる文

天

東京市四谷區大番町八十三番地　山本梓子

いつとてもうれしき故郷人の音づれ、鶯の初音にもましてめづらかに拜しまゐらせ候。なつかしき野邊の梅は、今を盛と咲匂ふとかや。のたまふ如く去年の此頃は、諸共に袂つらねて、其下蔭に立やすらひしも、今は只昔語となり侍にし哉。扨も、問はせ給へる學びやは、おのが行かふ故にかたひくには候らはねど、みどりが中の紅とや申すべからむか。あまたあるうちにも、いとよくとゝのひて、師の君達のねむごろなるは更なり、女の學ぶべき事何ひとつそなはらざるなく、かつは又、今の世の奢りにのみはしるをなげきて、常に綿服を用ゐしめ、朝に夕に、人の母たるべき道をさとし敎へらるゝなど、まことの父母のやうにてなむ。そがある所は、都のうちながら木立ものしづかにかう〴〵しき富士の高根たえず見渡されて、おのづからなる心の敎ともなり、身のやしなひともなり候。設けある塾のありさまは、いとうつくしう、一の家庭のやうなれば、心おく事もなく、いつも春の海のごとき、長閑なる中に學の道はげまれ候。されば君にも、おぼし立給ひしとならば、御兩親樣の御ゆるし受けさせられて、必ずものし給へ。

この一とせがほどは、學びのまどの月花もたゞひとりいとゞ淋しう見侍りしを、又いにしへに立かへりかたみにたのしみ侍りなん、と心いられて、とりあへず御かへりごとのみ。あなかしこ。

評、學校のありさま、つばらかに知られたり。友の君もさぞや滿足におぼすらむ。昔のゆかりをうつしいでゝこん時をたのしむなど、なさけふかくしていとめでたし。

地

大阪市東區平野町三丁目　柳田益子

春雨のつれ〴〵なる折しもなつかしき御文よ。鶯の初音も物かはと嬉く青柳の糸の操り返し侍り。偕御妹の君には、御地の學びの庭をめでたく終へさせ給へれば、又こなたに學ばせ給んとや、御心じらひいみじき極みになん。問はせ給ふ學の舍の事こゝかしこに設けられ侍れど、かつて、諸共に通ひ侍りし某の校は、殊に名高うおはして、いやつぎ〳〵に、其道〳〵にくはしき人たちあまた打つどはせ給へるさへあるに、君にもまう昇らせ給ひしふしの師の君、今猶いまし侍れば、かにかくに御たづきも宜しうや侍らまし。妾が妹も過し春より行通ひ侍れば、いと床しがりて、とみにそのかし給へと、懇ひきこえ侍り。また母なる人もせちにむかへまほしう申侍りぬ。よろづの事はこなたにて、事取りまかなひ侍るべければ、同じくはとく〳〵ゐておはせ給ひねかし。試みの業もほど近ければいかで〳〵、まちきこえ侍るになん。かしこ。

評、簡潔によく描きいでたり。「よろづのこと取まかなふ」などあつき心ばへには、誰かは感泣せざるべき。

人

伊勢國宇治中之切町　河原芳子

花笑ひ鳥謳ふ今日此頃の長閑さは、いづこも同じ大御代の恵みとこそおぼえ候へ。殘んの寒さにも恙なう渡らせられしと承るほど、いとも〳〵嬉しうて、霞ならぬ心も浮立ちてなん。さても、お尋ね遊ばされ候私立女學校は、今や益々進歩の域に

近づき侍り。生徒の如きも漸次增加して、既に二百名に達したりときこえ候。學科は技藝科に重きを置かるゝ樣の傾向に見受られ候ひしかど、一度改革を施され候てより、總ての點に於いて餘り偏頗なる傾向はなき樣に思はれ、寄宿寮其他の器械器具もいたく完備し來り候へば、先は田舍の學校としてははづかしからぬ樣相成候、されば御入學のよすがにも相成候はんとて、規則書一部御目にかけ候程、御心に協ひて御入學遊ばされ候はんには、日比の御親みもまた一しほあらんと樂しき空想を描き出しはべるもいかゞあらんとて、夕月の窓に遠きみ空を思ひやりつゝ、雁金のかへりごときこえ上ぐるになんあなかしこ。

評、別にとりいでゝいふべき節なけれど文よくとゝのひて、少しも斧鑿のあとなし。

（以下原稿到着順）

伊豫　岩田春子

門田の雪のむらきえて、四方の影色も長閑に覺え候處、御前樣には、御けしき美しう渡らせ候由、何より御目出度存じまゐらせ候次に私事もいと健かに、日々學び屋に通ひ居り候まゝ、憚ながら御安心下され度候、扨とや先日は、何かと御心切なる御文給はり、早速御返事差上ぐべきのところ丁度試驗前の事とて、復習にいそがはしく候爲筆とるひまもなく、かつは色々他事に取まぎれ遂々今日まで御無音致し候罪、何卒御許し下され度候、御申越しに相成り候學校の樣子は、各別替りし事も之無く候へども、御前樣の御在學中に比しては、茶の湯、いけ花等は中々盛んに相成り、茶の師などは京都あたりより其道の達人參らせ、裁縫なども漸々發達致し、只今にては、洋服、シャツの類まで教授致す樣相成り候事とて、誠に便利を覺え候、生徒の風俗は以前と事かはり此節は、賤がふせ屋の少女までも袴をはきて通ふ事と相成り、中々活潑らしく相見え候へども八年老いたる昔の人は、皆色々と笑ひそしろ事も少なからず候を見ても、元にかわらぬ田舍の住居、御察し下され度候、御前樣には都の御すまゐとて、折にふれ事にあたらせ給ひて、さぞ珍らしき事のみ學ばせ給ふ事ならんと、いとゞ御うらやましう存じまゐらせ候、猶私方よりも、御伺ひ申度き事も數々御座候へども、いづれひまになり次第萬聞え上ぐべく候まゝ、先はこれにて筆を止めまゐらせ候。かしこ

東京　篠田泉子

追々のどけき春の好時節となり侍りぬる折柄、その御館にては、御方々樣、いよゝ御すがすがしう渡らせ給ふとの御事、ほぎあげ奉り候。次に爰元にても、みなみなすこやかに暮し居侍れば、憚ながら御心易う思召し給ひてよ。扨とや、御文に依れば、御令孃花子の君には、もはや七歳ともならせられ、當春より學びの庭に下りたゝせ、をしへ草のかずかずつみそめ給ふよし、實に幼子の成人いたすは易きものにて、其の割合に大人は年をとらぬものと、今更の如く感心致し侍りぬ。就いては、御道順もよろしきよしにて、愚女きみのまゐる學びやの樣子を聞かせよとのおほせ、委

細きこゑあげまほしきは山々なれど、何分私は昔者にて、當時の事には殊に不案内なれば、談話會などの折にもあまり參會いたさぬ故、よくは、わきがたけれど、唯きみの樣子をみて察するに、規則も正しく、至つて懇切に敎授致すらむとこそ存じ侍れ。生徒は五六百人程これあり、多くは中流以上の子女のみにて、萬事高尙を旨と致し居る樣子なれば花子樣などには、最も適當ならむかとぞんじ候。尙一兩日うちに、規則書を御送り申あぐべく候。まづはみぎ御答へまで。あら／＼かしこ。

肥後　德永廣子

冬のなごりのさむさいとはげしく侍るを、御障りもなく勤めさせたまへるよし、何よりの御事に候。先日よりの御玉章のおもむき承りながら、今日まで御無音のかとゆるさせたまひてよ。妾、日頃學校に侍りて、我庭の訓のみ心によろこびぬれども、開けつる明治の御代に、樣々の學校の人々にもかたりあひなどし侍れど、女子は一家をよくとゝのへ、道を守るこそ。日本婦人の要用としてあれば、學校の敎も、其種子となればにや。ひたすらに讀みかき、いろ／＼の手業は、いかに進みぬればとて、おろかなる妾の考には、のぞましからず。我習ふ師の君は、ふかく注意せさせたまひて、朝夕には、食事、炊事の用意、裁縫などなさしめたまひて、いとねんごろに侍れば、女子の身を治るにはよき敎ならんと思ふまゝに申上參るになむ、御意にかなはせたまはゞ、進ませたまひてよあなかしこ。

熊本　田代治子

日頃音信申さんと思ひ侍り候折柄、御問合に預り、仰せの趣き篤と承知いたし侍り、承れば、御子妹樣には、早今年は高等小學御卒業の由、誠に年月の過るは夢の樣になんありける、扨又御當人にも、當地高等女學校へ御希望遊ばさるゝ樣子、こゝなき思召に御座候。就いては、妾も御手紙拜し終り悦び勇みて、直樣女學校に參り、當校長の君へ面會いたし、直接に御樣子承り侍りしに、一體の事は、別紙規則書の通りとて給りたれば、此まゝ封入差上候間、御一覽の上御承知給り度、且又本校の目的は、質素を旨とし良妻賢母を養成する本意なるよしなりしが、學科高尙なれば、又先に進み給ふとも、其際や見ねん、重ねて又二三の友人に御尋ね見るに、女學校も多き中にも、本校こそ世に適當の敎育なりとや申され侍れ、且又寄宿舍等も規則正しく、外に下宿遊ばさるゝとも、校長より親切に御世話あらせらるゝ樣子にて、其邊には聊か御掛念あらせられまじく、御卒業の上は、とく／＼御出の程を待ち侍るになむあながしこ。

東京　山本靜子

きのふけふ寒もやう／＼にうすらぎ、何となう閑窓に見ね渡り候折から、御恙もなき御書の葉を戴きなにより嬉しく拜したてまつり候。御妹子樣には、女學校へ御入學遊され度由承り、數ならぬ身を人事と御思召され、學校の御樣子御尋にあずかり、有難く、就いては何々女學校規則も正しく敎師の敎もゆき屆き、生徒も品行方正にて、萬事敎授致す由又御宅の近きあたりよりも御通ひ遊さるゝ方々も有之、御思召も御座候はゞ如何に候か右御返事申上候。猶こまかき事は、參上京の上にと書きのこしまゐらせ候。

あなかしこ。

肥後　佐々有鄰子

ひさしくうちたね侍りしに、鶯のこゑうるはしく玉章もておとづれたまひしを、とる手おそしと拜讀侍りしに、今般の試驗に全科卒業したまひしよしにて、妾がかよへる女子高等學校に御入校の御心組のよしにて、學校の樣子御問合に相成候により、妾が見聞のまゝを御答へに及び申候。さて先生の敎鞭をとらるゝさまは、

いと厳に篤く、校中の女生徒の人々は、心がけよろしく校則を守り居り申候。近日御閑暇に候はゞ、御面談に可申上候。かしこ。

相模　鍋島春子

彌生の月も、はやなかば打すぎ、一雨ごとに、木々の梢のいろづくさまもをもしろく、老もわかきも、をしなべて待ちこがれにし櫻花、はやきは既に咲き初め、何となうのどかに、うき立つ心地致し候。秋子様には、いよ〳〵此月をこねて御入校あそばさるゝ由、まことに御目出度事になむ。さて、御問合せの事ども、一々承知つかまつり候。丁度私通學なしたるころの規則書御座候間、とりあへず御目にかけ参らせ候。尤もふるき物ゆゑ、たがひしふしも多かるべく存ぜられ候まゝ、御入學のせつ、受付の人より御求めあそばされ度候。書類は、學校前の、書店に入らせられ、何年級の書物と仰せらるれば、先方にてよく心得申べく候。尚近日、御よろこびかた〳〵参上致し、くはしき御話し仕るべく存候。目出度かしこ。

東京　林常子

久々の御文うれしう拜しまゐらす。さて御許様には、こん春御國元にて、學びの業卒へ給ひたる上は、なほ深く文の林分け入らんとの御志にて、あづまの都なにがしの塾に入り給はんとおぼし立ち給へる御心の程、一しほ感に打たれ侍り。おのれあづまに上りてより、未だ心ゆるせる友さへねもたず、あけくれ西の方故郷のそらをながめ、御許様と螢あつめし昔を思ひ出し、あくがれゐ侍るなりから、このたびよりは、又もや御許様と窓を共にし、學びの道辿らるれば、いかばかりうれしからましと、今より指折り數へてたのしく待ちはべり。御尋ねのなにがしの塾の規則は、別册の通りに侍り。この塾にての學びの業は、むねと英吉利の語を授くるにて、なほその塾の内にては、家ゐのありさまにて、塾の長も教への聖もてしたちと共に住ひして、朝な夕なたらちねのその子にたちゐを教ゆるかことなるに加へて、廣く國の中のみか、とつ國の家ゐのさまさへ教へもして、すこやかなる操正しきおみなと教へ導くもくろみに侍り、そが中にも長なるなにがしの刀自は、幼きより亞米利加に渡りて、彼の國の話深く習ひ修め給へるから、世の同じ學びの舍にたくへては、何事も進みに進み、先つ年業を卒へたるてしたちは、いと世にもてはやされゐ侍れば、これのみにてもその他の事推し給はるべくなむ、あなかしこ

東京　柴村文子

月の夕雪の朝學びの窓の明暮に、彼の君は如何にすごさせ給ふらんなど何につけても君をしぞ思ひ止る事なきに、まして、此兩三日春雨になほも思ひぞ増る折からに、御消息給はりしうれしさは云ふもなか〳〵にて候ひき。さて君には、再びまなびやにとおぼし出る御心なりとや、さりとは、うれしさかぎりのいゝも知らず、問給はりし如く、學びやの、有様一としてかはらさる事なく、先彼いぢわるき花園の君には、こぞ春、御縁組ありしとかにて御退學なされ、又、木村先生には、御母君御病氣の爲め、御歸國あそばされ、其後、高等師範學校講師雪野清の君となん侍る、いともかしく御やさしき師の君御出席被遊、いとも御れんごろの御教授に、姿もこよなき師の君とあがめ参るになんされば、君にも、此めぐみあまねき師の君の高きみかげを仰ぎつゝふる年の如くに、あしたには花の下に打かたらひ、夕には、月の光に文をぞよみかわする事のたのもしくてなん。あわれ、一ト日をおしみ給ひて、御歸國召されよかし。別紙は、こたび、あらたまりぬる校則になん侍ればくわしき事は、これにて御らんぜらるゝ様ふしてねぎ奉になん、あなかしこ。

東京　椎野秀子

愛よりは久しう承らぬに、ふりはへてとはせ給へつるこそいとなんうれしけれ、御あたりかぞいろの君、こぞりて、ことなうたひらかにおはし給ふとか、よそならず悦しうてなん。春の日よりの今日この頃、岡邊の下もゐ御袖にあまるほどつみそめ給へりや、谷の戸の初音いつのころよりか御朝の枕を驚かしたるにやと、いとなんゆかしき。かゝるしづけき山里に住ひ給ふ御身はさだめしみやび心の浮立ちて、和歌にのみ御心をよせ給ふらんと、思ひや侍りる。妾の如きは都の塵に交はり、世の事わざにひまなければ、心ならずも怠りがちなるいと口惜しうこそ。さて君のあたりへだてなき某の君の、此地某高等女學校へ御入學の御志侍るとか。學校の様子問はせ給へるにより、妾もいかでか悉しき事さぐりゐてと、心かけ侍りぬればかれてしるべのものゝ、幸ひかの學校へ通ふものより悉しくきゝつるに、規則といひ程度といひ申分もなく、殊更教師の懇切、生徒の風儀、此地にてもわけて評判よく、位置さへ宜しければ、なにかにつけてたよりよからんと思ひ侍り。規則書一部御手許までおくり侍れば、御志もおはさば、彼學校をこそと御すゝめまつるになん。とく返り事きこゆべかりしを、なにかとそゝのかしくる人々の侍れば、こなたにのみかゝづらひて、おもはずもおこたりぬる罪、さるかたにゆるし給ひつるうれしさ、先はおゝせごとにそむかじとハかくなん。かしこ。



懸賞和文

海外に行く友を送る文

天

長崎市西山七十一番地 日高かず子

こたび春の君とならばして、上海にいわたらせ給はん日の定かならぬ間は、別れまつらんとしも思ひなさゞりしを、親しく見えまつらん事も今日明日ばかりとなむきこえ侍れば、今更に悲しう盡きぬ名殘ぞ惜まれ侍る。隣の國にて海路さへいと安く聞きはべれど、異國としいへば千里も隔つらん心地し侍り。復いつの日にかうれしく面對すらんと思ひつゞけてかなしく、されど春君のこたびの行はほまれある任をかゞぶらせ給ふなれば、君にも限なう目出度かしまたちなるを、己の別のみ惜しみかなしと思ふ事やはある、いざ手向の眞柴總をもち、とり〳〵に祝ひごとして送りまつり、御船恙なういたりつかせ給はん事を祈るになむ。

ひたすら御身を健かにいたはらせ給ひて、やがて敷島のうるはしき花の匂を彼國人に傳へたまはん事をこそ。こゝに殘りおはしますたらちねの君にはをり〳〵音なひまつりてものし侍れば、かまへて御心になかけ給ひそ、天の原ふりさけて見給はん月影に御國の秋を忍せ給ひねかしあなかしこ、

評、別れを惜しむの情深く、而も雄々敷心のふし見ゆていとめでたし。天の原の一段、龍を描きて睛を點するの手段か。

地

大阪市西區新町通三丁目一五九番邸　日下德子

かねて公の命せごとうけ玉へる御夫の君に從ひ玉ひて、遠からず外つ國に出立ち玉はんとはきゝしかど、未だ程も在すらんと思居り侍りしに、きのふ御文にて、あすなんとの玉ひおこせ玉ひしかば、思ひがけぬやうにて、あまりあわたゞしき心地し侍り、をしき別れはいはんもながくなれば、さる方に推量り玉へ。船路は更なり、彼處へ渡り玉ひては、氣候も異に侍るめれば、よろづに心し玉へかし。忌々しけれど、他鄕にありて病むほど悲しきはなしときゝ侍れば、御兩君とも何よりも先御身大切にし玉へ、彼國には聞くにもまして珍らかなる事とも多く侍らん。又人の行ひ心ざまもさまぐ〵なるべけれど、なれてはあしき所も見えずなりゆくめれば、ゆめ彼女尊とかいふ風にな染み玉ひそ。常日比の御心がけをいよゝみがきそへ玉ひて、やまとをみなの美を保ち玉へ。これらはいはでものことなれど、へだてなきまゝにつゝましさも打忘れてなむ。なめげなるつみはゆるし玉へ。いよゝ歸り玉はん日を今よりいつと知られねば、御なつかしさもそひ侍るに、いかで參りて御別れ惜しみてしがなと思ひ侍れど、しらせ玉ふ如く留守の身にしあれば、思ふに任せず、いと〳〵口惜しくはたなめげなれど、よろづみ許し玉へかし。末ながち御夫の君によきに傳へ玉へ。返すぐ〵も御恙なく路のほども平らかにと祈り侍る。遠く隔てゝは文の往來も心に任せねど、猶折々のとふらひは怠り侍らじ。君も彼地につき玉はゞ、やがて

消息玉はせてよ。申上げたきこと數々つきせねど、くだ〳〵しければこれにて筆とめ侍り。かしこ。

評、やまとなみなの美を保ち玉への一句は、外國に行く人々の肝に銘し、心に鏤り置くべき金言とこそ覺ゆれ。

人の甲

神田區美土代町三丁目一番地　田中さた子

宿世いかなる契りかありけむ、君と我とはふりわけ髪のそのかみよりはらからにもまさりてしたしみ深く、かたみに年たけゆくまゝに、春の花秋の月ともに手たづさはりて見愛はやし、くれ竹のよのうきふしうれしきふしもへだてなくかたらひかはし、行末かけてたのみてしを、こたび春の君にともなはれたまひて、米國（あめりか）へおもむかせたまふこと、去年の秋よりうけたまはらぬにはあらねど、今さらにわかれまつらむことのわびしくて、むねふたがるこゝちす。されどはた思ひかへせば女の身にして、異國にゆきわたらひ、かの國の學びの道はいふもさらなり、萬にひろく見聞したまはむこと、よろこばしき極なりかし。三年といへばながきものから、年波によどみなければ、錦かざりてやがて立かへり來まさむ日ををよびをりつつ待まつるになむ。

君か船はてむ日までは我さへに
　心に浪のたゝぬ間もなし

色も香もまた世にしらぬこと國の
　花をりかさしつとにしめさね

評、文の体すら〳〵として雲行き水流るゝ如し。別離をかなしむの情と遠遊をよろこぶの情とを短き文にかきあらはせる。其才の長きを見るべし。

人の乙

上總　高石登代子

外國の交り開けてよりこなた、我國の物事、やう〳〵、かの國の風に習ひ、學びの林にも、彼の國の文の花を植ゑそへて、ます〳〵文明のさかひにすゝみゆく今のみ代こそ、いとも目出度きわみなれ。されば、物學びの人々も、かの國に渡りて、いそしみはげみ、道の奥がをきはめて、はま

れある名を、世界にあぐる世とはなりぬ。偖、君には、つとに學の道に御心よせられ、先つ頃女子大學を御卒業あそばされ、この度は英國に渡り、專ら彼の國語の學をみがかせ給ふとかや。國のみためにつくさせ給ふ御心の程、たのもしともをゝしとも、たゝへ申さん詞もはべらず。さりながら、其境にいりたらんには、何事もさる方に移りゆく可きは、人自ら有がちある事なれど、元より彼の國と我國とは、衣食住はさらにもいはず、すべての風俗等も、いたく打變れるからに、彼の長をとりわが短を補ふの心は、束の間も、御むねよりはなさせ給はぬ事こそねがはしけれ。なほ彼の地とこの地とは、氣候など異なるべければ、かねて、養生の方にも心入れさせ給ひ、他日にしきをきて、歸朝せさせ給はん事を、指をりかぞへてまちまゐらするになん。なめげながら、したしきなかのもだしがたく、御門出に先立ちて、ひとこときこえあぐるになん。かしこ。

評、異國に學ぶ者、彼の文華に目くるめきて、長短の見境を忘るゝ多者し。此文能く人に告ぐるの要を得たり。

雜報

雲のうへ

●聖旨　第五聯隊凍死事件に付き青森の官民が、大に盡力しつゝある事を畏き邊にても奇特に思召され、現に同縣知事山之內一次氏が過日出京したる折、特に酒肴料金五十圓を恩賜あらせられたりと承りぬ。

●皇后陛下御手判の花瓶　昨年九月、日本全國窯業品第一回共進會を、上野公園櫻ケ岡なる日

本美術協會陳列館に開會せる砌、皇后陛下、皇太子殿下は同じき二十七日同會へ行啓あらせられ、隈なく陳列品を御覽ありて、暫時御休憩の折、同會にては御慰みに陶磁製作の實技を上覽に供へ奉らんとて、帝室技藝員宮川香山翁は、やがて御前に於いて得意の樂燒を拈りつ。友玉園主加藤友太郎氏は、轆轤をもて同じく其座に花瓶一個を製作し奉りしに、時の審査總長金子堅太郎男は、加藤氏の製品を採りて、謹みて御前に近く進めまゐらせたるに、陛下には篤と御熟覽あらせられ、輕やかに御手を觸させられて、御感斜めならず。香山翁もとも〴〵大方ならず面目を施しつゝ御前を罷りき。さる程に彼の花瓶には、陛下御判手の痕歷々と殘りて、少しく窪みを生じたるを、やがてそが儘に燒上げ、紀念の作品として永く家寶に傳へんには、身の榮譽此上なかるべしとの金子男の言葉に、加藤氏面目身に餘り神を注ぎて、釉藥の撰び形摸樣の如何に付きて種々考案を凝しつつ、いかで並びなき逸品を世に止めんと、苦心の末其全體を淡き藤紫にあげ瓶口は得意の紅色を用ゐて山櫻をぼかし、陛下御判手の痕は白くぬく事にして、其製作に從事すること久しかりしが、此程やう〳〵燒成たれば、更に桐の二重箱を造らせて之に收め、是非に今一度上覽に供へ奉りて、永く傳家の寶物となさん心組ありと。

●●●●

●村雲尼公　近頃神戸市駒ヶ林八尾別莊に御滯在中なる村雲尼猊下が、御保養の爲め、去月二十七日大手村梅林清友園を御緩歩の折柄、同市西野尋常小學校四年生數十名は、校長高橋某に引率せられて、同園に立寄りたれば、警官は之を制して今乃猊下御徜徉中なれば遠慮すべしと諭し、校長も其心して一隅に佇ませたるを遙に御覽じさせら

れて、妾一人の関係にもあらざれば、生徒等にも入園して遊興せしむべしと傳へ給ひ、大勢の生徒と共に梅樹の下に撮影あらせられ、可憐の小兒に物取らせよとの仰せありて、御付の人々命を奉し、蜜柑數百顆を生徒に頒ちたれば、一同おほけなき御惠に浴して、小兒ながらも感涙に咽びたりといふ。

●王子御降誕●●●●● 久邇宮妃俔子殿下には、本月十日午後十一時三十分王子御分娩あらせられ、母子とも御健勝に渡らせらるゝ由。

●美術の奬勵●●●● 宮内省にては、從來御調度品御用の節は、御用商人へ下命し、其手より更に技術家へ依囑製作する手續なりしが、向後美術及美術工藝御奬勵の御主旨より、直に製作家へ御下命相成る由にて、既に去月も、迪宮殿下御用御茶碗に付、某會社外二名へ見本差出すべき旨御下命ありたりと承りぬ。

●神宮の木本祭と木口祭●●●●●●●● 神宮御造營費議會を通過したるに付き、愈よ來年度に入ると同時に、御造營に着手あるべき豫定にて、御用材は總て木曾山より採伐せらるゝ筈なれば、四月下旬頃木本祭を神宮に於いて執行せられ、櫻井神社局長、牧野造神宮主事も參列する事となるべき趣きなるが、木口祭も來五六月の交、木曾山林に於いて執行さるべき運となるべければ、是れ又、同局長主事の出張あるべしと。

●菅公一千年祭●●●● 筑前國太宰府天滿天神社工事落成に付、來三月二十五日より四月二十五日迄、菅公一千年祭を執行する由なるが、其祭典日割次第及び餘興は左の如し、

▲大祭三月二十五日午前八時係員、御神像奉納式、文書館開館、會長代理肝付監督以下參列▲大祭四月一日午前八時係員、會長式辭、諸報告式、黒田會長、辻、肝付兩監督各評議員名譽會員

役員等參列▲大祭四月二十五日午前八時倭舞、會長代理小野寺事務長以下參列▲餘興は祭典期の間連歌會、能樂、神樂、和歌披講、獻茶式博多能樂、熊本和樂會、活花會其他諸種の奉納餘興

尚前記大祭三日には、鷽替式を行ひ、黒田侯初め、同國出身の貴顯文武官より、金銀製の鷽數十羽を送付し交換せしむる事あれば、非常の盛況を呈すべく、沿道の各鐵道及汽船は、參拜者の爲に割引をなす由。

梅のかほり

●高等女學校教授細目調査委員會　文部省に於いては、現在の高等女學校教授要目は、文運の進歩に伴はず、地方に依ては其教課目區々に渉り、頗る不備不完の點多く、甲地の高等女學校卒業生と乙地の卒業生とは、其學力に懸隔あるのみならず、外國語の如きは課するもあり、課せざるもあり、其不統一甚しきが故、該調査委員會を組織して、其教授要目を改正し、適切なる要目を編製することに決し、取調委員に後藤高等師範學校教授以下、女子高等師範學校教授、高等商業學校教授、同師範學校教授等二十名を任命し、又三宅醫學博士にも取調を囑托せりといふ。

●女子事務員採用の成績　東京郵便電信局にては、曩に女子事務員を採用したるが、其の成績概して良好にして、第一缺勤少き事、第二は小心翼々として事務に從ひ、爲替記帳も一日に三百五十枚を扱ふ者ある程にして、男子の如く怠慢に流るゝ者なき事、且つ又給料は、一日金二十錢より二十八錢までにして、男子の給料に比すれば少き等種々の利益あり。されど唯困難を感ずるは、女子は自己の事務以外には、決して他の事務の手傳を爲さゞる等、餘りに控え目に過ぐるの一事あるが、過失を生せん事を恐るゝの結果に外ならざるべしと。尚同局にて、始めて女子事務員を採用せしは昨年

十一月中にして、目下總員三十一名ありといふ。

●女子高等師範學校の私費學生募集　同校にては、今回私費、地理歷史專修科生徒四十名、及び家事專修科生二十四名を募集すと云ふ。地理歷史專修科は、一昨年九月第一回生徒を入學せしめ、本年三月卒業の由にて、不日何れも地方師範學校女子部、若くは高等女學校の教員として、夫々赴任するよし。當科は今回新に外國語の一科を加へ、修業年限を改めて二個年とし、益々該科教員たるの學識を收得する事を多からしめ、家事專修科は三十二年七月第一期卒業生を出し、何れも地方中等教育に從事して好成績ありしが、今回又二十四名を募集すと。入學志願者は、兩科共に品行方正身體健全にして、修業年限四ヶ年の官公立高等女學校卒業生、若くは之と同等の學力を有し、年齡十七年以上三十年未滿にして、夫を有せざるものにかぎり、本月三十一日迄に願書を差出せば、四月上旬試驗の上入學を許可せらるべしとぞ。



●女生徒の服裝及携帶品心得　此度高田高等女學校にては服裝其他に付き嘗て生徒心得書中に記せるものを更に精密になして、之を其父兄に贈りたるよしあるが大に參考に資すべきふし多きを以て左に掲ぐ。

一服裝及携帶品は左の諸項によるべし

一着物及羽織　木綿（絲入縞を除く）

一袴　用ゐざるもよし用ゐる時はゑび色木綿の無地

一帶　唐縮緬、毛襦子

一半襟、帶上げ、襦袢の袖　本綿又は華美ならざる唐縮緬

一髮かけ　紙製

一かんざし　用ひざるを可とす若し用ゆる時は華美にして脆弱なる者を禁ず

一束髮びん　飾なきもの

一櫛　華美にして實用ならざる者を禁ず

一りぼん　禁ず

一指環　禁ず

一化粧　禁ず

一髮結ひ方　束髮銀杏がへし、桃われ

一上草履　竹皮若くは木綿緒の麻裏

一履物　たゝみなしの下駄、足駄（つまがけを用ゐるときは質素なるもの）

一蝙蝠傘　絹張を禁ず

一雨傘　白又はふち蛇の目

一合羽　木綿

一頭巾　木綿又は唐縮緬の無地

一肩掛　禁ず

一風呂敷　木綿

一物入袋　木綿毛糸編（華美ならざるもの）

一衣服は質素を主とし華美なるものを避け衞生に宜しく强靭にして運動に堪へ多少風雨に遇ふも惜氣なき材料を選擇し體育の發達を奬勵するを要す

一縞柄摸樣色合等は年齢に相應すべきは勿論なりと雖もはでやかならざるものを撰ぶべし

一前項に掲げざる羽織の紐、手袋の如き總て諸項に準じ質素なるものを撰ぶべし

●●●●●

●監綬褒章授與　秋田縣羽後國雄勝郡元仙道村村長藤原宇之吉氏は、多年公共事業に盡力せし廉を以て、去月二十六日、賞勳局より内務省を經

十一月中にして、目下總員三十一名ありといふ。

●女子高等師範學校の私費學生募集●●●●●●●●●●●●●●　同校にては、今回私費、地理歴史專修科生徒四十名、及び家事專修科生二十四名を募集すと云ふ。地理歴史專修科は、一昨年九月第一回生徒を入學せしめ、本年三月卒業の由にて、不日何れも地方師範學校女子部、若くは高等女學校の教員として、夫々赴任するよし。當科は今回新に外國語の一科を加へ、修業年限を改めて二箇年とし、益々該科教員たるの學識を收得する事を多からしめ、家事專修科は三十二年七月第一期卒業生を出し、何れも地方中等教育に從事して好成績ありしが、今回又二十四名を募集すと。入學志願者は、兩科共に品行方正身體健全にして、修業年限四ヶ年の官公立高等女學校卒業生、若くは之と同等の學力を有し、年齢十七年以上三十年未滿にして、夫を有せざるものにかぎり、本月三十一日迄に願書を差出せば、四月上旬試驗の上入學を許可せらるべしとぞ。



●女生徒の服裝及携帶品心得●●●●●●●●●●●　此度高田高等女學校にては服裝其他に付き嘗て生徒心得書中に記せるものを更に精密になして、之を其父兄に贈りたるよしあるが大に參考に資すべきふし多きを以て左に揭ぐ。

一服裝及携帶品は左の諸項によるべし

一着物及羽織　木綿（絲入縞を除く）
一袴　用ゐざるもよし用ゐる時は忍び色木綿の無地
一帶　唐縮緬、毛繻子
一半襟、帶上げ、襦袢の袖　本綿又は華美ならざる唐縮緬
一髪かけ　紙製
一かんざし　用ひざるを可とす若し用ゆる時は華美にして脆弱なる者を禁ず
一束髪びん　飾なきもの
一櫛　華美にして實用ならざる者を禁ず
一りぼん　禁ず
一指環　禁ず
一化粧　禁ず
一髪結ひ方　束髪銀杏がへし、桃われ
一上草履　竹皮若くは木綿緒の麻裏
一履物　たゝみなしの下駄、足駄（つまかけを用ゐるときは質素なるもの）
一蝙蝠傘　絹張を禁ず
一雨傘　白又はふち蛇の目

一合羽　木綿
一頭巾　木綿又は唐縮緬の無地
一肩掛　禁ず
一風呂敷　木綿
一物入袋　木綿毛糸編（華美ならざるもの）
一衣服は質素を主とし華美なるものを避け衞生に宜しく強靭にして運動に堪へ多少風雨に遇ふも惜氣なき材料を選擇し體育の發達を奬勵するを要す
一縞柄摸様色合等は年齢に相應ずべきは勿論なりと雖もはでやかならざるものを撰ぶべし
一前項に掲げざる羽織の紐、手袋の如き總て諸項に準じ質素なるものを撰ぶべし

●●●●●

●藍綬褒章授與　秋田縣羽後國雄勝郡元仙道村村長藤原宇之吉氏は、多年公共事業に盡力せし廉を以て、去月二十六日、賞勲局より内務省を經

出して、藍綬褒章を授與せられたりとぞ。

●寳玉を握つて生る●●●●●● 八犬傳のそれにも似て、今の世にあるまじき事なれど、理外の理といふ事もある由なれば、諸媛強ち虚説とのみ斥け賜ふべきにあらず。大分縣西國東郡臼野村字濱山田淺太郎は、今より三年前、親戚なる藤江といふ者と夫婦中いと睦じう暮せるが、生來虚弱の上に肺病に罹り、藥石効無く去年の末つ方遂に歸らぬ旅に赴きたり後に藤江は悲しさ身のおき處無くどうかどうが其日を過し居たるが、然る處かねてより夫の胤を身に宿し、近頃安々と男の兒を産落せしが、その兒は如何せしものぞ兩掌を開かず、剩へ右手には三寸許の紐さへ纏ひ着けてあれば、人々不審し漸く手を開かせ見しに、こは如何に兩方に一個づゝ水晶の如き美しき玉を握り居たりといふ。

●羽二重の産地●●●●● 本邦に於ける羽二重の産地と云へば、第一に福井を推し、桐生、足利、川俣之に次ぐものとして知られしが、近來二羽重は、益す好況に向ひ、機業家は他の織物に比して利益多きを以て、爭ふて之に業を轉ずるの傾向を來たし、伊豫、土佐、伯耆、因幡、陸中、羽前の諸國に於ける機業家に依り、織出されて福井の練屋を經、同地産として横濱に輸送さるゝもの、年々增加する有樣と爲れり左れば將來羽二重の産額は益す增加すべしといふ。

●流行の花見小袖●●●●● まづ令孃向きの衣裝としては、其色合は藤色、淡紫根、菫花色、淡牡丹色、熨斗目色等みな當時の流行色と云ふを得べし。また裾模樣としては、曙染、地落染、淡落し、何れを撰ぶも其人の好みとすべけれども曙染と云へば總て派手向きにて、其他はそれより地味なり模樣の附け方には、高裾模樣、裾模樣、江戸褄

模様、江戸褄吹模様、吹模様等なれども、高裾模様、或は裾模様などや適すべからむ、又模様の種類は數限りあるめれども、其時々の花卉草木を宜しとす、春の錦の柳に櫻、唐紅ゐの吉田立田影日向の栞の花に蝶の二つ三つ流に卯の花或は褄の上部に杜鵑を飛ばせ、下に卯の花或は杜鵑花を染め出すあどはいとめでたし。年増向きには、栗皮色藍鐵色、鐵納戸色、濃葡萄色にて、多くは薄模様又は江戸褄模様なれど、ずつと年増には吹模様あども少からず。されど吹模様とても八掛の處には、少くも五六寸の模様は置かざるべからず、又小紋の裾模様を染め出したるも、中々の流行ぞかし。是は小紋の中へ模様を置くものゆゑ、模様はなるべく、明瞭あるものを撰ぶべし。例せば大波に千鳥とか、松に鶴とか、さては光琳風の梅或は槌車に葦の葉等可なるべし。此等の模様者は、二枚重にして、同色付模様とするか、又は同模様にて下着には上着より薄き色合を撰ぶか、何にしても胴貫仕立等には、板〆絹或は絞り絹として仕立上り、代價は六十圓より四十圓位迄なりといふ。次に縞柄は、十六七歳の令孃向にて、一寸した晴れ着には、紫根地鼠とよごし糸の大模様なる松竹梅に、源氏雲を大きく織出したる紋織御召、又は紺地白茶の竹の瀧紫根と薄藤或は鼠の茶色にて、清少納言の香爐峰の雪模様栗皮茶地と鼠と白の大波に枝櫻を織出したるものなど、時節から適當の着附ならむ。此下着には同模様を用ゐんか、さるは適


二

過ぎるゆゑ、模様の成るべく少さき縮緬の友禪染はた更紗縮緬の大柄を撰びなば恰好のものなりと、裾廻しは縮緬の絞り色にて、即ち櫻鼠、薄葡萄色牡丹色、薄樺皮茶などにて、胴貫仕立胴には、絞り絹或は紅の紋羽二重として以上の代價は仕立上にて六十圓より五十五圓位なりとぞさて縞柄物にて二十五歳前後の婦人向には、風通御召として、黑地薄白茶の三分位のはつきりしたる格子縞、又は黑地薄よごし糸の巾通に、大小霰藍鐵地に薄鼠の横段の子持縞などいとよかるべく、其下着には同じ柄合の重とするか、或は更紗羽二重あるべく裾廻しは縮緬梅鼠とか、栗皮茶とか、白鼠とか、褐色などなるべし、之を胴貫仕立とし、其胴は絞り羽二重、絞り絹、板〆絹にて此仕立上の代價は、三十八圓より四十八圓位の由、長襦袢は何れも友禪縮緬、或は更紗縮緬なるべし、友禪縮緬には、色合模様、種々あるべけれど其一端をかゝげなば紫根の暈し雲に三日月を出し、櫻の花を散らせ、其間に雪をあしらひたる雪月花模様、日英同盟の友禪模様等にて、この仕立上代價は、十七圓より十五圓位なりと。地味向の婦人用としては、鶉御召にて紺地、黑地、革色地、萬筋、千筋、巾通、名代縞等にて、下着を縞御召の格子縞、角通或は縞小紋などふさはしからむ。是れも、胴貫仕立にて、胴は板〆絹、裾は絹の中花色として、仕立上代價三十四圓より三十五圓迄。又妙齡向の丸帶には、繻珍織御納戶地色糸入柳櫻に宇治橋の大模様、紫根地櫻に誰が袖模様金糸入にて此仕立上代價四十圓より五十圓位繻珍織銹茶地色糸入の竹に桐の金通し、仕立上價七十圓位。廿五歲前後の婦人向丸帶には、是れも繻珍にて銹葡萄地影の日向の疋田入飛び模様又は厚

板織茶地焦茶と栗皮茶胭脂入の段織の土耳格模樣こそこよなき見榮えあるべし、此仕立上代價廿三四圓位又鹽瀬の友禪染の丸帶は、中々清粹優美のものにて、其模樣には、紫根地の白上げ籐の大模樣、又は鼠地に白上と銹茶牡丹模樣あり。此仕立上代價三十圓前後。夫れより繻子織に金銀泥描き模樣は、松に霞、千羽鶴、影と日向の蝶盡しあど、仕立上價二十五圓前後また晝夜帶にては、厚板織濃き革色地に金茶の星散し、其片側には、厚板織白茶焦茶海老茶檜皮茶など數々の茶糸を以て横縞のやたら織として、此仕立上代價十七圓位。極澁好みには厚板織革色地焦茶の樂譜其片側黒繻子にて此代價は十三圓位なりといへり。

八島のほか

●夢の偶中したる例　露國のアショッフと云ふ人は、或る夜ツロタ街とソスノワ街との間なる路傍に、黄金の指環の落ちけるよと夢みてやがて、醒めにき。左れども、正しく實在せる如くに想はれて、知らず識らず其場所に至りたるに、果して指環の落ちたるを認め直ちに拾ひ取りたれ共、餘りの不思議に己れの家に歸らずして、夜の更けたるをも厭はず、妹の家に赴きたるに此處にても、一の不思議に出遇ひぬ。そは妹は其日或る晩餐會に招かれし歸途に、價の貴き金の指環を失ひたるが、其指環は、己れの拾ひたるものなりといふ。

●鑵詰食物中の黴菌　巴里醫科大學教授プルアーデー博士は鑵詰食物の調査を命ぜられて、此程其結果を報告したる所に據れば、肉類の鑵詰の七割乃至八割は、生きたる若しくは半生の黴菌を含み、鑵詰の食物中腐敗せざるもの極めて稀なりといへり。

●冬のアルプス登山者　今年眞先きにアルプス山に登りたる人は、リアンと云ふ英人にして、三

人の案内者を先導として、一月十日ツェルマットを發し、アルプス山脈中、海面を拔く事一萬四千八百五呎なる、ワイスショルン山に登り、無事に歸り來れり。冬時ワイスショルン山に登りたるは、之を以て嚆矢とすと。

●●●●●●●●

●搖籃搜索の懸賞五千圓　瑞典のオスカル王は、不思議なる歴史を有する一の搖籃を見出したるものに、五千圓の賞を與ふべしと、此程公示せられぬ。此搖籃は、今より凡そ二百年前に、獨逸の一公爵より、嫡子誕生の祝ひとして、瑞典のエレノラ女王に贈りたる純金製のものにして、此搖籃を載せて、瑞典に向ひたる船は、暴風に吹流され、トヨルン島の海岸に於て難破し乘込員は島民の爲に虐殺せられ、船の貨物は盡く奪はれたれども、搖籃のみは不思議に掠奪を免れ、今以て、島の内に隱しある山にて如何にしてか此事王の耳に入りたれば、偖こそ前記の如く公示をなすに至れるなりとぞ。

●●●●●●

●結婚の贈物廢止說　泰西諸國にては、我邦の如く、如何なる場合にも煩はしき贈物を爲す弊風なきも、古來より結婚の時には、種々の贈物を爲すならはしありて、近來は此風益す甚しくあり、身分不相應ある高價の品物を贈りて、休面を飾るに至りたれば、「堪へ難き社會に對する租稅」と稱して、此弊風を批難するもの漸く增加し、デイリイ、メイル新聞の如きは、社會を害するものなりとまで痛論し、米國及び南阿の富豪等は、此弊風を增大ならしむるものなりと攻擊せしと。往時は侯爵夫人とありたる人ゝ贈りたる品物も、極めて簡單なるものなりしと。

●●●●●●

●婦人船を操縱す　久しき以前に紐育を出帆したる汽船ヒースギーン號は、此程漸くシドニー

港に到着したるが、同船は石油一萬八千箱を搭載して出帆したるものにして、太平洋航行中火災に罹り、船員全力を盡して消防に努めたる結果、漸く消止むるとを得たるも、其際船長は船員と共に消防に盡しければ、船の進行は、全く船長の妻と娘とに依りて扱はれたりといふ。

落葉籠

投稿の規定

一、字体は楷書に限る、但し漢字の外は總て平假名にて、變体假名を用ゐるべからず。

二、文体は投稿者の隨意なれども、一行廿二字詰、十行内外の事。
但し可成は、フリガナを附けて貰ひたし。

三、誌上の匿名は差閊なけれど、便宜の所へ、必ず宿所姓名を明記すべし。

▲東京なでし子様と同じく、私も女鑑愛讀者の一人ですが、日頃から皆様方と御交際致したいと思つてをりましたが、幸ひ此落葉籠を媒として、遠近を問はず、女子の友短文寄書にもまして親しくみなさまとおん交りが願ひたうございますが、諸嬢がたおゆるし下さいますか。またなでし子様の御住が知りたうございます。(長門なゝか子投)

▲御問ひのなでし子嬢は、麹町區永田町二の廿九番地に御住ひなされましたが、事情が御座いまして、外に行かれました。本誌にかねて告別の辭をのこしてからは、少しも御寄稿なされんで、まことに殘念に思ひます。(記者)

▲私は家事の傍ら、和歌を學びたう存じますが、田舍の事故思はしき師匠もなく、困つて居ります和歌を獨習するには、何と云ふ書物が宜しうございますか、諸嬢お敎へ下さい。(岐阜縣田舍一女投)

▲私の所では我家に置く娘であるからといつて、敎育を深くなさらん親達が有ますが、私の考では

將來一家の主婦となりて、家を治め子を敎育する時に至りては、養子された方でも、他より嫁がれた方でも同樣に考へますが、私の考が間違つて居ませうか。（鎌田みち子投）

▲私は實になさけない事をきゝました。其は、東京の有名な學校の女學生が、道路で男生に、からかふそうで、是が事實なれば、いかやうにか其あく風をおなほし下されたら存じます。（東京ゆき子）

▲學校に通はれる生徒諸君は髮形や衣服杯にかまわぬがよけれど其擧動は物靜にしてもらひたい近頃途中で往々女壯士的の女學生を見かけるから一寸御注意迄に。（婆心衆）

▲孤峯庵獨峯雄先生は茶は何流ですか、御存の方は敎へて下さい。（播磨いく子投）



三

▲女子にして字がうるはしくかけないと、歌を詠んでも、たんざくにかく事ができませぬ。學校でならひましたやうなかたぐるしい字は、あまり面白くありませぬが、何人の書かれた手本を習へばよろしう御座いますか。（播磨いく子）

▲此歌が善いの惡いのと爭ふたとて、水掛論になつて際限がありません。別に美の標準が確定していませんから、各人皆思想の違ふに從つて、さまゞの斷定を下します。本誌の撰者もそれ相當の人がなさる事と思ひ、且適當の撰と信じます故、かれこれ容喙せずに、其權限にまかする方が、まことに穩當のことでありませう（伊豫まつ子投）

▲林くに子孃に御答へ申します。私もためして見ませんから保證は出來ませんが、いかに賣藥だとて、少くとも、多少は効驗があるだらうと思ひます。(東京ひめ子投)

▲南海某女といふ孃にほんに同感で、私も文が下手で困りますが、常々きゝますには、それも性質によるが、文を上手にならふとするには、澤山人の文を讀んだり、自分で書いたりして熟練すれば善いといふ事であります。(武藏芳子投)

▲眞善美のことについて、東京もと子孃に申しますが、一體これは倫理上の詞で、比較的に美が尤も高尚なる事をいふたのでありませう。この三つは何れも大切で、一概に輕重するのは、餘り無理かと存じます。それは、凡て人爲は事情が異るからであります。(神奈川某女投)

▲私は眞善美のうちで美が尤も重いと考へます。それは道德上、人間の根本であるからで、皆さんはいかゞとお思ひです。(東京上野投)

▲清子孃、高等女學校の四年級位では、學校の課目は皆お平等に修めた方が善くはありませんか。而し、修身及び家庭に直に必要な學問は、殊に御力を御入れあそばしたらいかゞでせう。(尾張みき子投)

▲この欄で地方の方語とか俚諺とかを出す樣にしたらば、さぞ面白いだらうと思ひます故、まづ私の方の俚諺を五つ六つを擧げますれば、「鰯の頭も信仰から」「六十の手習ひ」「箸と亭主は丈夫がよし」「夫婦喧嘩は犬もくわぬ」「女の口が過ぎて牛の價がさがつた」「二階から目藥」まだ非常に多く御座ます。(長門とき子投)

▲此頃女學生が、辨當を少し持つて行く事を競爭するさうですが、唯みえを張といふばかりで少し

も徒もない却つて害になります、中には家へ歸つて隱し食ひをしたり、焼芋を食ふ人もあるといふ話ですが、是こそほんに大害があります。何とか改めたいとではありませんか。(東京高橋かめ子)

▲自轉車は私はごく嫌ひで、米國あたりでも、衞生に害があると申して少なくなつたさうですが、女の乘つたのは見えぬわろく、東京の如き往來頻繁の處で乘られては溜まるもんですか。この間或女學校の御方が乘つて通りましたが、まことに……感じました。(築地なはさ子投)

▲私の同窓の友、中川ゆき子さんには東京に御出の事ですが、何と云ふ處か又何學校へ通ふて被在



「次號につゞく」

います。皆樣の中で御知り方は、落葉籠まで知らせて頂戴きたいものです。(増毛瀧女投)

▲各投書家の肖像を掲げては如何。又當地學校の模樣報知しても掲載しますか。(増毛瀧女投)

▲今は現代女子教育家の肖像を掲載して居りますから、また、時機を見て追々のせる事にしませう次に吾々は全國の女子及其學校の有樣を知らうと勉めて居る處ですから、至急投書あらんことを望みますこれは單に一人でなく諸樣全體に申上るのです。(かゝり)

新刊紹介

女子家事訓　三輪田眞佐子校閲　修文館編纂　上下二册　定價五拾錢

女子に必須なる家政上の事項を網羅し、着實簡明に説明して能く要を得たり。故に小學校女學校の教科書として適當なるのみならず、一家の主婦たる者の座右に缺くべからざる良書也。

婚禮千代かゞみ　石井泰次郎氏著　嵩山房發行　定價六拾錢

結婚は人生の重大事也。其禮式もまた嚴かならざるべからず。此書は有職故實の本源を探ね之を折衷して今日の社會狀態に適應せしめしもの、文章平易にして解し易く、挿畫多くして悟り易し、眞に婚姻の禮節を研究せむとするもの丶好參考書なり製本優美にして、禮式の寫眞版を入れたる等用意周到なりといふべし。

日本文典大綱　鈴木忠孝著　大成學館出版

旣に題目の表示するが如く、日本文法を最も簡潔に説明して、斯學を習得する人々に便宜を與へむとするに外ならじ。書を分類して音韻、言語、文章の三篇とし、説明亦舊來の面目を改めず。即ち、從來の文典を多少取捨して、異なる例證を附したるに過ぎざれど、是を參考とせ用書に供せんには、或は益するところあるべきか。

國の華　讃岐國風會發行　定價十錢

僅々五六十頁の文學誌なれども、内容はなかなか材料豊富、趣味津々として、取るべき點少なからず。由來此地方文學の盛なる、又偶然に非ざる也。

婦人問題　岡崎遠光著　經濟書店發行　定價廿五錢

興味ある婦人問題を捕て來つて是に解決を與へたる、論理明晰にして筆鋒當るべからず、文章

流暢にして斧鑿の跡なし。普く古今東西の事例を觀察して、婦女子の人格上の國家主義基礎より立論したる等極めて痛快也。

口繪について

●女子美術學校の內部　女子美術學校は、東京府本郷區弓町にありて卷首にかゝげたるは、即ち、其授業中の一般を示したる者也。本校は創立以來日尚は淺けれども、職員諸氏の熱誠なる敎授により、生徒益巧妙の域に達し、展覽會等に出品せるを見ても、實に目を驚かすばかりのものあり。從つて入學生次第に增加して、いよ〳〵盛大の氣運に向ひぬ。かく美術の發達に勉むるは、唯に一校にのみ止まらず、實に邦家のために喜ぶべき事といふべし。

女鑑歌文月次兼題

四月五日　歌　行旅厭　文　花見日記　三月廿四日〆切

四月廿日　歌　月前花　文　菫の花を友に送る文　二月九日〆切

五月五日　歌　鏡　文　暮春の感　四月廿四日〆切

五月廿日　歌　新樹　文　出產を賀する文　五月九日〆切

井上頼圀校訂　小澤政胤編著

慶長以來 國學家畧傳

洋裝全壹冊
八百五拾頁
總クロース美本
定價壹圓五拾錢
郵税十里以內七錢百里以內十二錢百里以外廿四錢

深く國學者の傳記を集めたる書は僅に微細なる古學小傳の類に過ぎず德川時代文學史の研究に不便少からざりしを著者小澤氏從來概して前後**十年間諸書を參照**し遂に本書を大成せられたり著者は尙之に滿足せずして略傳と名づけられたれど其實**今日**に於ては**最**も**完備**したる**國學者の傳記**なり載する所は慶長以來明治二十八年まての有職故實家神道家諸學者文人歌人等**五百四十名**名人の末には**其の著書目錄**をわけかつ引用書目を明示したり或は之れを**國學者人名辭書**ともいふべくまた**列傳体國學史**とも稱すべし卷初にはイロハ分**索引**ありて搜索に便じ**國學傳結系譜**ありて各學者の學統を一目に見るべく**國學者年表**ありて一見各時代の學者を數ふべし殊に斯學の老大家**井上頼圀先生**（麴町）は反哼自ら**校訂**の勞を執られたれば其正確なることと根據ある他書の比にあらず本書一たび出でゝ國文學研究者は**暗夜に電燈**を得たるの思ひあらん

師範學校**中**學校高等**女學校**其他**各種の學校**に於ては無二の**參考用書**たるべく殊に**文部省檢定受驗者**は必ず一本を座右に備へざるべからず

發賣所　東京築地　株式會社　**國光社出版部**

●會長伯爵澤宣量●學監 棚橋絢子 三輪田眞佐子

女子學藝講習會

通信教授 會員募集

入會金廿錢會費 一月十五錢六ヶ月一圓七十五錢十二ヶ月三圓三十錢

主幹 **磯部武者五郎**

●本會は輕佻の風を戒め女子の淑德を增し家政を理め家庭を齊ふべき貞節の德風を養成せんか爲めに日常必須の實用向の學科のみを選みて專門大家を講師と爲し最新の通信教授法により懇切平易に講述し僅少の學費と最短の期日とを以て修了せしむ

●**學科**及**講師**◀▶**修身**(諸大家)家庭訓話◀▶**禮法** 女禮式(國分みさ子)西洋禮式(ミセスケジー)◀▶**家事** 家政學(下田歌子)家庭衞生(藤井靜子)家計簿記(下田歌子)日用法律心得(磯部武者五郎)◀▶**割烹** 日本料理(赤堀峯吉)西洋料理(山崎武八郎)◀▶**技藝** 裁縫(井上松野子)編物(西村はや子)點茶(松浦伯爵)造花(太田富子)刺繡(長谷川岩吉加藤木の芽子)繪畫(倉石袈裟吉上村百代子)圖案(岡田秋嶺)挿花(龜井まき子)遊戲(小野泉太郎)◀▶**學事** 家庭算術(龜井まき子)女子用文(師岡すが子)作文法、和歌作法(戸川安宅)習字(囑托中)◀▶科外講義雜錄其他種々

●▲講習期は一ヶ年にて全部卒業▲證書を授く▲質問に答へ文章和歌の删添に應ず
▲講義錄每月二回づゝ發行▲一冊紙數百貳十頁以上▲講義錄第壹卷三月一日發行す

●詳細の**規則**書は郵券貳錢にて進呈す

●東京神田區三崎町三丁目一番地 **女子學藝講習會**

松岡常盤子題歌
石井泰次郎著

卷中挿畫
精巧木版
五十餘圖

美本
全一冊
正價
金六拾錢
郵稅
金六錢

婚禮の式の心得
附 媒人心得

口畫　山内侯爵家婚儀調度の圖（大判コロタイプ版）
小笠原家婚禮式の圖（寫眞銅版）

著者石井先生は禁中禮式、武家禮式、及び近世の俗用禮式に到る迄凡そ禮節の事として通曉せさるなきは天下の知る所なり近時禮法の枠に上るもの頗る夥多なりと雖も婚禮式を詳述せるものなし會々禮法書の卷尾に附しあるも悉く用ゆべからざるもの丶みなるを歎じ學說以外に貴族的にも平民的にも輕重共に實地に應用せらる丶を主眼として

（目次大要）

結納の次第○音物飾樣○目錄認樣○使者心得○使者馳走○目錄受取認樣○里方心得○媒人諸心得○荷物送り並受取樣○里出祝○本酌加へ役心得○神前供床飾樣○長伸鮑銚子瓶子飾樣○島臺押臺用意○婚式要用道具○料理人の事○嫁入途中並着の心得○式三獻三々九度盃仕樣○色直盃仕樣○親子盃仕樣○兄弟盃仕樣○座敷客居主居着座心得○婚禮當日惣体の獻立○結盃仕樣○嫁土產披露○三日目皆子餅飾樣○里開聟入心得○婚禮一通包物拵方の圖等

百九十二條に別て委細を詳述せられたり實に我國唯一の婚禮書なるのみならず直に實用に供し得る無比の良書なれば家々必ず備ふべき至大の寶典なり又禮法を學習せらる丶貴媛諸嬢は禮節の參考として必ず一讀を要すべき良書なり

發行所　東京市日本橋區通二丁目　嵩山房　小林新兵衛

新刊發賣廣告

福羽美靜大人序文
下田義天類大人校定
指原乙子女史編纂

女子文章軌範

全一册
和裝美本
定價金參拾錢
郵稅金四錢

本書は上長德の頃より下明治の初年に至る九百年間に輩出せし名媛紫式部、清少納言、相摸、阿佛尼、鵜殿よの子、弓屋しづ子、三島さや子、荷田蒼生子、西三條實條公後室、柏原氏の母、馬場存義の母千代、梶女、千代能、その女、河内狭子等の傑作中に就き其の最も精を拔き粋を收めて消息、記事、紀行、哀傷、序跋、教訓、論文の七門に分ち毎章末に其の作法を詳解し倘難句古事地名等には一々其の句意語法出所本源を注釋して、我國文の構造及雅趣を會得するの捷徑たらしむ加之善く本書を熟讀せば又以て本邦婦人獨得の長處たる脩身齊家の一助たらん是を以て學校用書に適するは論なく家庭の諸媛も亦各一本を得て座右に備へば必ず無比の好伴侶たらん

發行所
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
株式會社 國光社

山崎忠和著　（彩色精版口繪並に挿畫入）

文久物語

一名寺田屋騷動

洋裝全壹冊
定價金貳拾八錢
郵稅金六錢

寺田屋騷動の名は維新史中の**悲劇**として世人之を知るも其眞事實に至つては今猶**秘密の間に伏在**せり此書當年の事蹟を記すること極めて精確にして**隱微を發き秘密を明にし**彼の奇傑田中河内が同志淸川八郎と僞錦旗の下に天下の大諸侯を飜弄したる機變百出の壯圖を始めとし其間島津久光西郷隆盛眞木和泉平野二郎等諸豪の活躍するあり正に是れ**維新史中の花**として**絕壯絕慘**を極むるの狀髣髴として目睹するが如くあらん宜なり本書一度出でゝ世評の嘖々たるや試に都下新聞の批評を左に掲げて以て其一班を示さん

（東京日々）●●●　浩澣なる史料より其粹を拔き能く錯雜せる事實を明瞭に記載せり田中河内介淸川八郎等の浪士が倒幕の談議を叙するに當時志士が往復したる書簡の字句を以て其儘問答を試みたる如き直に當時の志士に面して革命の大激論を聞くの感あり

（萬朝報）●●●　著者山崎氏は十年間久邇宮邸に在り同前宮の事蹟調査の際其秘錄密記の中より王權維新胚胎の原素を咀嚼し終に此の物語を刊行するに至れり專ら寺田屋騷動を徑となし傍ら當時の志士慷慨家の言行を緯とし世に知られざるの秘密を摘發したるもの少なからず（後略）

（讀賣新聞）●●●　伏見寺田屋騷動の顛末を詳叙したるもの材料精確にして行文亦卒未だ世に現はれざる事蹟を擧げて當時の情狀を發揮したり云々

發行所　東京築地二丁目　株式會社國光社出版部

肝付海軍少將題辭　木村海軍大尉校閲
小笠原海軍大佐序文及作歌
伊東海軍大將手翰

西　圭一
野木衛佐美　合著

訂正第三版

新案

海軍遊戯法

菊版美本
詳圖入
全一冊

定價金貳拾錢
郵稅金四錢

（一）日本は海國なり故に兒童の時より海軍思想を養成せざる可らず

（二）兒童は身体發達の旺盛なる時期なり故に最も体育に重きを措かざる可らず

（三）兒童は興味を感ずる事甚しきものなり故に機に應じて其快樂を正情に導かざる可らず

本書は右三者の目的を達する一助として著者が多年或は兵營に徵し或は海軍將校に質し許多の實驗幾多の考案を積みて星霜を費し漸編成したるものなり、本書によりて以上の目的を養成せんか世上幾百萬の少年子弟精神忽ち活潑勇壯と化し國家一朝事あるに際しては巨艦に從し怒濤を蹴り赫々の偉勳を建て優に海國の臣民たる名に負かざる事刮目企足して俟つべき也、世の教育家父兄諸士の猛省を促す、

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發賣元　株式合社　國光社出版部

國光社編纂

抄譯獨逸讀本

定價金貳拾錢
郵税金四錢
郵劵代用一割増

從六位内藤耻叟序　故正三位文學博士栗田寛著

天朝正學

菊版　定價金參拾五錢
美本　郵税金四錢
全壹冊　郵劵代用一割増

武井義述

執中考附言

和裝半紙本全壹冊
定價金貳拾錢
郵税金貳錢

日本教育

菊版　定價郵税共　金貳拾五錢
全一冊　郵劵代用一割増

濱口吉右衛門著

財政と國力

全壹冊　金貳拾參錢
郵税金四錢
七錢百里以内

發行所
東京市京橋區築地二丁目廿一番地
株式會社國光社出版部

わきが（腋臭症）根治確證藥の新發見！

從來醫療賣藥其他百方手を盡し到底不治の難症と斷念せる腋臭患者は速に當館新發見の根治藥を施し「生きながら地獄」の苦惱を永遠に脱せよ、いか程頑固なる慢性わきがにても本劑を用ゆれば誓つて**根治**すること確證す殊に本劑にて一旦全治せば決して再發或は他病に變ずる患無く生涯再び用藥を要せず是れ他にありふれたる賣藥と異なる處の本劑一種特有の神効なり患者よ速に此根治的新藥を一試して世人の嫌忌する病根を斷絶せよ實に不思議の新發見奇劑なり▲根治的謝狀山の如し來り見よ示す▲（藥價）輕症根治分藥價送料共六拾錢▲重症根治分同上壹圓廿錢、頑固慢性症根治分同上貳圓廿錢　爲替は神田局あて取組の事、切手代用は必ず二割ましの事▲着金即刻送藥す▲（注意）本劑の大略を眞似近時續々怪しき類似僞藥販賣する不德者は深く注意ありて「日新館藥房製劑」の名義に着目して購求あらんことを乞ふ

専賣　東京市神田五軒町拾九番地

日新館藥房（電話本局二一五四六）

血塊月やく忽ち下る醫賣藥

月經調節

調經丸

一藥價壹劑分六拾錢貳劑分壹圓拾錢參劑分壹圓六拾錢特別製分貳圓拾錢切手代用二割增事

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止にても必ず程よく下す特効あり、但し此藥は多量に用ひれば**流產**する恐れなきに非ず故に姙婦に飲むを禁ずる程なれば赤血惡血を一掃すること請合なり▲本劑參劑分を用れば貳參ヶ月閒滯りたる月經にてもキレーニ流下す特別製分を用れば半年以上の月經閉止にても必ず程よく下すこと確證す▲本劑定量を用ゆれば**毒血惡血**を流すが如く浚らひ淸血を加へ身体の健康を保ち元氣を增し勢を加ふ▲總て婦人の病の多くは月經不順に基くものに付月經不順より起る氣衝、頭痛、眩暈、逆上、かたこり、胸わるき、手足腰ひえ、白血、長血、血塊、血ぶとり等の諸病に用ひて必ず根治する無類の特効あり……實に婦人病の王……早く試みよ

（注意）月やく不順或は止るを豫防するには毎月壹度宛本劑壹劑分を服用し置けば決して**止ること無き**を確證する所なり……婦人諸君記聽せよ

（證明）前文御免却說私妻義永々月經不順閉止症の爲め大に困難致し各地病院の治術を受け候も更に其効なく誠に困り居候處去月貴店出賣の調經丸特別製分服藥致させ候に忽ち其効を奏し最早全快至り候間此段御厚禮申上候也次に私近傍の婦人愚妻の全快を傳聞し是非其貴藥取寄せくれとの依賴に付共御手數樣なから特別製分大至急送藥被下度別紙爲替分相添へ御注文旁御謝禮申上候也との書を寄送せしは熊本縣玉名郡高瀨町美並健次郎氏なり其他如斯感謝狀は續々到着して山の如きも紙幅限りあるを以て爰に略す疑わる者は來り見よ示すべし

専賣　東京市神田五軒町拾九番地　電話本局貳五四六番

日新館藥房